

大針6・8・9・11号窯発掘調査報告書

— 多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100号 —

2024

岐阜県 多治見市教育委員会

公益財団法人 多治見市文化振興事業団

例 言

- 1 本書は、岐阜県多治見市大針町字屋作309番1外に所在した大針6号窯（岐阜県遺跡番号21204-07683）、大針8号窯（岐阜県遺跡番号21204-07685）、大針9号窯（岐阜県遺跡番号21204-07686）および多治見市大針町字屋作286番4に所在した大針11号窯（岐阜県遺跡番号21204-07688）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、東海旅客鉄道株式会社による中央新幹線事業に伴い、多治見市教育委員会と多治見市文化振興事業団が実施したものである。
- 3 現地における発掘調査は、第1次調査を平成31年1月9日から令和元年6月17日、第2次調査を令和3年12月1日から令和3年12月23日にかけて実施した。また、出土遺物の1次整理作業は令和元年度及び令和4年度に行った。出土遺物の2次整理作業及び報告書作成業務については令和3年度から令和5年度にかけて実施した。平成30・令和元年度は多治見市教育委員会が、令和2年度以降は多治見市文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査室が業務を担当している。
- 4 発掘調査の諸手続きは岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課の指導を受けた。
- 5 発掘調査業務の体制は以下の通りである。

多治見市教育委員会（平成30年度・令和元年度）

総 指 揮	渡邊 哲郎	多治見市教育委員会教育長
指 導	小木曾郁夫	多治見市文化財審議会会長
事務局長	河本 英樹	多治見市教育委員会副教育長（平成30年度）
	鈴木 稔朗	多治見市教育委員会副教育長（令和元年度）
所 長	佐藤 秀樹	多治見市文化財保護センター所長
発掘担当者	大中 博	多治見市文化財保護センター副所長
調 査 員	各務 嘉洋	多治見市文化財保護センター非常勤職員
発掘作業員	内山 達三 大野 勲 大村 哲哉 小栗 敦 加藤 信夫 木村 学 黒木 政喜 黒田 泰史 小境 一男 佐藤 雅計 柴田 由美 遠山 作治 西田まゆみ 藤村 正美 松本 幸介 武藤 淳司 山本 誠次 渡邊 英剛 渡辺 稔	
整理作業員	榊原真奈美 藤本 千晴 森 佐波	
出 納 事 務	白石 春美	

（公財）多治見市文化振興事業団（令和3～5年度）

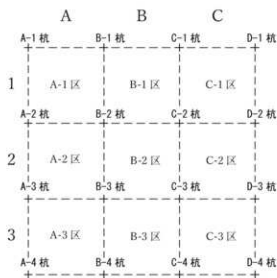
総 指 揮	青山 崇	多治見市文化振興事業団理事長
事務局長	高木 正典	多治見市文化振興事業団理事
担 当 者	各務 嘉洋	多治見市文化振興事業団 埋蔵文化財発掘調査室室長
	尾崎 真央	多治見市文化振興事業団 埋蔵文化財発掘調査室職員
発掘作業員	伊藤 友能 岡山 精治 栗本 征雄 土本 和廣 日置 公彦 藤本 明夫 古田 通彦 村川 利嗣	
整理作業員	榊原真奈美 藤本 千晴 森 佐波	

- 6 発掘調査に要した費用は、事業者である東海旅客鉄道株式会社からの委託金で賄った。

- 7 本書の執筆・編集は各務嘉洋・尾崎真央が行った。また、出土遺物の実測と図版作成は各務嘉洋・尾崎真央が、遺物実測図トレースは神原真奈美・藤本千晴・森佐波が、遺物写真撮影は尾崎真央が行った。
- 8 大針6・8・9号窟における発掘調査前・後の地形測量業務は、株式会社ユニオンに委託した。
- 10 本書に掲載する資料は全て多治見市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 本書で使用する方位は、世界測地系第7系による座標北を基準とする。
- 2 土層断面図に記載される土層の色調は、図面作成者の示す色調と『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所 色票監修）に依拠した。
- 3 本書に掲載する実測図の縮尺は、遺構実測図が1/60、遺物実測図が1/3である。
- 4 調査に際して、4 m×4 mのグリッドを設定した。基準となる杭とグリッドとの関係は下図の通りである。便宜的にグリッド左上の杭にグリッド名と同じ杭番号を振っている。



- 5 碗・小皿等多量に出土した主要器種は、高台または底部を1/2以上残すものを1個体として数えた。すなわち、本文中に示した出土遺物個体数は確認できる最低限の個体数である。なお、少数器種等の小破片であっても個体を識別することが可能な場合はこの限りではない。

目 次

例言	i
凡例	ii
目次	iii
第1章 周辺の環境	1
第1節 地形と地質	1
第2節 周辺の遺跡	1
第2章 発掘調査を実施するに至った経緯と経過	4
第1節 発掘調査に至る経緯	4
第2節 発掘作業の経過	7
第3節 遺物整理と報告書作成作業の経過	11
第3章 調査の成果	14
第1節 大針6号窯	14
第2節 大針8号窯	38
第3節 大針9号窯	60
第4節 大針11号窯	77
第4章 総括	88
写真図版	102

挿図目次

第1図 多治見市の全図と地質図	2
第2図 周辺の地形と遺跡分布図	3
第3図 発掘調査位置図	5
第4図 大針6・8・9号窯 調査前地形図	12
第5図 大針6・8・9号窯 調査後地形図	13
第6図 大針6号窯 グリッドおよび遺構配置図	14
第7図 大針6号窯 窯体実測図	16
第8図 大針6号窯 物原土層断面実測図	17
第9図 大針6号窯 出土遺物法量分布図	21
第10図 大針6号窯 出土遺物実測図(1)	29
第11図 大針6号窯 出土遺物実測図(2)	30
第12図 大針6号窯 出土遺物実測図(3)	31
第13図 大針6号窯 出土遺物実測図(4)	32
第14図 大針6号窯 出土遺物実測図(5)	33
第15図 大針6号窯 出土遺物実測図(6)	34
第16図 大針6号窯 出土遺物実測図(7)	35

第 17 図	大針 6 号窟	出土遺物実測図 (8)……………	36
第 18 図	大針 6 号窟	出土遺物実測図 (9)……………	37
第 19 図	大針 8 号窟	グリッドおよび遺構配置図……………	39
第 20 図	大針 8 号窟	窟体実測図 (1)……………	40
第 21 図	大針 8 号窟	窟体実測図 (2)……………	41
第 22 図	大針 8 号窟	前庭部実測図……………	42
第 23 図	大針 8 号窟	SK2 実測図……………	43
第 24 図	大針 8 号窟	SK3 実測図……………	44
第 25 図	大針 8 号窟	物原土層断面実測図……………	45・46
第 26 図	大針 8 号窟	掘り抜き排土断面実測図……………	47
第 27 図	大針 8 号窟	焚口前炭化樹皮検出状況実測図……………	47
第 28 図	大針 8 号窟	出土遺物法量分布図……………	50
第 29 図	大針 8 号窟	出土遺物実測図 (1)……………	54
第 30 図	大針 8 号窟	出土遺物実測図 (2)……………	55
第 31 図	大針 8 号窟	出土遺物実測図 (3)……………	56
第 32 図	大針 8 号窟	出土遺物実測図 (4)……………	57
第 33 図	大針 8 号窟	出土遺物実測図 (5)……………	58
第 34 図	大針 8 号窟	出土遺物実測図 (6)……………	59
第 35 図	大針 9 号窟	グリッドおよび遺構配置図……………	60
第 36 図	大針 9 号窟	窟体実測図 (1)……………	62
第 37 図	大針 9 号窟	窟体実測図 (2)……………	63
第 38 図	大針 9 号窟	SK1 実測図……………	64
第 39 図	大針 9 号窟	物原土層断面実測図……………	65・66
第 40 図	大針 9 号窟	掘り抜き排土断面実測図……………	67
第 41 図	大針 9 号窟	出土遺物法量分布図……………	69
第 42 図	大針 9 号窟	出土遺物実測図 (1)……………	72
第 43 図	大針 9 号窟	出土遺物実測図 (2)……………	73
第 44 図	大針 9 号窟	出土遺物実測図 (3)……………	74
第 45 図	大針 9 号窟	出土遺物実測図 (4)……………	75
第 46 図	大針 9 号窟	出土遺物実測図 (5)……………	76
第 47 図	大針 11 号窟	調査前地形図……………	78
第 48 図	大針 11 号窟	調査後地形および遺構配置図……………	78
第 49 図	大針 11 号窟	SK1 実測図および土層断面実測図……………	79
第 50 図	大針 11 号窟	出土遺物法量分布図……………	82
第 51 図	大針 11 号窟	出土遺物実測図 (1)……………	84
第 52 図	大針 11 号窟	出土遺物実測図 (2)……………	85
第 53 図	大針 5 号窟	出土遺物実測図……………	87

付表目次

第1表	大針6号窟	グリッド別出土遺物個体数表	18
第2表	大針8号窟	グリッド別出土遺物個体数表	48
第3表	大針9号窟	グリッド別出土遺物個体数表	68
第4表	大針11号窟	グリッド別出土遺物個体数表	81
第5表	大針6号窟	出土遺物観察表	91
第6表	大針8号窟	出土遺物観察表	94
第7表	大針9号窟	出土遺物観察表	97
第8表	大針11号窟	出土遺物観察表	100

写真図版目次

写真図版1	大針6号窟調査区全景	102
写真図版2	大針8・9号窟調査区全景	103
写真図版3	大針6号窟発掘調査(1)	104
写真図版4	大針6号窟発掘調査(2)	105
写真図版5	大針6号窟発掘調査(3)、大針8号窟発掘調査(1)	106
写真図版6	大針8号窟発掘調査(2)	107
写真図版7	大針8号窟発掘調査(3)	108
写真図版8	大針8号窟発掘調査(4)	109
写真図版9	大針8号窟発掘調査(5)	110
写真図版10	大針9号窟発掘調査(1)	111
写真図版11	大針9号窟発掘調査(2)	112
写真図版12	大針9号窟発掘調査(3)	113
写真図版13	大針11号窟発掘調査	114
写真図版14	大針6号窟出土遺物(1)	115
写真図版15	大針6号窟出土遺物(2)	116
写真図版16	大針6号窟出土遺物(3)	117
写真図版17	大針8号窟出土遺物(1)	118
写真図版18	大針8号窟出土遺物(2)	119
写真図版19	大針8号窟出土遺物(3)	120
写真図版20	大針9号窟出土遺物(1)	121
写真図版21	大針9号窟出土遺物(2)	122
写真図版22	大針11号窟出土遺物	123

第1章 周辺の環境

第1節 地形と地質（第1図）

多治見市は岐阜県の南東部に位置し、北側を可児市、東側を土岐市、西側を愛知県犬山市及び春日井市、南側を愛知県瀬戸市と接している。市域の中心部は土岐川によって開かれた標高100m前後の沖積地が広がりこれを周囲の山が囲む典型的な盆地をなしている。特に多治見市西部にみられる急峻な山地は、現在のJ中央線古谷駅付近からJ太多線姫駅方面に南北に延びる華立断層により形成されたもので標高416.6mの高社山を最高位としている。この山地の基盤はチャート・砂岩など中生層基盤岩類である。

発掘調査を行った大針地区は高社山の山麓（北東側）、華立断層の東に近接した地域にあたり、周辺は標高180m前後の低丘陵山地となっている。低丘陵山地は、土岐川の支流である大原川や、木曾川の支流である姫川に合流する小支流によって浸食を受け、丘陵尾根と支谷が複雑に入り組んだ地形を形成する。また、基盤は新生代新第三期（鮮新世）に古木曾川によってもたらされた多量の砂礫によって形成され、現在「瀬戸層群」と呼ばれている。なお、東濃地方では上位の「土岐砂礫層」と下位の「土岐口陶土層」に分けることが多く、これらは良質な陶土として当地域の窯業を支えてきた。

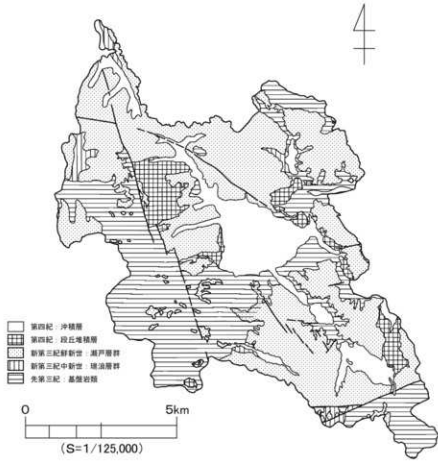
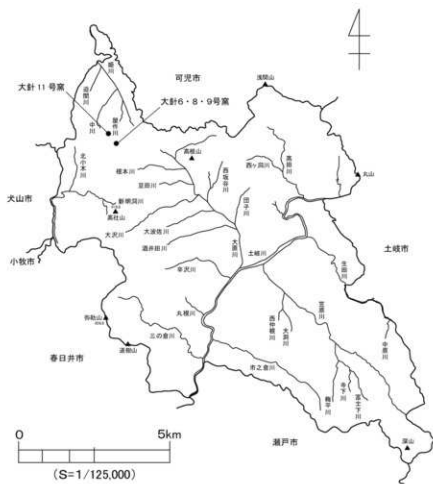
第2節 周辺の遺跡（第2図）

大針地区は、多治見市内で最も早く窯業生産が行われた場所の一つである。その大針地区と同時期に窯業生産が行われた北丘地区も合わせて一つの窯跡群を形成していると考えられる。ここでは、北丘・大針地区として扱うこととする。

北丘・大針地区は、古代から中世にかけての古窯跡が現在明らかになっているだけで約65基存在していることがこれまでの調査によって明らかとなっている。いずれも単室の地下式あるいは半地下式の窯で、基盤である土岐砂礫層を掘削し築窯される。今回調査を行った大針6号窯、大針8号窯、大針9号窯、大針11号窯は北丘・大針窯跡群を構成する窯跡である。

北丘・大針地区は、これまでの各種開発に伴い窯跡の発掘調査が多治見市教育委員会により行われてきた。昭和53～55年、北丘町での大規模宅地造成により8世紀代須恵器窯（北丘4・5号窯）、9～10世紀代の灰釉陶器窯（北丘7・8・14・15・21号窯）、12～13世紀代の山茶碗窯（北丘9・10・12・13・16・17・18・19号窯）等が発掘調査されている。これらの調査によって東濃地域の窯業史研究が大きく飛躍する契機となった。昭和57年、9～10世紀代の灰釉陶器窯（北丘25・26号窯）、平成2年（1991年）、8～9世紀代の須恵器窯（北丘35号窯）が共に宅地造成により発掘調査が実施されている。昭和61年には、岐阜県により国道248号線道路改良工事に伴い9～10世紀の灰釉陶器窯（北丘27号窯、大針1・3号窯）、12～13世紀代の山茶碗窯（大針2・5号窯）の発掘調査が行われた。このうち、大針3号窯は灰釉陶器窯に伴う工房跡が検出されている。また、大針2号窯では焼成室床面下に碗等を伏せ置いた施設が確認されている。

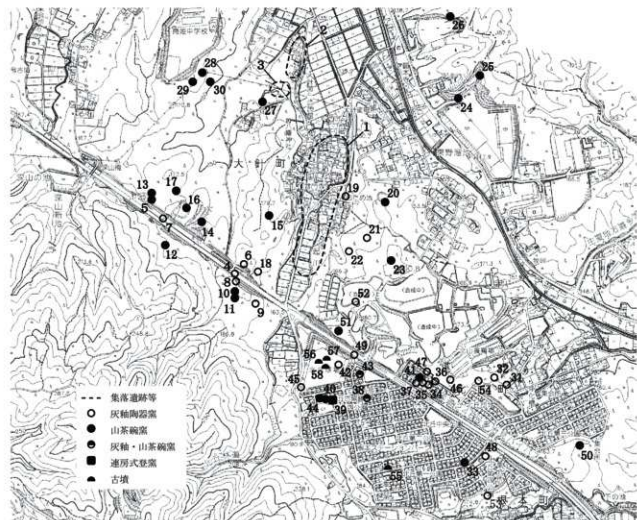
しばらく期間をおいて、平成18年と平成26年には造成工事に伴い12世紀代の山茶碗窯（大針14号窯）と13世紀初頭の山茶碗窯（大針15号窯）が発掘調査されている。平成22年（2010年）、大型の物流センター建設計画に伴い10世紀代の灰釉陶器窯（大針起4号窯）、12世紀代の山茶碗窯（北丘30号窯）の発掘調査が行われている。なお、北丘30号窯は先述した大針2号窯と同様に焼成室床面下に碗等を伏せ置い



第1図 多治見市の全図(上段)と地質図(下段) S=1/125,000

た施設が検出されている。

これまでの調査・研究により北丘・大針地区は東濃地方では最も古い9世紀後半に稼働した灰軸陶器窯が多く分布し、その生産は10世紀後半まで継続して行われることが明らかとなっている。しかし、11世紀以降になると灰軸陶器生産は途絶し、生産の拠点が大針地区から明和・虎渓山地区に移行する。再び北丘・大針地区での山茶碗生産が始まるのは12世紀後半から13世紀後半まで続けられるが、14世紀以降の窯は大針地区から姿を消している。当該地区にて窯業が再開されるのは、18世紀後半の連房式登窯(北丘11号窯)が築窯されるまで待たなければならない。以上が北丘・大畑地区を中心とした遺跡である。遺跡の主体は古窯跡で、特に13世紀代から15世紀代の山茶碗窯の分布がこの地区の特徴となっている。



1. 大針起遺跡 2. 大針屋作遺跡 3. 大針八幡神社遺跡 4. 大針1号窯 5. 大針2・5号窯
6. 大針3号窯 7. 大針4号窯 8. 大針6号窯 9. 大針7号窯 10. 大針8号窯
11. 大針9号窯 12. 大針10号窯 13. 大針11号窯 14. 大針12号窯 15. 大針13号窯
16. 大針14号窯 17. 大針15号窯 18. 大針16号窯 19. 大針起1号窯 20. 大針起2号窯
21. 大針起3号窯 22. 大針起4号窯 23. 大針起5号窯 24. 大針堀井戸1号窯
25. 大針堀井戸2号窯 26. 大針堀井戸3号窯 27. 大針屋作4号窯 28. 大針屋作5号窯
29. 大針屋作6号窯 30. 大針屋作7・8号窯 31. 北丘1号窯 32. 北丘2号窯 33. 北丘3号窯
34. 北丘4・5号窯 35. 北丘6号窯 36. 北丘7号窯 37. 北丘8号窯 38. 北丘9・10・14・16号窯
39. 北丘11号窯 40. 北丘12号窯 41. 北丘13号窯 42. 北丘15号窯
43. 北丘17・18・20号窯 44. 北丘19号窯 45. 北丘22号窯 46. 北丘23号窯
47. 北丘24号窯 48. 北丘25・26号窯 49. 北丘27号窯 50. 北丘28・29・31・32号窯
51. 北丘30号窯 52. 北丘33号窯 53. 北丘34号窯 54. 北丘35号窯
55. 北丘1号古墳 56. 北丘2号古墳 57. 北丘3号古墳 58. 北丘4号古墳

第2図 周辺の地形と遺跡分布図 S=1/12,500

(多治見市都市計画図 1/25,000 を拡大、加筆)

第2章 発掘調査を実施するに至った経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

1. 大針6・8・9号窯

平成29年、東海旅客鉄道株式会社は、多治見市大針町屋作309番1外の山林約31,900㎡及び大針町屋作278番外の山林約59,600㎡において中央新幹線事業用地造成を計画した。この計画を受け多治見市教育委員会は事業者に対し、当該地には周知の埋蔵文化財包蔵地である大針6号窯、大針7号窯、大針8号窯、大針9号窯が存在すること、またこれらの遺跡以外に未周知の埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性が高いことを伝え、事前の確認調査（現地踏査）を実施するよう指導した。

その後、事業者より埋蔵文化財確認申請書（平成29年10月30日付）が多治見市教育委員会に提出され、平成29年11月30日に多治見市文化財保護センターが計画地内の確認調査（現地踏査）を事業者立会いのもと行った。この結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である大針6・7・8・9号窯は残存状態が良好で、遺物の散布状況等からその推定範囲を確認することができた。

その後、窯跡の取り扱いについて、事業者と多治見市教育委員会との間で協議が行われ、事業者側から造成計画の設計上現状のまま保存することは不可能であることの説明がなされた。

協議の結果、現状保存が困難な大針6・8・9号窯は造成工事実施前に記録保存のための発掘調査を行うこと、その発掘調査は事業者から多治見市教育委員会が委託を受けて実施することで意見が一致した。大針7号窯に関しては、残地森林として開発工事による影響がない範囲にあることが確認され、発掘調査対象から除外された。その後、開発許可や地元住民の同意の取得に時間を要し、平成30年8月27日付けで東海旅客鉄道株式会社を委託者、多治見市教育委員会を受託者とする発掘調査委託契約の締結が行われ、平成31年1月9日から現地調査を実施した。なお、本委託事業は平成31年2月28日、令和3年5月26日付けで内容変更に伴う変更契約が締結された。

【事務手続き】

①「埋蔵文化財確認申請書」（平成29年10月30日付）

発信者：東海旅客鉄道株式会社 中央新幹線推進本部 中央新幹線建設部名古屋建設部 中央新幹線岐阜工事事務所所長 梅村 哲夫 発信先：多治見市教育委員会

②「埋蔵文化財確認調査の結果について」（平成29年11月30日付）

発信者：多治見市教育委員会教育長 渡邊 哲郎 発信先：東海旅客鉄道株式会社 中央新幹線推進本部 中央新幹線建設部名古屋建設部 中央新幹線岐阜工事事務所所長 梅村 哲夫

③文化財保護法第93条第1項「埋蔵文化財発掘の通知について」（平成30年6月8日付）

発信者：東海旅客鉄道株式会社 中央新幹線推進本部 中央新幹線建設部名古屋建設部 中央新幹線岐阜工事事務所所長 梅村 哲夫 発信先：岐阜県教育委員会教育長

④「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」（平成30年6月26日付）

発信者：岐阜県教育委員会教育長 安福 正寿 発信先：東海旅客鉄道株式会社 中央新幹線推進本部 中央新幹線建設部名古屋建設部 中央新幹線岐阜工事事務所所長 梅村 哲夫

⑤文化財保護法第99条第1項「埋蔵文化財発掘調査の報告について」（平成31年1月9日付）

発信者：多治見市教育委員会教育長 渡邊 哲郎 発信先：岐阜県教育委員会教育長

⑥「埋蔵文化財の発掘調査について（通知）」（平成31年1月18日付）

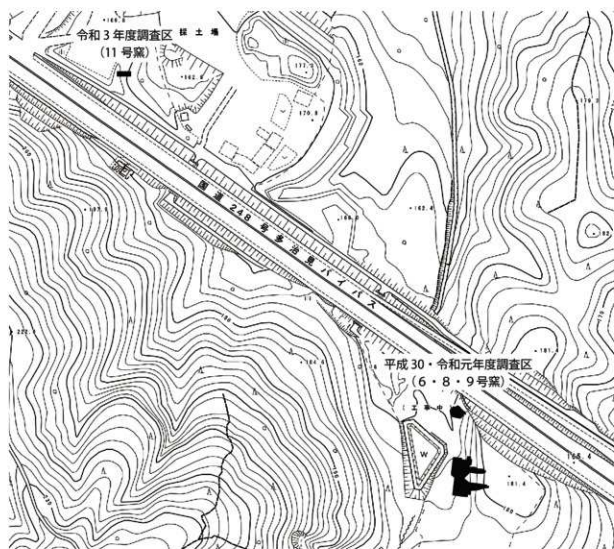
発信元：岐阜県教育委員会教育長 安福 正寿 発信先：多治見市教育委員会教育長 渡邊 哲郎

⑦「発掘調査終了報告書」（令和元年6月20日付）

発信者：多治見市教育委員会教育長 渡邊 哲郎 発信先：岐阜県教育委員会教育長

2. 大針11号窯

多治見市文化財保護センターが実施してきた埋蔵文化財調査業務は、令和2年度より公益財団法人多治見市文化振興事業団（以下「事業団」と略す）に新設された埋蔵文化財発掘調査室に委託されることとなった。令和3年、多治見市教育委員会及び埋蔵文化財発掘調査室は、平成29年の確認調査で埋蔵文化財が存在しないと多治見市教育委員会が回答した事業用地（大針町屋作286番4）に関し、事業関係者より再確認の相談を受けた。同年9月、地表に山茶碗が散布していることを事業者と多治見市教育委員会及び埋蔵文化財発掘調査室職員が確認し、周知の埋蔵文化財である大針11号窯に該当する可能性が高いことが分かった。この結果を受け、事業者と多治見市教育委員会及び埋蔵文化財発掘調査室で協議が行われ、早急に現地の再



第3図 発掘調査位置図 S=1/3,000
(多治見市都市計画図1/2,500を縮小、加筆)

確認調査をする意見で一致した。同年10月4～6日にかけて埋蔵文化財発掘調査室が計画地内の確認調査を行った。対象地内の地表面には山茶碗が散乱しており、観察する限りでは流入土または攪乱土に伴う遺物であると判断したが、大針11号窯の窯体が存在する可能性があるため、窯体の存在を想定させる地形にトレンチを設定し人力で掘削調査を行った。この結果、窯体の痕跡は検出されず窯体は所在しないと判断したが、地山上に大針11号窯の物原と推測される厚さ20cm程の遺物包含層が堆積していることを確認した。

その後、窯跡の取り扱いについて、事業者と多治見市教育委員会及び埋蔵文化財発掘調査室との間で協議が行われ、事業者側から造成計画の設計上現状のまま保存することは不可能であることの説明がなされた。協議の結果、現状保存が困難な大針11号窯に関して造成工事実施前に記録保存のための発掘調査を行うこと、その発掘調査は事業者と多治見市教育委員会及び事業団が発掘調査に係る三者協定を締結し、事業団が事業者から委託を受けて実施することで意見が一致した。その後、令和3年11月19日付けで東海旅客鉄道株式会社と多治見市教育委員会、事業団とで発掘調査業務に係る三者協定を締結し、同年11月25日付けで東海旅客鉄道株式会社を委託者、事業団を受託者とする発掘調査業務委託契約書の締結が行われた。

【事務手続き】

- ①「埋蔵文化財確認調査の結果について（追加通知）」（令和3年10月22日付）
発信者：多治見市教育委員会教育長 渡邊 哲郎 発信先：東海旅客鉄道株式会社 中央新幹線推進本部 中央新幹線建設部名古屋建設部 中央新幹線岐阜工事事務所所長 岡崎 真人
- ②文化財保護法第93条第1項「埋蔵文化財発掘の通知について」（令和3年10月27日付）
発信者：東海旅客鉄道株式会社 中央新幹線推進本部 中央新幹線建設部名古屋建設部 中央新幹線岐阜工事事務所所長 岡崎 真人 発信先：岐阜県知事
- ③「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」（令和3年11月18日付）
発信者：岐阜県知事 古田 肇 発信先：東海旅客鉄道株式会社 中央新幹線推進本部 中央新幹線建設部名古屋建設部 中央新幹線岐阜工事事務所所長 岡崎 真人
- ④文化財保護法第92条第1項「埋蔵文化財発掘調査の報告について」（令和3年11月19日付）
発信者：公益財団法人多治見市文化振興事業団理事長 青山 崇 発信先：岐阜県知事
- ⑤「埋蔵文化財の発掘調査について（通知）」（令和3年12月1日付）
発信元：岐阜県知事 古田 肇 発信先：公益財団法人多治見市文化振興事業団理事長 青山 崇
- ⑥「現地発掘作業完了届」（令和3年12月27日付）
発信者：公益財団法人多治見市文化振興事業団理事長 青山 崇 発信先：多治見市教育委員会教育長
- ⑦「現地発掘作業完了確認通知書」（令和4年1月5日付）
発信者：多治見市教育委員会教育長 渡邊 哲郎 発信先：東海旅客鉄道株式会社 中央新幹線推進本部 中央新幹線建設部名古屋建設部長 新美 憲一
- ⑧「現地発掘作業完了確認通知書」（令和4年1月5日付）
発信者：多治見市教育委員会教育長 渡邊 哲郎 発信先：公益財団法人多治見市文化振興事業団理事長 青山 崇
- ⑨「発掘調査終了報告書」（令和4年1月13日付）
発信者：多治見市教育委員会教育長 渡邊 哲郎 発信先：岐阜県教育委員会教育長

第2節 発掘作業の経過

大針6・8・9号窯の現地における発掘作業は、平成31年1月9日から令和元年6月17日まで実施した。発掘調査の実働日数は84日間、調査面積は約590㎡である。調査は大針9号窯から開始し、次いで大針8号窯、大針6号窯の順に調査を実施した。調査にあたっては、現況地形を株式会社ユニオンが測量している。その後、予想される窯体の主軸方向を基準にし、調査区域に4mピッチのグリッド杭を設定した。これ以降の掘削・排土作業等は全て人力にて実施した。基本的に各グリッド境を結ぶ幅60cmのブリッジを設け土層の断面観察を行い、検出された遺構覆土等の観察のために適宜ブリッジを設定した。また、発掘調査実施後の地形測量も株式会社ユニオンが行っている。

大針11号窯の現地における発掘作業は、令和3年12月1日から令和3年12月23日まで行った。発掘調査の実働日数は12日間、調査面積は約24㎡である。調査にあたっては、予想される窯体の主軸方向を基準にし、調査区域に4mピッチのグリッド杭を設定した。これ以降の掘削・排土作業等は全て人力にて実施した。

大針6・8・9号窯調査日誌（抄）

平成31年・令和元年

- 1月9日 発掘作業員とのミーティングの後、現場への器材搬入及びテントの設置。大針9号窯調査区域の表土掘削を開始。
- 10日 U-2・3区及びV-2・3区から9号窯の検出作業の実施。窯体覆土観察ベルトにて地表下約70cmで窯壁の赤色被熱土を確認。
- 11日 V-2～4区内で9号窯燃焼室から焼成室にかけて窯体プラン検出作業の実施。V-4区にて窯体覆土上半から焼成不足の碗がまとまって検出され始める。
- 15日 U・V-1区へ調査範囲を広げる。引き続き窯体プラン検出作業の実施。一部、V-2～4区にて燃焼室から焼成室にかけて覆土掘削を開始。
- 16日 U・V-1区において9号窯煙道部の先端部を確認。焼成室上方から煙道部にかけて窯体プランが確認される。
- 17日 煙道部より炭化した木材を検出。ダンパーに関連するものと推測される。焼成室床面を上方より検出作業を行う。なお、焼成室覆土観察ベルト周辺では一部焼台が正位置で確認。
- 18日 覆土観察ベルトを残し、窯体をほぼ検出。分焰柱は基底部のみ検出。V-4区、焚口の右脇には床面より高いレベルで黒灰の堆積を確認。U-5区、V-6区の表土掘削を開始する。
- 21日 9号窯焼成室覆土断面の清掃及び写真撮影。引き続きU-5区、V-5・6区の掘削作業。
- 23日 9号窯焼成室覆土断面実測図の作成。V-5区、V-4区で確認された黒灰の堆積は広がらず、掘り抜き排土上面まで検出する。V-6区、遺物包含層の掘削。遺物包含層下に現れた灰黄砂質土が掘り抜き排土下に潜ると想定されたため、サブレンチを設定し一部掘削。U-6区、V-7区、表土掘削作業の開始。
- 24日 9号窯焼成室覆土断面実測図の注記作業及び覆土観察ベルト撤去作業。
- 28日 引き続き9号窯覆土観察ベルト撤去作業。
- 29日 9号窯床面検出作業。U-6区、V-7区の地山面検出作業。W-4区、表土掘削作業の開始。
- 31日 9号窯全体清掃及び窯体完掘状況の写真撮影。U-6区、V-6区東壁土層断面図及びV-7区東壁・北壁土層断面図の写真撮影。

- 2月1日 U-6区、V-6区東壁土層断面図及びV-7区東壁・北壁土層断面図の実測図作成作業。W-4区、U-7区の掘削作業。
- 5日 窠体実測用の割付作業。
- 7日 窠体実測用の割付完了。9号窠平面図作成作業の開始。
- 8日 9号窠平面図作成作業。
- 12日 9号窠平面図・縦断面図・横断面図作成作業。
- 13日 9号窠平面図・縦断面図・横断面図概ね完了。V-6区北壁土層断面図概ね完了。
- 14日 U-5区、V-5区、V-6区の土層観察ベルトの撤去作業。U-7区東壁土層断面図の写真撮影及び実測図作成作業。V-7区北壁土層断面図作成作業。W-5区の表土掘削作業の開始。
- 15日 引き続きW-5区の掘削作業。W-6区、X-5区の表土掘削作業の開始。
- 18日 引き続きW-6区、X-5区の掘削作業。W-6区の北壁土層断面図の写真撮影。W-7区、X-6・7区の表土掘削作業の開始。W-2・3区の平坦面と思われる地点に幅0.8mのサブレンチの設定。
- 20日 W-5区の北壁土層断面図の写真撮影及び実測図作成。W-6区東壁・北壁土層断面図の写真撮影及び実測図作成。8号窠の推定位置(R・S-3区)に覆土観察ベルトを設定し、表土掘削作業の開始。
- 21日 W-5区、W-6区の土層観察ベルトの撤去作業。W・X-7区の地山面検出作業。引き続き8号窠の窠体検出作業。R・S-5区にて窠壁の赤色被熱土を確認。
- 22日 W・X-7区東壁・北壁土層断面図の写真撮影。S-4・5区にて8号窠の窠体検出作業。
- 25日 W・X-7区東壁・北壁土層断面図の実測図の作成作業。引き続きS-4区の掘削作業を行い、窠体プランを検出。R・S-5区の焚口前を掘削する。
- 26日 W・X-7区の土層観察ベルトの撤去作業。9号窠完掘状況の写真撮影のために全体清掃を行う。
- 27日 全区清掃後、9号窠完掘状況の写真撮影。8号窠ではS-5区の窠体焚口前の掘削作業。引き続きS-4区の掘削作業。
- 3月1日 S-5区の焚口前にて炭化した樹皮を検出し、写真撮影及び実測図を作成。R・S-3区では煙道部付近の窠体プランの検出作業。物原部T-6区(南半部)を一部の掘削開始。
- 5日 傾ユニオンによる9号窠の調査後地形測量の実施。R・S-1区、R・S-2区にて8号窠焼成室上方から煙道部の窠体プランの検出作業。S-3・4区での覆土上半の掘削作業。
- 6日 引き続きR・S-1区、R・S-2区にて8号窠焼成室上方から煙道部の窠体プランの検出作業。S-3・4区での窠体覆土上半の掘削作業。
- 7日 S-4区焼成室覆土の掘削作業。物原部T-6・7区の一部を掘削。
- 8日 焼成室覆土断面の写真撮影。R・S-2区にて煙道部の窠体プラン検出作業。S・T-5区にて掘削作業。
- 14日 焼成室覆土断面図の作成作業。T-7区東壁・北壁土層断面図の写真撮影。R・S-2区煙道部の検出作業。S・T-6区の表土掘削作業の開始。
- 15日 R・S-3区にて焼成室から煙道部覆土の掘削作業。S・T-6区にて黒灰層の掘削、掘り抜き排土上面を検出。S-7区の表土掘削作業の開始。
- 18日 R・S-3区にて焼成室から煙道部覆土の掘削作業。R・S-4区も一部掘削を開始する。S-7区掘り抜き排土上面検出のため作業。
- 19日 S-3・4区焼成室覆土の掘削作業。S-5区焚口前の炭化樹皮の撤去作業。掘り進めたところ焚口前右側に土坑状遺構を確認しSK2とした。

- 20日 R・S-4区の焼成室覆土及び窯体プランの検出作業。S-5区燃焼室覆土下層の掘削作業。引き続きS-7区の掘削作業。
- 22日 R・S-3区、R・S-4区の焼成室覆土掘削及び窯体プラン検出作業。物原部T-7区（北半部）の表土掘削作業の開始。
- 25日 引き続き焼成室覆土下層の掘削作業。S・T-7区にて地山面検出。R-7区表土掘削作業の開始。
- 26日 分焰柱及び燃焼室から焼成室床面・壁面の検出作業。引き続きR-7区の掘削作業。
- 27日 8号窯の全体清掃及び窯体完掘状況の写真撮影。S・T-6区、S・T-7区の東壁土層断面の写真撮影。
- 28日 窯体実測用の削付作業。R-7区の掘削作業。R-5区の表土掘削作業の開始。
- 29日 窯体実測用の削付作業完了。Q-5・7区の表土掘削作業の開始。
- 4月1日 8号窯平面図作成作業。
- 2日 8号窯縦断面図・横断面図の作成作業。
- 3日 8号窯平面図完了。Q-5区内の土坑状遺構（SK3）覆土断面の写真撮影。
- 4日 8号窯縦断面図・横断面図の作成作業。右側壁の観察・注記作業。
- 5日 8号窯右側壁の観察・注記完了。Q-5区の土坑状遺構（SK3）覆土断面図の観察・注記完了。Q-7区の掘削作業。
- 8日 Q-5区内土坑状遺構（SK3）の平面プランを確認するため掘削作業の開始。引き続きQ-7区の掘削作業。
- 12日 引き続きQ-5区内土坑状遺構（SK3）の平面プランを確認するため掘削作業。Q-7区にて地山面検出作業。S・T-6区、S・T-7区北壁土層断面図の作成作業。
- 15日 Q-5区内土坑状遺構（SK3）の平面プランを確認するためP-5区へ2m拡張。R-6区表土掘削作業の開始。S・T-6区内の土層観察ベルトの撤去作業。T-6・7区南壁土層断面図の作成作業。
- 16日 引き続きR-6区の掘削作業。T-6・7区内の土層観察ベルトの撤去作業。
- 18日 引き続きR-6区の掘削作業及びT-7区内の土層観察ベルトの撤去作業。T-8区の表土掘削作業の開始。S-6・7区北壁土層断面図の作成作業。
- 19日 引き続きR-6区の掘削、掘り抜き排土上面を確認。S-6・7区北壁土層断面図の観察・注記完了及び土層観察ベルトの撤去作業。T-8区の掘削、地山面を検出。
- 22日 S-5区内SK2覆土断面図の作成後、完掘状況の写真撮影。S-8区の掘削作業、北壁土層断面の写真撮影。T-8区土層観察ベルトの撤去作業。
- 23日 R-6区内東壁土層断面図の作成及び観察と注記。Q-7区内東壁土層断面、R-7区内東壁・北壁土層断面の写真撮影。及びQ・R-7区東壁土層断面図の作成及び観察・注記。Q・R-8区の表土掘削作業の開始。
- 25日 R・S-6区、土層観察ベルトの撤去作業、窯体主軸に直交する形で溝状遺構プランを検出、SD1とした。Q-6区の表土掘削作業の開始。S-8区、北壁土層断面図の作成及び土層観察ベルトの撤去作業。
- 26日 引き続きQ-6区の掘削作業。S-8区、土層観察ベルトの撤去作業。R区北壁土層観察ベルトを残し物原部完掘。R-6・7・8区北壁土層断面図の作成作業。
- 5月4日 R-6・7・8区、北壁土層断面図の作成作業及び観察・注記。
- 7日 Q-6区東壁土層断面、R-8区北壁土層断面の写真撮影及び実測図作成。物原部に残存していたR区北壁土層観察ベルトの撤去、物原部完掘。S-5区内のSK2の平面図実測作業。R・S-6区にて確認されたSD1覆土断面の写真撮影及び実測図作成。8号窯全体清掃の開始。

- 8日 引き続き8号窯全体清掃及び完掘状況の写真撮影。6号窯の調査範囲設定及び物原部B-2区の掘削作業を開始。
- 9日 B-1・2区、6号窯の窯体検出作業、調査範囲内に窯体下方1/3程度を検出。引き続き物原部B-2区の掘削作業、大半が攪乱盛土。物原部A-2区の表土掘削作業の開始。
- 10日 調査範囲内において6号窯を完掘及び写真撮影。引き続きA-2区の掘削作業。物原部B-2区にて攪乱盛土掘削後、黒灰層を検出。物原部B-3区、C-2区の掘削作業開始。
- 13日 6号窯焼成室覆土断面図の作成作業。引き続きB-3区、C-2区の掘削作業。
- 15日 B-3区及びC-2区の掘削作業、C-2区では地山面検出。C-3区表土掘削作業の開始、攪乱を受けているが部分的に地山面を確認。
- 16日 A-3区及びB-4区に調査範囲を広げる。C-3区地山面検出作業。A・B-3区内東壁・北壁土層断面の写真撮影。土層観察ベルト以外はほぼすべて完掘。
- 20日 物原部、東壁・北壁土層断面の写真撮影及び実測図作成。D-1区に作業場等の確認トレンチを設定。
- 22日 物原部、東壁・北壁土層断面図の観察と注記完了。土層観察ベルトの撤去作業、物原部完掘。
- 23日 6号窯調査区全体清掃及び写真撮影。B-2区地山面に一部黒灰の落ち込みを検出したが、攪乱盛土と判断。窯体実測用の割付作業及び測量ポイントの座標測量。
- 24日 6号窯検出部分の平面図及び縦・横断面図の実測図の作成。9号窯焚口右前のSK1完掘状況の写真撮影及び平面図・縦断面図の実測図作成及び観察・注記。
- 27日 9号窯の窯体及び掘り抜き排土断ち割りラインの設定。側ユニオンによる6・8号窯調査区完掘後の地形測量。
- 29日 雨の影響で全調査区にて水汲み作業。
- 30日 6号窯の窯体断ち割りラインの設定。8号窯の窯体及び掘り抜き排土断ち割りラインの設定、窯体断ち割り掘削作業の開始。引き続き9号窯の窯体断ち割り作業、掘り抜き排土の掘削作業完了。
- 31日 引き続き8号窯の窯体断ち割り作業、掘り抜き排土の掘削作業の開始。9号窯の窯体断ち割り作業完了、清掃後全体及び各ライン断ち割り断面の写真撮影。
- 6月3日 6号窯の窯体断ち割り作業開始。掘り抜き排土断ち割りラインの設定し掘削開始。8号窯の窯体断ち割り作業完了、引き続き掘り抜き排土掘削作業。9号窯掘り抜き排土断面図の作成作業。
- 4日 6・8号窯の窯体断ち割り及び掘り抜き排土掘削作業完了、清掃後に写真撮影。
- 5日 一部器材を残し、現場撤収作業。6・8号窯の遺構実測のため割付作業。8号窯の掘り抜き排土断面図の作成作業。
- 6日 6号窯掘り抜き排土断面図の作成、観察・注記も完了。断ち割りラインの実測図の作成。8号窯、土坑状遺構(SK3)の平面図及びエレベーション図作成。前底部SD1の平面図、SK2のエレベーション図作成。一部器材の撤収作業。
- 11日 8号窯、窯内に溜まった水の汲出し作業。8号窯断ち割り断面図の作成作業。
- 12日 6号窯、9号窯の窯内に溜まった水の汲出し作業。9号窯断ち割り断面図の作成作業。
- 13日 6号窯、9号窯の窯内に溜まった水の汲出し作業。6号窯断ち割り断面図の作成作業。9号窯断ち割り断面図の観察・注記作業。
- 14日 6号窯断ち割り断面図の観察・注記作業。
- 17日 全ての器材撤収し、全ての発掘作業を終了する。

大針11号窯調査日誌(抄)

令和3年

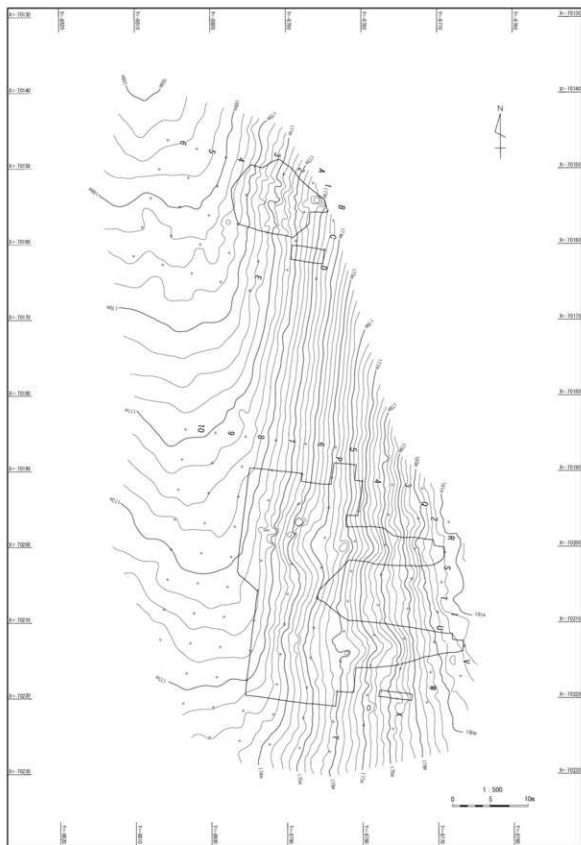
- 1 2月1日 調査前地形測量図の作成作業。確認調査の埋め戻し排土を再度掘削。調査範囲の設定。
- 8日 A-1区(南半部)の表土掘削作業の開始。
- 9日 引き続きA-1区(南半部)の掘削作業。新たにA-2区(南半部)の掘削作業開始。
- 10日 A-1区(南半部)、遺物包含層の掘削作業。引き続きA-2区(南半部)にてA-1区(南半部)で確認された遺物包含層を掘削。
- 13日 A-1・2区(南半部)縦断面図の写真撮影及び実測図作成作業。A-2区(北半部)の表土掘削作業の開始。
- 15日 A-1区(北半部)の表土掘削作業の開始。引き続きA-2区(北半部)の掘削、主に遺物包含層の掘削作業。
- 16日 A-1区(北半部)の遺物包含層の掘削作業。A-3区に調査範囲を拡張し、掘削作業を開始する。
- 20日 調査後地形測量図の作成作業。
- 21日 調査区の全体清掃及び完掘状況の写真撮影。
- 22日 調査区の埋戻し作業。
- 23日 調査区の埋戻し作業完了。調査区周辺の遺物採集作業。器材及びテントの撤去作業。全ての器材撤去し、全ての発掘作業を終了する。

第3節 遺物整理と報告書作成作業の経過

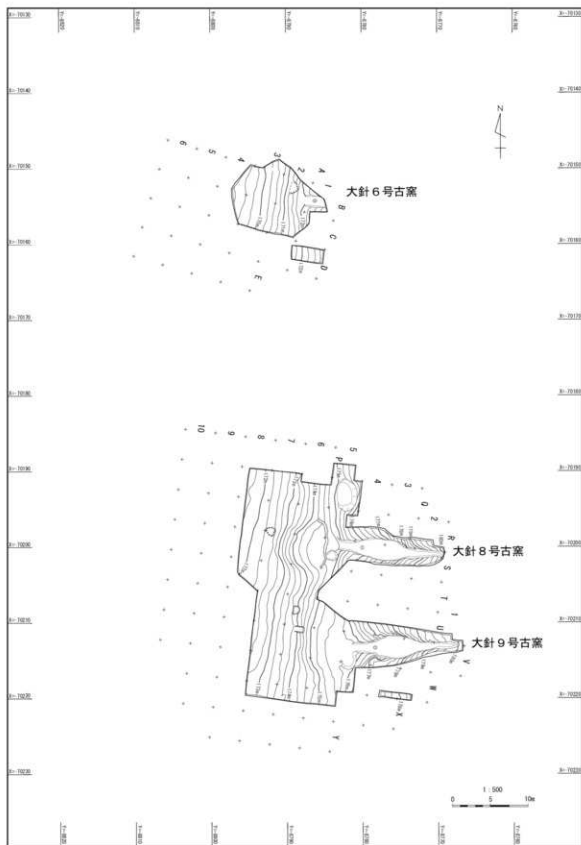
大針6・8・9号窯発掘調査出土遺物の第1次整理作業(洗浄・接合・注記等)は、一部現地調査と平行する形で平成31年3月から令和2年1月まで多治見市文化財保護センターにより実施された。出土遺物はコンテナ整理箱182箱分である。遺物の個体番号は6号窯から8号窯、9号窯の順で通し番号で振っている。

令和2年度より事業団が多治見市から埋蔵文化財にかかる業務を委託された。令和3年6月28日付けで東海旅客鉄道株式会社と多治見市教育委員会及び事業団とで大針6・8・9号窯発掘調査における出土遺物整理及び報告書作成業務に係る三者協定を締結し、事業団が多治見市教育委員会から業務を引き継いだ。同年6月30日付けで東海旅客鉄道株式会社を委託者、事業団を受託者として大針6・8・9号窯発掘調査における出土遺物整理及び報告書作成業務にかかる業務委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査室が残されていた出土遺物の第2次整理作業及び報告書作成作業を担うこととなった。なお、本委託事業は当初令和4年3月31日を終了時期としていたが、令和4年3月16日付けで大針11号窯の内容を加えた報告書作成業務と委託期間を延長する変更契約を締結している。

令和3年度は主に大針6・8・9号窯出土遺物の第2次整理作業(遺物実測・遺物計測等)のほか遺物実測図及び遺構図の製図作業を行った。令和4年度に入り大針11号窯出土遺物の第1次整理作業及び第2次整理作業を実施した。出土遺物はコンテナ整理箱14箱分、遺物の個体番号は9号窯の続きで振っている。報告書執筆作業及び編集作業は一部整理作業と平行しながら令和4年度から5年度に掛けて実施した。



第4図 大針6・8・9号窠 調査前地形図 S=1/500



第5図 大針6・8・9号窯 調査後地形図 S=1/500

第3章 調査の成果

はじめに

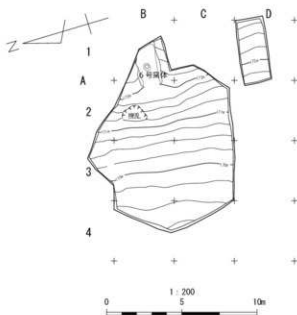
大針6・8・9号窯は、標高170～180mの同一丘陵尾根西向き斜面に構築された灰軸陶器窯および山茶碗窯である。現在の所在地は、多治見市大針町字屋作309番1外である。大針6・8・9号窯の位置する西向き斜面の谷底には屋作川の源流が流れている。大針11号窯は標高170～172mの丘陵尾根東向き斜面に築窯されていたと推測される山茶碗窯で、現在の所在地は多治見市大針町字286番4である。遺跡は国道248号線バイパスに近接しており、同バイパスを挟む形で北に11号窯、南に6・8・9号窯が位置している(第3図)。調査総面積は約614㎡である。調査グリッドは4mメッシュで設定し、6号窯、8・9号窯、11号窯の3地点で軸を異にしている。大針8・9号窯と大針11号窯では各窯体に付帯する遺構(土坑)も検出されている。土坑番号は8・9号窯で連番、11号窯は独立した番号である。

第1節 大針6号窯

大針6号窯は標高172～175m辺りの西向き斜面に構築された灰軸陶器窯である。グリッド番号は南北方向をアルファベット、東西方向を数字で示している。南北方向のグリッド番号は北端を起点としAからDまでを振り、東西方向のグリッド番号は東端を起点とし1から4までを振っている。調査面積は約90㎡で、窯体の一部と物原を確認している。出土遺物はコンテナ整理箱50箱分である。

1. 窯体(第7図)

本窯は分焰柱を伴う単室の半地下式の窯である。検出できた窯体の全長は3.1m、焼成室における床面最大幅は約1.5mを計測する。窯体(焼成室)の主軸をN-86°-Wに置き、焚口はほぼ真西に開口する。西向き斜面に築窯されており、焼成室後方および煙道部は調査区域外のため未調査である。天井と側壁の上半部分はすでに崩落しており、これらは碎片となり窯内に堆積していた。



第6図 大針6号窯 グリッドおよび遺構配置図 S=1/200

焚口・燃焼室

焚口は左右側壁の立ち上がりが始まる箇所、床面幅約1.2cmを測る。焚口から分焰柱に向かって地山の被熱硬化が認められる。焚口の前面は掘り抜き排土による前庭部が設けられておらず、直ぐに自然地形の傾斜で下降する。

燃焼室は焚口から分焰柱前までの範囲で全長約1.0m、床面最大幅約1.2mを測る。焚口から分焰柱に向かい凹凸を伴いながら徐々に幅を広げる平面形である。床面は約2°の僅かな傾斜をもって分焰柱に向かう。燃焼室床面直上は赤色被熱した地山がみられる。同様に、側壁は床面と同様にほとんどの範囲で貼り壁が認められず、赤色被熱した地山の露出を確認できる。

分焰柱

分焰柱はほとんどが削平されており、僅かにその基部が残存している。基底部の平面形は長さ50cm、短径40cmと楕円形プランを呈し、残存高は約12cmまで計測可能である。断ち割り調査の結果から、分焰柱の基底は地山の砂礫土が被熱により炭化していることがわかる。また、その上位には被熱硬化した白黄褐色粘土が約5cm前後盛られている。

焼成室

焼成室は天井部を除き比較的良好に残存し、残存部分の全長は窯体主軸上で約1.1mを測る。平面形は燃焼室から徐々に開き始め、焼成室中央部やや手前で最大幅約1.5mを迎える。そこから煙道部に向かって徐々に幅を狭めていくと考えられるが、調査区域外のため詳細は不明である。床面は焼成室の始まりで僅かに下り、分焰柱の端から約40cmの地点で約5°で立ち上がるといった比較的平坦な範囲のみが確認される。断ち割り調査の結果、本窯の床面は1枚の貼り土（貼り床）がなされていることが明らかとなった。両側壁は焼成室でやや垂直気味概ね内傾し、上部では内傾気味に立ち上がる。貼り壁は最大10cmほどの厚さで、表面は著しく被熱硬化した粘土、内部は被熱硬化したスサ入り粘土である。一部貼り壁が剥落し、被熱硬化した地山の露出も確認される。貼り壁が残存する部分は最も高いところで約56cmを測る。

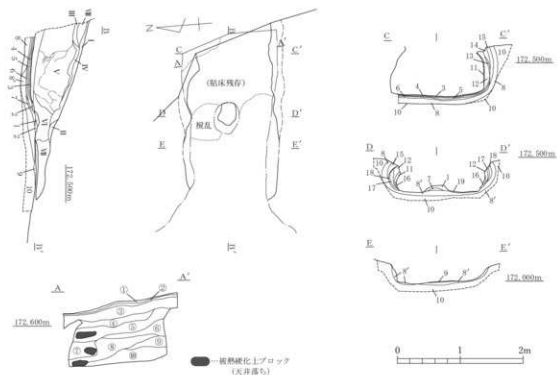
焼成室の覆土は、下から順に天井・側壁等の落下碎片（第7図⑥～⑩）、黄灰褐色土層（同⑤、流入土）、灰黄褐色土層（同④、流入土）が堆積している。覆土最下層に上方からの流入土（自然流入土）がみられないことから、本窯は天井が崩落したために廃棄された可能性が高いものと推測される。

2. 物原（第8図）

物原は焼成不良品や欠損品、焼台、灰や焼土など窯の操業に伴って生じた廃棄物を投棄した場所で、窯体焚口前方を基点に西側の斜面下方に広がる。その範囲は東西約8.6m、南北約9.4mに及び、随所で近年の人為的な攪乱等がみられる。

窯体の掘り抜き排土は、明黄褐色土層が主体で（第8図21）、B-2区内においても同様に堆積していることを確認できる（同1）。掘り抜き排土の規模は推測される範囲で東西約2.2m、南北約4.4m、中心部での厚さは約32cmを測る。

物原の遺物包含層は、主に掘り抜き排土を覆うように堆積しているが、堆積状況は場所によって若干様相が異なる。比較的安定した堆積をみせるのは、窯体主軸延長線上にあたるB-2・3・4区である。ここでは焼台破片を多く含む均質の黒色灰層である黒灰褐色土層（同8）と暗灰褐色土層（同8'）を下層とし、上層には暗灰黄褐色土層（同18）が堆積する。なお、上層のほとんどが人為的な攪乱を受けた現代攪乱盛土あるいは下層黒色灰層が再堆積している状況である。B・C-3区では、現代攪乱盛土（同6）が厚いと



(実体断面)

- I 明褐色土層 5YR 6/9 赤色被熱酸化した地山
- II 暗灰褐色土層 7.5YR 4/2 赤色被熱酸化した地山
- III 灰黄褐色土層 10YR 6/2 隙間、被熱酸化した地山
- IV 灰白色土層 7.5G 8/1 陥り壁土上の剥れ、被熱酸化
- V 灰白色土層 5G 8/1 著しく被熱酸化した陥り壁、表面は自然堆積物で厚くなる
- VI 浅黄白褐色土層 8Y 8/2 被熱酸化した地山層
- VII 黄褐色土層 10YR 6/4 弱く被熱酸化した地山層
- VIII 暗黄褐色土層 2.5Y 5/2 地山層、被熱酸化はほぼ見られない

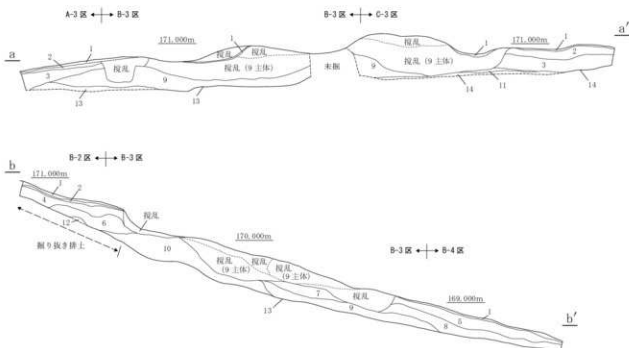
(実体層上断面)

- ① 暗褐色土層 7.5YR 3/3 高栗土
- ② 灰褐色土層 2.5Y 5/1 1cm前後の小礫を含む。締まりはない
- ③ 黄褐色土層 2.5Y 5/4 1～3cm大の礫を含む。やや粗く締まりが強い、遺物を少量含む
- ④ 灰黄褐色土層 2.5Y 5/2 1cm以下の礫を少量含む、③層と近似する。全体的に均質、締まりはやや弱い
- ⑤ 黄褐色土層 2.5Y 6/3 1～2cmの礫を少量含む、焼土粒を少量含む、粗く締まりをやや欠く
- ⑥ 黄褐色土層 10YR 5/4 1cm以下の礫を少量含む、焼土粒を少量含む、やや締まりを欠く、⑤層と近似
- ⑦ 黄褐色土層 2.5Y 5/6 礫をほぼ含まない、粗く締まりが弱い、被熱酸化した白色粘土小ブロックを多く含む
- ⑧ 暗黄褐色土層 2.5Y 4/2 1cm以下の礫・焼土粒を少量含む、本炭粒をほとんど含む、締まりをやや欠く
- ⑨ 褐色土層 10YR 4/4 1～2cm大の被熱酸化土塊・本炭粒を含む、粗くやや締まりを欠く
- ⑩ 黄褐色土層 10YR 6/6 1～2cm大の被熱酸化土塊を多く含む、全体的に粗く締まりを欠く、礫を含まない

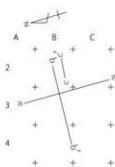
(実体陥り部り土層断面)

- 1 白黄褐色粘土層 2.5Y 8/2 分層柱状土、被熱酸化、礫を含まない
- 2 黄灰褐色土層 2.5Y 7/4 分層柱状土、弱い赤色被熱酸化、礫を含まない、粗く締まりが弱い
- 3 暗黄褐色粘土層 7.5YR 7/3 陥り床、赤色被熱酸化、礫を含まず均質
- 4 灰褐色土層 10Y 5/1 陥り床粘土、赤色被熱酸化、礫を含まず均質
- 5 白灰色土層 7.5Y 8/1 陥り床粘土、被熱酸化、礫を含まない
- 6 黄褐色土層 5Y 6/6 10cm以下の小礫を含む、地山の被熱酸化(8層への変化は自然)
- 7 黒褐色土層 2.5G 3/1 地山土の腐化層、被熱酸化、締まりあり
- 8 明赤褐色粘土層 5YR 5/6 赤色被熱酸化した地山層、2cm前後の礫を含み締まりあり
- 8' 淡赤褐色粘土層 5YR 5/3 におく赤色被熱酸化した地山層、礫を含まずやや粘性あり、締まりあり
- 9 暗灰褐色土層 10YR 5/1 木炭・焼土粒を含む、被熱酸化なし
- 10 黄褐色土層 2.5Y 6/4 地山、2cm前後の礫を少量含む、均質で安定し締まりあり
- 11 白灰色粘土層 10Y 8/1 陥り壁粘土の表面付近、著しい被熱酸化、粗い
- 12 灰褐色土層 2.5G 5/1 陥り壁粘土、被熱酸化、礫を含まない、スス入り粘土で11層より粗い
- 13 淡赤褐色土層 7.5YR 6/2 赤色被熱酸化した地山層、色はばらばら、礫を含まない
- 14 浅黄褐色土層 2.5Y 7/4 被熱酸化した地山層、礫を含まない(15層への変化は自然)
- 15 明褐色土層 5YR 6/8 赤色被熱酸化した地山層(8層への変化は自然)
- 16 におい黄褐色土層 10YR 6/3 陥り壁の一部、粘土質で弱い被熱酸化
- 17 白灰色粘土層 7.5Y 8/1 陥り壁粘土、被熱酸化、礫を含まず均質
- 18 黄褐色土層 2.5Y 7/6 被熱酸化した地山層、締まりあり(8'層への変化は自然)

第7図 大針6号窯 窯体実測図



- 1 暗褐色土層 7.5YR 3/2 炭塵土
- 2 灰褐色土層 2.5Y 5/1 1～2cm大の礫を少量含む、やや砂質で締まりなし
- 3 黄褐色土層 5Y 5/4 1cm前後の礫を少量含む、均質で締まりあり、遺物を少量含む
- 4 黄褐色土層 2.5Y 6/4 2cmまでの礫を少量含む、均質で締まりあり、遺物を少量含む
- 5 暗灰褐色土層 7.5Y 5/2 1cm以下の礫を多く含む、やや砂質で締まりを欠く
- 6 暗灰褐色土層 7.5Y 4/1 礫を含むほぼ含まない、木炭粒を含む黒色灰層（10層よりは色が薄い）、締まりをやや欠く
- 7 暗灰黄褐色土層 5Y 4/2 2cm前後の礫を少量含む、黒色灰層の一部、粗く締まりなし
- 8 暗黄褐色土層 5Y 4/3 3cm前後の礫を少量含む、比較的均質だが柔らかく締まりを欠く、遺物を少量含む
- 9 暗灰褐色土層 7.5Y 3/2 1～2cm大の礫を少量含む、黒色灰層の一部、締まりを欠く（10層よりやや色が薄い）
- 10 黒灰褐色土層 10YR 2/1 1cm以下の礫を少量含む、均質の黒色灰層で木炭粒・煤土粒を含む、粗く締まりが弱い、掘り抜きを多く含む
- 11 暗灰褐色土層 7.5Y 3/1 黒色灰層の一部、10層より色が濃くない、柔らかいがやや締まりを欠く
- 12 明黄褐色土層 10YR 7/6 掘り抜き排土上、1cm以下の小礫を僅かに含む、安定し締まりあり
- 13 浅黄褐色土層 5Y 7/3 地山層、2cm前後の礫を含む、均質で安定しているが柔らかい
- 14 浅黄白褐色土層 7.5Y 7/2 地山層、1～2cm大の礫を含む、均質で安定しているがやや柔らかい



(掘り抜き排土断面)



(掘り抜き排土断面)

- 1 明黄褐色土層 10YR 7/6 掘り抜き排土上、5cm前後の礫を含み色は均質、粗めで締まりを欠く
- 2 暗黄褐色土層 10YR 5/4 地山層、1～2cm大の礫を少量含む、均質で安定し締まりあり
- 3 黄褐色土層 10YR 6/6 地山層、1～3cm大の礫を少量含む、均質で安定し締まりあり（2層からの自然落下）

第8図 大針6号窯 物原土層断面実測図

ここで約48cm堆積し、最も攪乱の被害が著しい。

3. 出土遺物（第9～18図）

大針6号窯では、窯内と物原から灰軸陶器を主体に須恵器、土師器、窯道具類が出土する。また、物原から若干量の山茶碗が出土しているが、8号窯ないし9号窯の遺物が後世に混入したのと考えられる。出土総点数は第1表で示すように2397個体となるが、このうち焼台に関しては、実測用の数点を除き現地で個数を確認したのちに廃棄している。本書では173点の遺物を掲載しているが、掲載した実測遺物以外の計測資料520点の情報も報告に反映させている。出土のほとんどが攪乱土を含む物原からで、窯内出土遺物は15個体と少ない。ただし、窯体覆土も攪乱を受けており、窯内遺物の一部が物原の攪乱土内に混在しているものと考えられる。

3-1. 灰軸陶器

本窯の主体生産器種である。碗類と皿類が出土の大半を占め、鉢類、瓶類、壺類、その他少数器種が出土

第1表 大針6号窯 グリッド別出土遺物個体数表

分類	器種名	窯内	A		B				C				D		全図一括及び数値	計
			2	3	1	2	3	4	2	3	4	1	2			
灰軸陶器 碗類	碗A1		4			4	7	3	5	10					1	34
	碗A2	7	3	5	1	9	30	4	41	32	2	2				136
	碗A3		10	8		9	15	3	24	35					7	111
	碗B					1										1
	輪花碗	1				1	1			1						4
灰軸陶器 皿類	皿1	1	4		1	1	10		7	15					1	40
	皿2	2	17	2	3	26	58		54	88	2				7	259
	皿3		8			9	10		15	24	1				3	70
	輪花皿									1	1					2
	段皿		1					1	1							3
	耳皿		1			3	1			3					1	9
灰軸陶器 鉢類	鉢				3	2	2		1	1						9
	無高台鉢						2			1						3
	鉄鉢	1														1
	片口鉢								1							1
灰軸陶器 瓶・壺類	長頸瓶	2				1				2	3		1			9
	広口瓶	1	1						1		2					5
	小瓶	1			1	2				1	1	1				7
	短頸壺					1	3			2	3					9
	四足壺						1									1
	瓶・壺類		1			2	3			5					1	12
	蓋	1				3	1									5
灰軸陶器 その他	取手						2									2
	杯							1								1
	風字硯					1										1
	器種不明							1								1
	王冠状トチ					2										2
	サヤ							1								1
灰軸陶器 窯道具類	焼台	3	77	17		89	467	61	144	664	23			100	1645	
	障炎壁						1			1					2	
	その他					1				1					2	
	土師器				1											1
須恵器	要	1														1
	甔						1									2
	襷鉢													1		1
山茶碗	碗					2										2
	小皿									1						1
計		16	130	34	10	170	617	73	298	891	30	4	124		2397	

している。胎土は硬質で、基本的に灰白色を呈する。なお、僅かに黄色味を含むものもある。緻密ながら礫の微粒子を含む。一部の器種を除き原則的に灰軸が施されているが釉層は薄い。灰軸の発色は焼成の状況などで一様ではなく、灰黄色・灰黄白色・緑灰黄色等を呈している。濃淡や光沢の有無など軸調には個体差があり、自然軸の重なりで本来の施軸範囲や発色が不明瞭な個体や、施軸自体が判然としない個体もある。掛け掛けまたは刷毛塗りのが確認されるが、観察の限りでは掛け掛けの資料が主体となっている。

(1) 碗類

碗 A (第 10 図 1～33、第 11 図 34～40、42～47)

本窯出土碗類の主体器種を碗 A とする。碗類の 99% 以上を占める 281 個体が出土している。口径を主とした法量値の差から、小さい順に碗 A1 (6～13)、碗 A2 (1～5、14～31)、碗 A3 (32～40) のグループに分類することが可能である。また、更に沈線・刻線文様・刻書を施された碗 A 類 (42～47) も存在する。出土量の割合は、多い順に碗 A2 が約 48%、碗 A3 が約 40%、碗 A1 が約 12% となっている。なお、出土の大半は厳密な分類の難しい底部のみの資料である。これら碗底部の分類は高台径値の差で単純に分けた訳ではなく、高台の高さおよび厚さ等の観察を踏まえている。

碗 A 類の各法量値は次の通りである。碗 A1 は、口径 9.6～11.6cm、器高 3.2～3.7cm、高台径 4.6～5.6cm を測り、平均値は口径 10.5cm、器高 3.5cm、高台径 5.0cm である。碗 A2 は、口径 12.2～15.5cm、器高 3.9～5.0cm、高台径 4.8～7.4cm を測り、平均値は口径 13.9cm、器高 4.7cm、高台径 6.5cm である。碗 A3 は、口径 16.4～20.0cm、器高 4.8～6.5cm、高台径 6.1～9.2cm を測り、平均値は口径 18.3cm、器高 5.7cm、高台径 7.5cm である。これら碗 A 類の器高:口径の比は概ね 1:3 に近い比となる。碗 A 類は、ロクロ成形により外面にロクロ目のごく弱い凹凸として残るが、内面は底部から口縁部まで平滑に仕上げられている。腰部から胴部にかけて弱い張りをもって口縁へ開き、口縁端部は丸く仕上げられ外側に短く折り返されるのを原則とするが、折り返しがなく収まるもの (27、28) も少量確認される。胴部外面下半には回転ヘラ削り調整されるものとされないものが見られる。ただし、調整部位を伴わない底部のものが大半なことから、正確な調整率を導き出すに至っていない。碗 A3→A2→A1 と小さくなるにつれ、回転ヘラ削り調整がみられないものの割合が高くなる傾向がある。底部外面は原則的に回転ヘラ削り調整及び回転ナデ調整で回転系切痕を消しているが、31 のように回転系切痕を残すものもごく僅かに確認される。高台は全て付高台であり、内側が湾曲気味で外側の下方に稜を持つ三日月高台である。確認された三日月高台は、全体的に張りが弱く稜がやや不明瞭なものが大半である。また、高台の中には角高台に近い形状となっているもの (29、30) も確認される。高台端部は鋭角なものと鈍角なものがあり、一部の端部には細い蓋状の植物圧痕がみられる。施軸を確認できた資料のほとんどが掛け掛けとなっているが、碗 A 類の 2 割弱は刷毛塗りされたもの (38 など) もある。なお、碗 A1 に刷毛塗りは確認されていない。

42～47 は器面に刻線等が確認されている。42 は碗 A3 に該当し底部外面に刻線が見られる。刻線は回転ヘラ削り調整およびナデ調整が行われたあとに付けられたもので、不規則で不整形な矢印状の刻線が環状に存在する。ただし意図的なものではなく、高台接合の際に付いた爪跡と考えられる。43 は碗 A2 に該当し、外面に 3 条の沈線を持つ。沈線は高さ 2mm 内の浅い凹みで巡っている。44 と 45 は外面に連続刻線文を持つ。44 が碗 A3、45 が碗 A2 に該当する。連続刻線文は長さ 1cm ほどの縦の刻みが帯状に巡るものだが、45 は部分的な施文である可能性が考えられる。なお、ともに施軸は刷毛塗りとみられる。46 と 47 は底部内面に刻書された資料である。46 が碗 A1、47 が碗 A2 に該当する。文字はどちらも見込みとも呼ばれる底部内面全体を使うように一文字が刻まれており、旁がやや変異しているが「財」と読むことができる。吉祥句とし

て刻書されたものと推測される。

碗 B (第 11 図 41)

深碗タイプの碗を碗 B とする。1 個体のみの出土である。法量値は、口径が推定値で 16.4cm、器高 7.2cm、高台径 8.8cm である。器高:口径の比はおおよそ 1.2:3 となる。腰部に張りを持って口縁へ開くが、開きが碗 A 類より小さいのは口径と器高の比が示す通りである。口縁端部は、外側への折り返しがなく丸く収められている。胴部外面下半と底部外面には回転ヘラ削り調整される。高台は碗 A 類よりも背が高く直立気味の付高台で、断面形状は先端の太い三角形を呈している。釉層は極めて薄く発色も不良であり、浸け掛けか刷毛塗りか明確に判断できない。

輪花碗 (第 11 図 48 ~ 51)

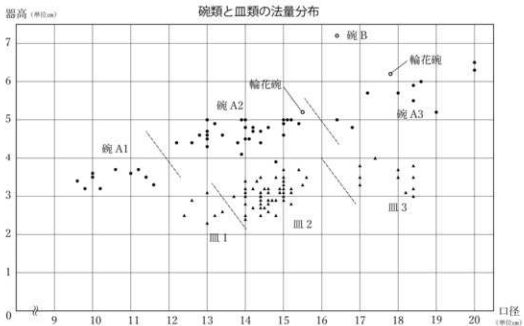
48 ~ 51 は輪花碗であり、口縁部小破片の資料も含めて少なくとも 4 個体が出土している。口縁部の残存率が悪く、各個体における輪花の数は不明だが、4 ないし 5 箇所に作られていると推測する。輪花は口縁端部外側から内側へ力を加え作り出しており、指による輪花 (49 ~ 51) と棒状工具による輪花 (48) がみられる。外面胴部下半の回転ヘラ削り調整がされているもの (49、51)、されていないもの (48)、不明なもの (50) に分かれる。碗 A 類および B 類に合わせて分類すると、48 は碗 A2、49 は碗 A3、50 と 51 は碗 B に対応しており、50 は碗 B でも小型と考えられる。

(2) 皿類

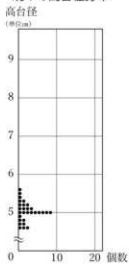
皿 (第 11 図 52・53、第 12 図 54 ~ 86、第 13 図 87 ~ 99)

本窯出土皿類の主体であり、皿類の約 95% を占める 369 個体が出土している。口径を主とした法量値の差から、小さい順に皿 1 (52、54 ~ 56、83)、皿 2 (53、57 ~ 70、81、82、84、85)、皿 3 (71 ~ 80、86) のグループに分類している。ただし、皿 1 と 2 の境は曖昧なものであり、皿 2 のうち皿 3 と中間的な法量値のもの (69、70 など) もあるなど、明確な線引きはできない。なお、刻線文様または刻書等を施された皿類 (87 ~ 99) も出土している。出土量の割合は、多い順に皿 2 が約 70%、皿 3 が約 19%、皿 1 が約 11% となっており、皿 2 が本発掘調査における最多量の器種となる。ただし、皿類も碗類同様に高台のみの資料が多数である。皿 1 ~ 3 の分類においては単純に高台径の大きさだけでなく、高台の高さや厚さ等の観察を踏まえている。

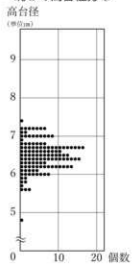
皿の法量値は次の通りである。皿 1 は、口径 12.4 ~ 13.4cm、器高 2.1 ~ 3.1cm、高台径 5.7 ~ 6.6cm を測り、平均値は口径 12.9cm、器高 2.6cm、高台径 6.2cm である。皿 2 は、口径 13.7 ~ 15.6cm、器高 2.4 ~ 3.7cm、高台径 5.8 ~ 7.6cm を測り、平均値は口径 14.6cm、器高 3.0cm、高台径 6.7cm である。皿 3 は、口径 17.0 ~ 18.6cm、器高 3.0 ~ 4.0cm、高台径 7.2 ~ 8.6cm を測り、平均値は口径 17.8cm、器高 3.5cm、高台径 7.8cm である。ロクロ成形による外面の凹凸は目立たないもののロクロ目を残し、内面は底部から口縁部まで平滑に成型されている。腰部から胴部にかけて弱い張りをもって口縁部へ開く器形を基調とするが、直線的に開くもの (74、75) も存在する。口縁端部は碗同様に外側へ短く折り返されるものが大半である一方、折り返しがなく収まるもの (83 ~ 86) も存在する。高台は全て付高台で、碗類と同様に張りが弱く外側の稜がやや不明瞭な三日月高台が基本形となる。中には角高台状のもの (81、82) も存在する。胴部外面下半の回転ヘラ削り調整されているものとされていない資料があり、確認できる範囲での調整の割合はほぼ半々である。なお、出土資料の大半が底部のみであるため、胴部調整の実態を把握するのは難しい。底部外面の回転ヘラ削り調整および回転ナデ調整は原則的に施されており、例外なく回転糸切痕を消している。施釉は釉調や範囲など判然としにくいものが多い。観察の限り浸け掛けされているものが大半であり、刷毛塗りの皿 (60、67、



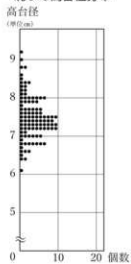
碗 1 の高台径分布



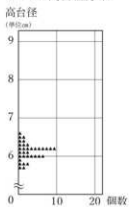
碗 2 の高台径分布



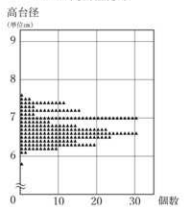
碗 3 の高台径分布



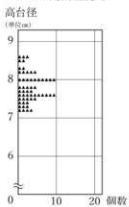
皿 1 の高台径分布



皿 2 の高台径分布



皿 3 の高台径分布



第9図 大針6号窯 出土遺物量量分布図

72、80 など) も 3 割程度存在する。

87～99 は、器面に刻線や刻書等が確認された皿である。87～89 は底部外面に環状に連続する不整形な刻線をもつもので、碗(42)同様に意図的ではなく高台接合の際に付いた爪跡と考えられる。90 も底部外面にみられるが 87～89 とは意匠が異なる。底部中心から放射状に、面の外縁が目立つように連続施文されている。なお、中心部には僅かに回転系切痕が残る。91 は底部の内外面に刻線が確認されている。外面は 87～89 同様に意図しない爪跡と考えられるが、内面は不明ながら意図的な刻線の一部と考えられる。92～95 は外面に連続する刻線文をもつ皿である。このうち 92 と 93 は長さ 1.5cm 内の刻線文が狭い間隔で帯状に巡っている。ただし、93 の外面は刻線を施したあとに回転ヘラ削り調整されているようにみられ、刻線文を消そうとしたものと推察される。94 は残存部で長さ 3cm 程度の刻線文が 92 と 93 の刻線よりも広い間隔で施される。95 の刻線は 92 と 93 に近似するが、1cm 程度の刻線文が 2 段で施される。なお、92 が皿 1、93 と 95 が皿 2、94 が皿 3 に該当する。いずれも施軸がされていると考えられるが、光沢のある 93 を除き発色不良で施軸範囲も不明瞭である。96 と 97 は外面に刻画と考えられる刻線が確認された皿で、皿 3 に該当する。97 は花卉を刻画したものであり、96 も 97 の刻画に類するものと考えられる。98 と 99 は底部内面に刻書された皿で、皿 2 に該当する。98 の文字は欠損のため明らかではないが、碗の刻書(46、47)と同様に旁が変異した「財」とみられる。99 の文字は「大」の下に「十」が書かれた「奉」の略字と考えられる。「財」の刻書(46、47、98)に比べ、99 の「奉」の刻書は中心部に小さく施されている。

段皿(第 13 図 100～102)

内面に段を持つ皿で口縁部等の小破片の出土となるが、少なくとも 3 個体が出土している。おおよそ口径値を計測できた資料は 100 と 101 のみで、100 が 14.0cm、101 が 19.0cm を測る。同様に高台径を計測できた資料は 102 のみで、8.0cm を測る。高台脇から口縁部まで直線的に開き、口縁端部は丸みをもって小さく外反している。内面には高さ 1～2mm の明確な段を持つ。100 が皿 1、101 と 102 が皿 3 に対応する大きさとなる。外面胴部下半の回転ヘラ削り調整はされるもの(101、102)とされないもの(100)がある。施軸に関しては、101 は浸け掛け、100 と 102 は刷毛塗りと考えられる。

輪花皿(第 13 図 103・104)

出土した輪花皿は全て口縁部が 1/2 以下の破片資料であるが、少なくとも 2 個体が存在する。口径は推定値で、103 が 13.2cm、104 が 14.3cm を測る。皿の分類に照らすと、103 が皿 1、104 が皿 2 に対応する。各個体に 1 箇所の輪花が確認できるのみであるが、恐らく 4 ないし 5 箇所に作られたものと考えられる。基本的に口縁端部の外から内側に向けて指による押圧で輪花を作り出しているが、103 は棒状工具を使用した可能性がある。103 は胴部に張りをもって開き口縁端部が外反しない皿(83～86)に近い器形である。104 は直線的に開き口縁端部が小さく外反する皿 3(74、75)または段皿に対応する器形である。胴部外面下半の回転ヘラ削り調整は、103 には認められるが 104 の残存範囲には認められない。施軸に関しては、103 が浸け掛け、104 は刷毛塗りと考えられる。

耳皿(第 13 図 105・106)

口縁部の相対する 2 箇所を内側に折り曲げ耳部とした皿である。出土した耳皿のほとんどが口縁耳部の破片であり、残存率が 1/2 以下であるが観察による識別で 9 個体となる。そのうち底部が 1/2 以上残存する 105 と 106 を報告する。口径値は不明であるが、105 に関してはおそらく口径 12cm 程度の皿を基にしている。器高は 105 が 2.9cm、106 が 2.5cm を測る。回転系切痕が残る無高台の平底で、底径は共に 4.8cm を測る。観察の限り 106 は 105 よりも小振りなものである。内面と外面口縁耳部に自然軸が掛かるが、施軸は

認められない。

(3) 鉢類

鉢 (第 14 図 107～110)

底部 1/2 以下または口縁部破片の出土状況だが、破片の観察から少なくとも 9 個体は出土している。おおよそ全体を復元できる鉢は 108 のみで、口径 29.0cm、器高 10.3cm、高台径 11.4cm を測る。107 の推定口径値は 24.8cm、109 と 110 の推定高台径は前者が 11.0cm、後者が 13.4cm を測る。報告遺物以外の 5 個体のうち 2 個体は高台径が 12.0cm と 13.8cm を計測し、高台径は 11.4～13.8cm の範囲にある。108 は腰部に張りを持って口縁部へ開き、口縁端部が 5mm ほど外反する碗 A を大型化した器形を呈する。観察の限り 107 と 109 も同様に碗 A 型の器形と考えられる。体部内面は碗皿類同様に平滑に成形されている。107 と 108 は、胴部外面の比較的口縁に近い部位から下半まで回転ヘラ削り調整されている。高台は付高台で、断面形状は方形寄りの三日月形を呈する。底部外面の回転ヘラ削り調整および回転ナデ調整は 109 と 110 で確認でき、報告遺物以外の観察からも原則的に施されることを確認している。施軸に関しては、内面は判然としないものの、107～109 の外面で薄い釉層かつ発色不良であるが確認できる。刷毛塗りされたもの (107、108) と浸け掛けされたもの (109) で、107 と 108 の刷毛塗りは外面が口縁部直下までと狭い範囲で施されている。

片口鉢 (第 14 図 111)

片口を持つ口縁部破片で、観察の結果から鉢の片口と判断した。片口は口縁端部を内側から外側へ指で押し出して成形され、外面の片口部脇には成形時の指跡が確認できる。片口の幅は 1cm 程度で押し出しは 5mm 程度である。接合できないが同一個体と考えられる口縁部を含む破片の観察から、胴部全体に張りを持ち口縁端部はごく小さく外反する器形を呈する。外面は胴部上半から回転ヘラ削り調整がされている。軸は片口部を含め内外面に刷毛塗りされている。

無高台鉢 (第 14 図 112・113)

無高台の平底鉢で、出土した 3 個体のうち 2 個体を報告する。112 は推定値で口径 17.0cm、器高 5.5cm、底径 7.3cm を測り、113 は推定値で口径 18.0cm、器高 5.6cm、底径 7.6cm を測る。ロクロ成形であるが外面にロクロ目の凹凸はなく、内面も平滑に成形されている。腰部から胴部にかけて強い張りを持ち、口縁部への開きは鉢より狭く碗 B にやや寄る。口縁端部は丸く仕上げられ、ごく小さく内側が膨らむ。胴部外面は、胴部下半の回転ヘラ削り調整が認められるもの (112)、認められないもの (113) になっている。どちらも底部外面は回転ヘラ削り調整される。113 は底部外面の中心付近に 1 条、外縁付近に 2 条の環状の沈線がみられる。内面は自然釉が重なり、外面は薄く発色の悪い釉で明瞭ではない。なお、どちらも刷毛塗りされている。

鉄鉢 (第 14 図 114)

鉄鉢と考えられる口縁部破片が室内から出土している。口径は推定値で 14.2cm を測る。胴部全体に張りをもち、胴部上方で弱く内傾し口縁部へ上がる。口縁部は内側に小さく膨らみ、端部は面取りされている。内外面とも自然釉が厚く掛かり調整は不明瞭だが、外面に 2 条の細い沈線が確認できる。施軸も自然釉の影響で判然としないが、刷毛塗りされている可能性が高い。

(4) 瓶類

長頸瓶 (第 14 図 115～121)

長頸瓶は口縁部から底部までの全形がわかるものは出土していない。口縁部～頸部 (115、116)、肩部～

胴部（117～119）、底部（120、121）といった残存状況である。なお、出土量の多い底部で個体数を計上すると9個体となる。おおよそ口径が計測できたものは116と117のみで、116が9.4cm、117が12.4cmを測る。個体数に計上していない口縁部小破片を含む観察から、頸部からラッパ状に口縁へ開き、口縁端部は鋭角気味に成形される。口縁部の外面は、高さ0.9～1.2cmの緑帯状の面が形成されて、いずれの口縁部も緑帯の下端は短く突出している。器形と大きさ等から117～119は長頸瓶の肩部または胴部、120と121は長頸瓶の底部と推測される。胴部は丸みがあり肩部がやや張る器形となっている。胴部外面には、肩部のやや下方から回転ヘラ削り調整が原則的に施されていると考えられるが、軸の影響等で調整の痕跡は不明瞭である。また底部付近の胴部にはヘラ削り調整が認められない。底部外面は回転ヘラ削り調整および回転ナデ調整を行っている。底部は付高台をもつ。高台径7.8～9.7cmを測り、断面形状は不整形な方形である。高台底面は回転ナデ調整され、外縁が接地し内縁が浮く形状となっている。施軸は、外面は頸部下半から胴部にかけて、内面は口縁部から頸部中位にかけて刷毛塗りされていると考えられるが、自然軸の重なりや発色不良等で施軸範囲が判然としない。底部内面には自然軸が厚く付着しているものが大半である。

広口瓶（第15図122～125、同127～130）

広口瓶も長頸瓶同様に全形が分かるものは出土していない。底部よりも口縁部が多く出土しており、分類可能な口縁部で個体数を計上すると5個体となる。122～124は口縁部から頸部の資料で、口径は17.0～18.4cmを測る。長頸瓶を一回り大きくした器形で、口縁部外面の緑帯は高さ1.2～1.4cmを測る。125および127～129は肩部又は胴部の資料となるが、器形と大きさから広口瓶と判断している。128は外面に大きく宝相華文を意識したような四弁華文が刻画されている。いずれも長頸瓶より肩部の張りが強めで、胴部は丸みをもつ。なお、底部付近まで残存する127は底部からの立ち上がりはやや直線的である。外面は原則的に肩部付近から胴部下半まで回転ヘラ削り調整される。130は付高台をもつ底部で、高台径11.2cmを測る。付高台の断面形状はハ字状に小さく開く不整形な方形を呈し、回転ナデ調整された底面全てが接地面となる。残存底部の観察から、底部外面は回転ヘラ削り調整及び回転ナデ調整される。また、底部内面には自然軸が厚く付着している。施軸は長頸瓶と同様に外面は頸部下半から胴部にかけて、内面は口縁部から頸部中位にかけて刷毛塗りされていると考えられるが、自然軸の影響等で範囲や軸調は不明瞭である。

手付瓶（第15図126）

把手の痕跡が認められる瓶類で1個体のみ出土している。126は頸部根本から肩部に至る部位で、楕円形の把手接合痕が1箇所確認できる。後述の157の様な把手が付くもので、接合痕は把手上側が接合していると考えられる。大きさ等から広口瓶肩部に把手が付いたものと考えられるが、比較的なで肩の器形になっている。不明瞭な軸調ながら、外面は刷毛塗りされていると考えられる。

小瓶（第15図131～137）

平底の瓶で、比較的小振りなもの（131～133、136）と大振りなもの（134、135、137）に分類される。小振りなものは底部破片での7個体、大振りなものは口縁部で2個体と計上している。器高の分かるものは出土していない。小振りなものの法量は、口径値が分かる131で推定5.0cmを測る。底径は5.3～6.6cmの範囲にある。大振りなものの法量は、口径は134で7.8cmと135で6.8cm、底径は137で12.4cmを測る。小瓶は短く細い頸部から小さくラッパ状に開く口縁で、口縁端部は外反する。頸部根本から肩部へ径が増し、肩部は張らない。胴部下方へ向かうにつれ僅かに膨らみ、底部付近で弱く窄まる下膨れの器形となっている。胴部外面下方に回転ヘラ削り調整されるもの（133、136、137）、されないもの（132）、不明なもの（135）が確認できる。また、136と137の底部脇外面は1～2mmの高さを削り平高台状を呈する。底部外面は回

転系切痕をそのまま残すもの(132、133)と、回転ヘラ削り調整されるもの(136、137)がある。ただし、137に関しては中心付近の削り調整が甘い。底部の成形や調整の有無という面では、小振りとした136は大振りな資料のグループに入る。自然軸の重なりで本来の軸調や範囲が不明瞭な中で、施軸の認められないもの(133)と底部資料のため有無が不明なもの(136、137)がある。ただし、基本的に外面は口縁部から胴部まで、内面は口縁部付近に刷毛塗りされていると考えられる。また、底部資料では内面中心付近に自然軸が付着しているものが多い。

(5) 壺類

短頸壺(第16図138～141)

底部まで含む全形が分かるものは出土していない。識別可能な口縁部から9個体を計上している。口径は8.2～12.0cmの範囲にある。高さ1cm程度の短い頸部で口縁部までそのまま直立し、口縁端部は丸く成形される。頸部根本から肩部へ緩やかな張りをもって開くもの(138、140)、なで肩状に直線的に開くもの(139)、水平気味に開くもの(141)など器形は一様ではない。138と141は外面の肩部付近に回転ヘラ削り調整が認められる。施軸に関しては、138は口縁部外面から胴部、141は口縁部外面から肩部手前まで刷毛塗りされている。なお、140は自然軸の影響で判然とせず、139は外面に刷毛塗りらしき痕跡を僅かに認める程度である。その他個体の観察から、基本的に外面は刷毛塗りされていると考えられる。内面は個体によって自然軸の付着はあるものの、確実な施軸は認められない。

四足壺(第16図142)

四足壺と考えられる器面に突帯が付く壺類破片が出土している。破片は複数あるが同一個体と考えられ、個体数としては1個体と計上している。なお、四足壺の足部は出土していない。残存部位は胴部上半の一部と考えられる。縦位と横位の突帯が1筋ずつ確認できたが、個体のもつ本来の突帯の数は不明である。突帯は横位が付けられたのちに縦位が付けられている。突帯の断面形は器面側を底辺とすると、縦位は三角形を呈するのに対し、横位は上辺の中央が窪む不整形な台形を呈す。外面全体に自然軸が掛かり施軸の状況は不明である。

壺類底部(第16図143・144)

大型容器の底部が12個体出土しているが、広口瓶か壺類か確実に分類できなかったため壺類底部として一括している。全て付高台をもつもので、高台径は13.4～19.0cmを測る。付高台は八字状に外へ小さく開くものが多く、断面形は不整形な方形を呈す。ナデ調整で高台底面を整え、面全体が接地するものと底面外縁側が接地し内縁側が浮くものがあるが、後者が多い。高台底面には植物圧痕も認められる。底部外面は回転ヘラ削り調整されているが、中心付近まで及ばずに未調整部を残している個体もある。143と144は高台付近まで外面の刷毛塗りが確認できるが、他の個体において確実な施軸を確認できてはいない。144は内面全体に自然軸が掛かるが、143は胴部内面に部分的に掛かる程度である。また、144の胴部内面は、ロクロナデの痕跡だけでなく縦方向のナデ上げの痕跡も部分的に認められる。

刻線文を持つ壺類(第15図145～148)

断片的な資料のため詳細な器種は明らかでないが、外面の一部に連続する刻線文をもつ壺類破片が出土している。刻線文は縦方向に施されたものが横位に巡っている。刻線文の長さが分かるのは145と146で、前者が1.5cm程度、後者が1.0cm程度である。145よりも146の刻線文間が狭く、この特徴で考えると147は146に、148は145の刻線文に対応している。外面には回転ヘラ削り調整され、明確ではないが刷毛塗りによる施軸がされていると考えられる。

(6) 蓋類

蓋 (第16図149～153)

蓋は物原から5個体が出土し、その全てを掲載している。149は蓋の摘み部分で、最大径3.1cm、高さ1.7cmの擬宝珠形の摘みが付けられている。自然軸の影響で明確に把握できないが、外面全体を刷毛塗りされていると考えられる。150～153の蓋は、肩部で折れ曲がりほぼ垂直に口縁へ向かうもの(150、151)と肩部がなく八字状に口縁へ広がるもの(152、153)に分類される。口径値は、150が13.6cm、151が15.7cm、152が15.6cm、153が15.0cmを測る。150と151は短頸壺に嵌合する蓋と考えられ、嵌合部の高さは口径の小さい150が1.0cm程度、大きい151が1.5cm程度と短頸壺口縁部の大小の作りに対応している。外面は回転ヘラ削り調整が認められる。施軸は外面全体に刷毛塗りされているが、内面は確認できない。152と153は瓶類に嵌合する蓋と考えられる。口縁端部が僅かに下方へ突出し嵌合部となっている。外面に確実な回転ヘラ削り調整の痕跡は確認できない。外面はいずれも口縁端部付近まで不明瞭なものの刷毛塗りされていると考えられるが、内面は152のみ口縁部を含む外縁で刷毛塗りされている。

(7) その他少数器種

杯 (第16図154)

154は胴部の破片資料で全形は不明だが、器形から器種を杯と推測する。1個体のみ出土である。復元図から想定すると、口径は22cm以上あると考えられる。胴部下半に稜をもち、稜から下方が著しく内傾する。外面は全体的に回転ヘラ削り調整されている。また、外面上方には沈線が1条廻っている。外面の下端付近を除き刷毛塗りされており、内面は稜の僅か下方まで自然軸が薄く掛かる。脚をもつ高杯の可能性があるが、脚部らしきものは小破片も出土していない。

風字硯 (第16図156)

全形を残す資料ではないものの、1個体が出土している。「風」字の様に下辺が開放しており上縁を海として使用する硯である。僅かに残る外面側辺はヘラ削りで整えている。硯面は平滑で使用痕のように磨き調整されている。底部裏には高さ5mm程度の短い足が1つ残存しており、その左に別の足の接合痕跡が1箇所確認され、足が2個付く風字硯の作りに削れている。やや焼成不足のためか胎土は白黄色を呈し、足の端部や割れ口が摩耗している。自然軸を含め軸の付着はない。

把手 (第16図157)

半環状の把手で、器面との接合部まで残存した2個体が出土している。手握ねの粘土紐を曲げたもので、断面形は不整形な楕円形を呈する。157は長径1.9cm、短径1.4cmを測る。126のような手付瓶に付く把手と考えられるが、少なくとも126には接合しない。確認された2個の把手は対となる可能性もあるが、ここでは断定できない。いずれも施軸はなく自然軸も掛からない。

不明器種 (第16図155)

本来の器形が判断できないものである。残存部の観察では球体に近いものと思われる。既出の器種よりも厚い器壁で、厚みは最大で1.7cmを測る。外面および内面には同一方向に幾筋か静止ヘラ削り調整されている。特に肉厚な屈曲部の外面にはヘラ削り等の調整は認められない。外面全体に自然軸が掛かり施軸の有無は確認できない。内面は自然軸も含め軸は付着していない。

(8) 窯道具

サヤ蓋・サヤ (第17図163・164)

灰軸陶器窯で使用するサヤと考えられる破片が2個体出土している。胎土は須恵器と同質であるが、表

面付近が青灰色を呈しているのに対し内部は灰褐色を呈している。このうち163はサヤ蓋と考えられる。外面に自然軸の付着はないが、体部が「ハ」状に開く器形から蓋と判断した。全体的に粗い成形となっているが、外面には指によるナデ上げの痕跡、内面は縦方向のヘラ削り痕が確認できる。164はサヤの底部と考えられ、おおよそ底径21.6cmを測る。やはり製品と比べると粗い作りとなっている。163の天井部外面と164の底部外面はいずれも未調整である。内外面とも自然軸の付着は見られない。

王冠状トチ (第17図165・166)

王冠を天地逆にした形状のトチで2個体が出土している。胎土は灰軸陶器と同質かつ同色である。上端が内傾する外径9cmほどの筒状トチを素体とし、下端にアーチ状の切り抜きを連続して入れ小振りな足を複数作り出している。165は上端径7.3cm、器高3.6cm、底径8.4cmを測る。上端部はヘラ切りで面を作っている。アーチ状の切り抜きは8箇所、足の数は8個と推測される。166は底部を欠損しており、法量は上端径6.9cmのみ計測できる。また、その他の法量値は165に近い数値と考えられ、アーチ状の切り抜きと足の数も165と同数と推測される。いずれも外面には自然軸が掛かり、内面には掛かっていない。

焼台 (第17図168・169、第18図170)

製品を積み重ねて置くため室内床面に設置される支台である。室内から3個体、物原から1642個体が出土している。上面が窪むもの(168、169)と平坦なもの(170)がある。また、上面が窪むものには小振りな168と大振りな169がある。5mm以下の礫を多く含み灰黄色を呈する粗い胎土で、良く焼き締まっている。168は長さ12.3cm、幅11.8cm、高さ8.0cmを測る。上面径は9cm程度で縁部を土手の椽に残して窪み、直径5cm程の高台設置痕が残る。169は後部を欠損しているが、長さ15cm程度、幅17.8cm、高さ10.6cmを測る。上面は主軸約12cm、直交軸約14cmの幅広い楕円形で、浅く皿状に窪み168の様な高台設置痕は見られない。170は長さ12.7cm、幅12.9cm、高さ6.0cmを測る。上面は主軸約7cm、直交軸約10cmの歪な幅広い不整形で、弱い凹凸はあるものの平坦に作られている。焼台には底面を除く表面、特に正面に、成形や設置の際につけられる押圧痕が良く残っている。底部は床面傾斜に合わせた角度をもち、170は比較的緩い傾斜の床に設置されていたことが分かる。全ての焼台を観察できてはいないが、おおよそ報告した大きさに収まり、作りも類するものである。

障炎壁 (第18図171・172)

室内で火勢を調整する壁として使用されたと考えられる板状の窯道具である。2個体が出土している。掲載図では右端を窯との接合部(根本)とした。図化した正面を表面、背部を裏面、上側を上側面、下側を下側面と便宜的に表現する。胎土は焼台と同質の粗いもので1cm以下の礫の含有が多く、良く焼き締まっている。171は長さ21.0cm、最大幅20.3cm、最大厚12.0cmを測る。平面形は三角形を呈し、根本から先端に向かい薄く作られている。172は長さ26.3cm、最大幅18.5cm、最大厚8.3cmを測る。平面形は歪な方形を呈し、やはり先端が薄くなっている。いずれも表面は凹凸が著しく大小のひび割れが多い。171は下側面と窯接合面を除き自然軸が掛かるが、特に上側面から表面と裏面上方の軸が厚い。172は欠損部と窯接合面を除く全面に自然軸が掛かるが、表面全体の自然軸が厚めである。

不明窯道具 (第17図167、第18図173)

窯道具として分類したが、167と173は用途が不明の資料である。167は円盤状の器形を想定したが、上面は割れ口の可能性が高く、灰軸陶器製品の底部であるとも考えられる。胎土は灰軸陶器と同質である。底径は8.0cmを測り、底部外面には回転糸切痕が残っている。側面は上方に膨らみを持つ。上面は割れ口の様に凸凹し、一部には自然軸が掛かる。173は棒状の道具としたが、天井から垂れ下がった自然軸の塊の可

能性が考えられる。胎土は焼台や障炎壁よりも粗く、天井の貼り土を含み垂れ下がったものと考えられる。掲載図の上部が割れ口で太く、下端が細くなり先端は丸く収まっている。自然軸は割れ口を除く全体にあり、光沢著しいものである。

3-2. 須恵器

室内と物原から須恵器に分類される資料が出土している。胎土は硬質で、青灰色を基本に淡灰色や灰黄色もみられる。微細な礫の含有が灰釉陶器胎土よりも多く緻密さにやや欠ける。須恵器として計上できる個体は4個体のみで、器種は甕(158)、甕(159、160)、搦鉢(161)である。

甕(第17図158)

甕は室内から158が出土している。個体数には計上していないが物原からも甕の小破片が出土している。これら破片の大半は158と同一個体と考えられるが、別個体に分けられる破片も確認できる。158の胎土は灰黄色を呈する。肩部から胴部にかけての破片資料で、上端は頸部の根本である。外面全体に平行タタキ目が施され、内面は僅かながら指によるナデ上げ痕や指頭厚痕が確認できる。内外面とも自然軸は付着していない。

甕(第17図159・160)

甕に分類される破片資料が2個体出土している。159は胴部把手付近、160は底部で、胎土の差から別個体としている。胎土の色は、159が黄灰色、160が青灰色を呈する。159は断面形が角状の把手を残す部位で、把手の幅は約4cmである。把手及び本体接合部の表面は指頭による整形の痕跡が良く残り、内面の一部にも把手接合時の指頭厚痕を確認できる。その他外面には回転ヘラ削り等の調整はみられない。60の底部は外縁を残す形で、ヘラ切りによりくり貫かれた孔が設けられている。部分的な資料のため全容は不明であるが、少なくとも小さな円孔をいくつも持つ底部ではなく、孔に棧等を設けた底部と推測される。外面には胴部と底部を分けるように片切彫りの沈線が巡り、胴部は回転ヘラ削り調整されている。残存する底部外面の観察から、底面は未調整で砂粒圧痕をそのまま残す。

搦鉢(第17図161)

161は搦鉢に分類される底部資料である。胎土は青灰色を呈する。内面は全て欠損している。高さ2cm程度の肉厚な平底の底部で、胴部の下方の段をもって底部の径が太くなっている。底径は9.2cmを測る。底部外面は回転ヘラ削り調整および回転ナデ調整されている。

3-3. 土師器

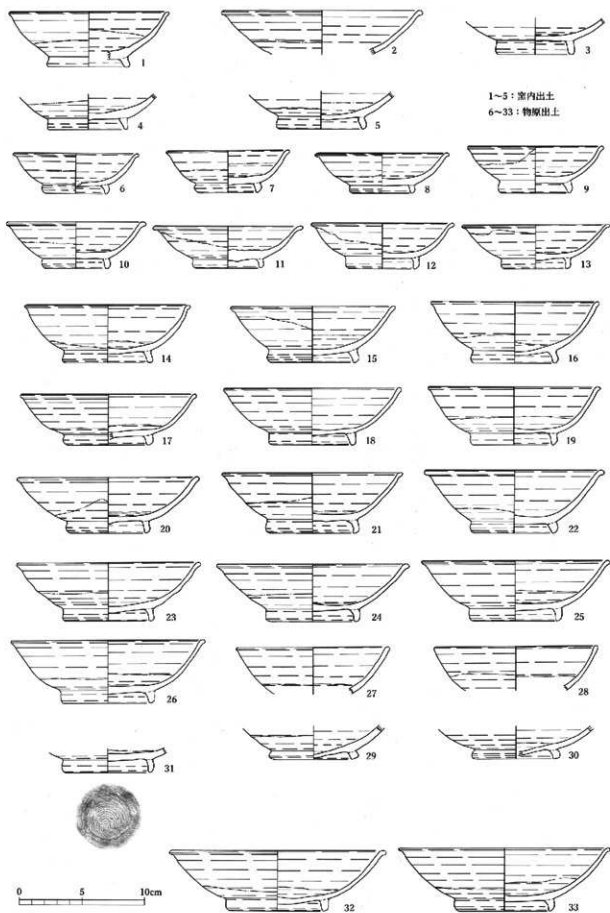
土師器に分類される遺物が物原から1個体のみ出土している。

甕(第17図162)

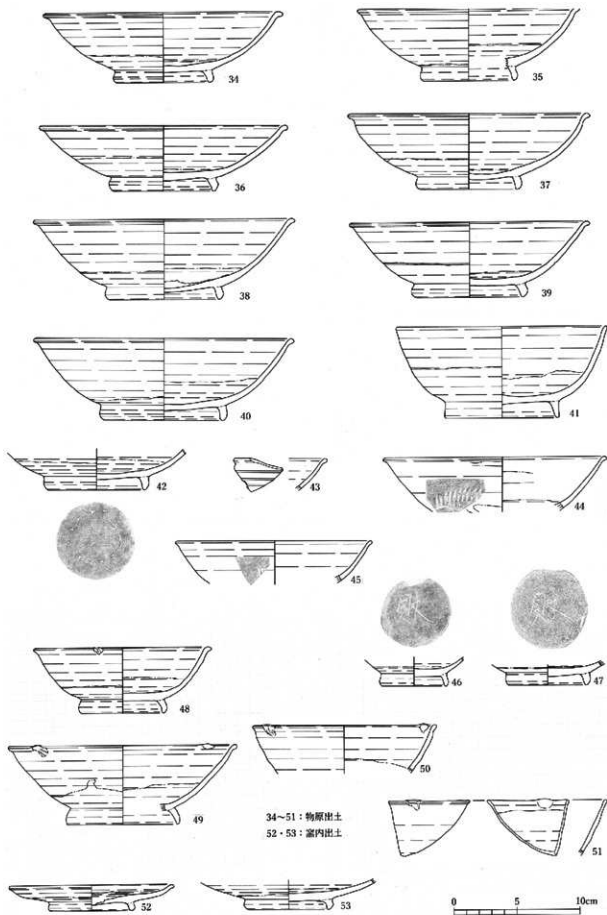
162は土師質の甕で、僅かに口縁部を欠く胴部上半資料である。胎土は土師器としては硬質で、暗黄灰色を呈する。灰釉陶器と須恵器に比べ微細な礫の含有が多く緻密さを欠いている。残存部位から口径20cm前後と推測される。内外面ともロクロナデ調整がされ、外面は組輪積みとロクロ目による凹凸が明瞭である。

4. 大針6号窯まとめ

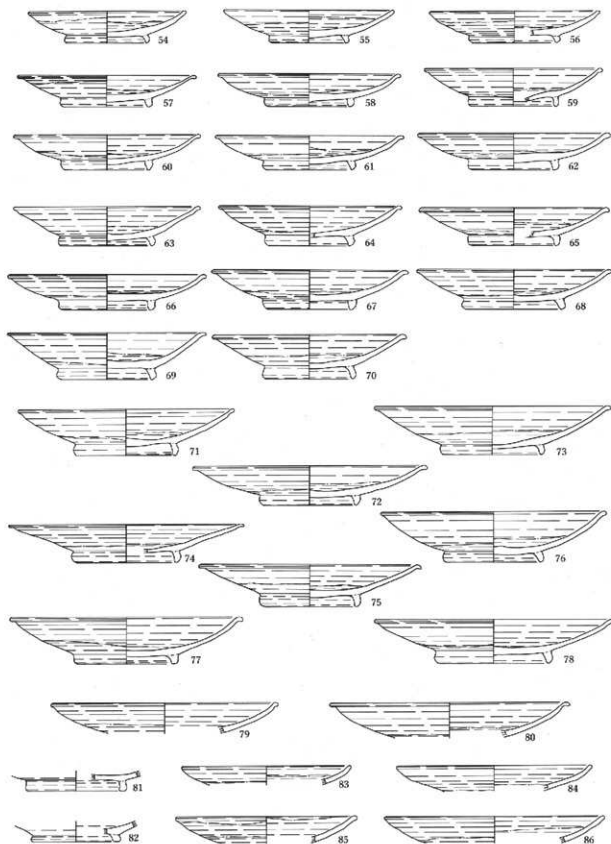
大針6号窯は窯体と物原に広く現代の擾乱を受けていたため、窯体と包含層の一部が破壊されていた。窯体の上半部が調査区外でありその全容が不明であるため、窯体構造から窯式の比定は難しい。ただし、検出



第10図 大針6号窯 出土遺物実測図(1)



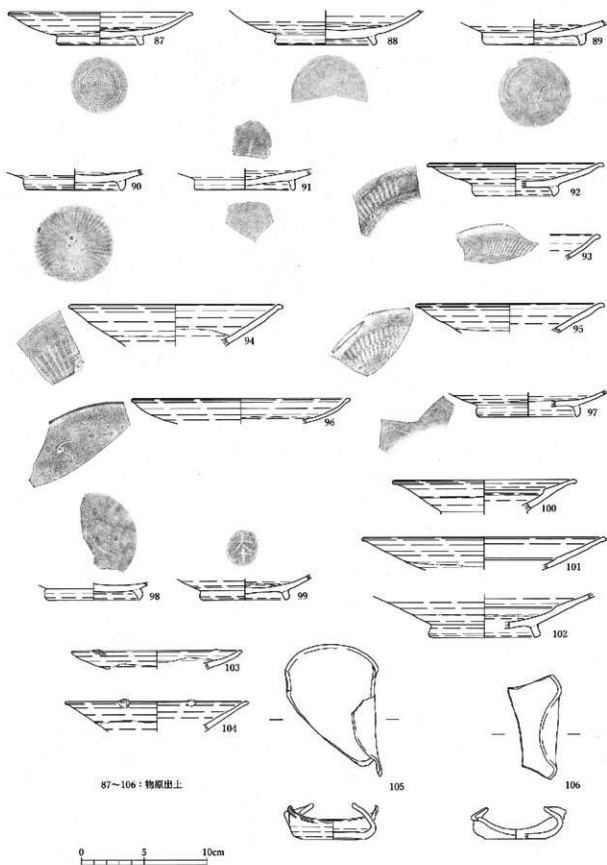
第11図 大針6号窯 出土遺物実測図(2)



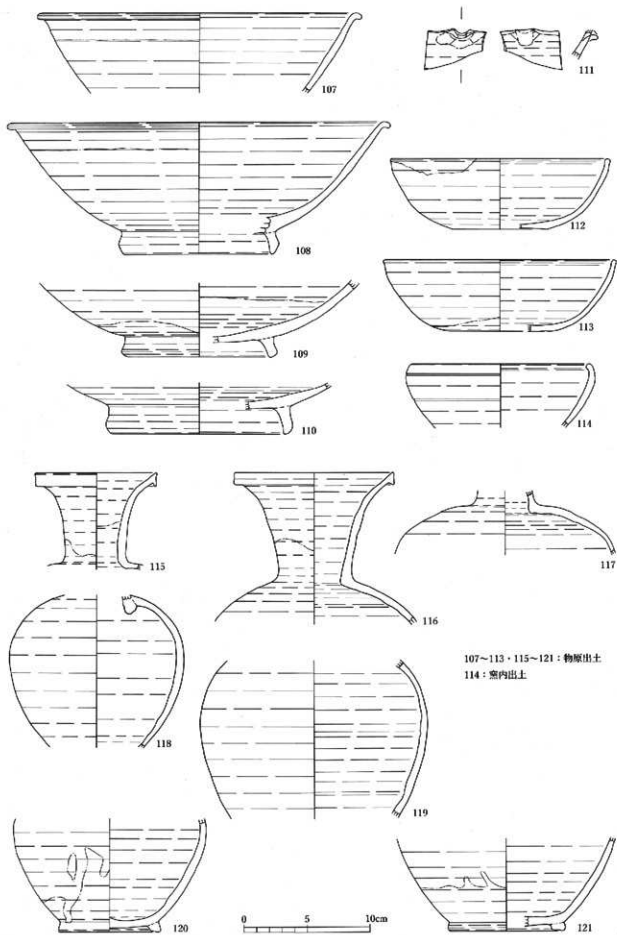
54~80・82~86:物原出土
81:室内出土

0 5 10cm

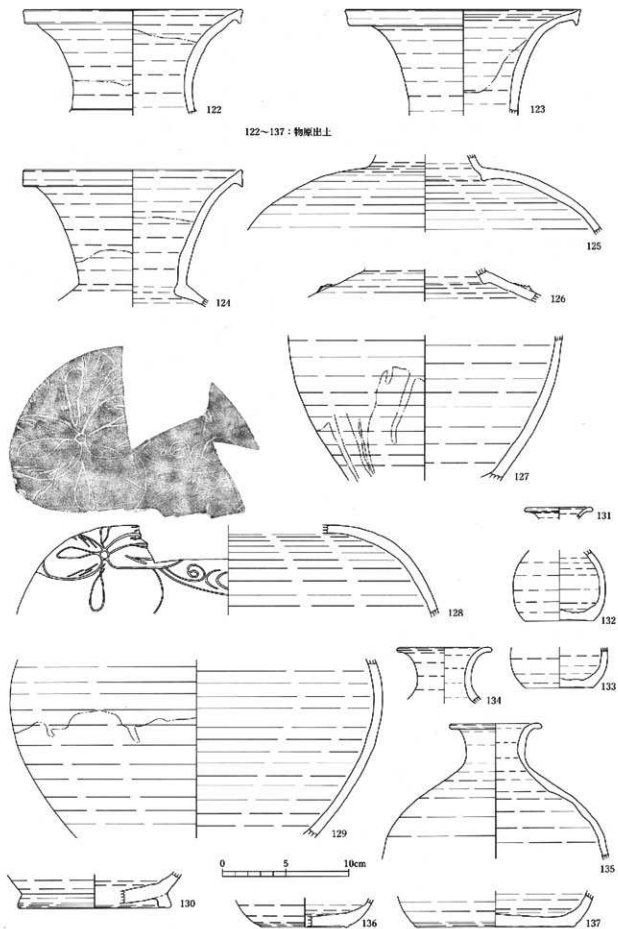
第12図 大針6号窯 出土遺物実測図(3)



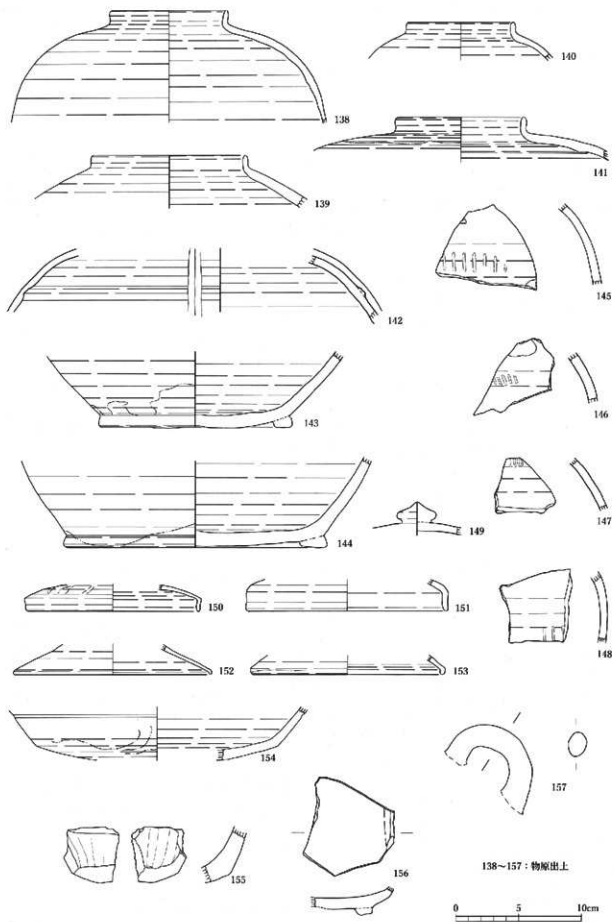
第13図 大針6号窯 出土遺物実測図(4)



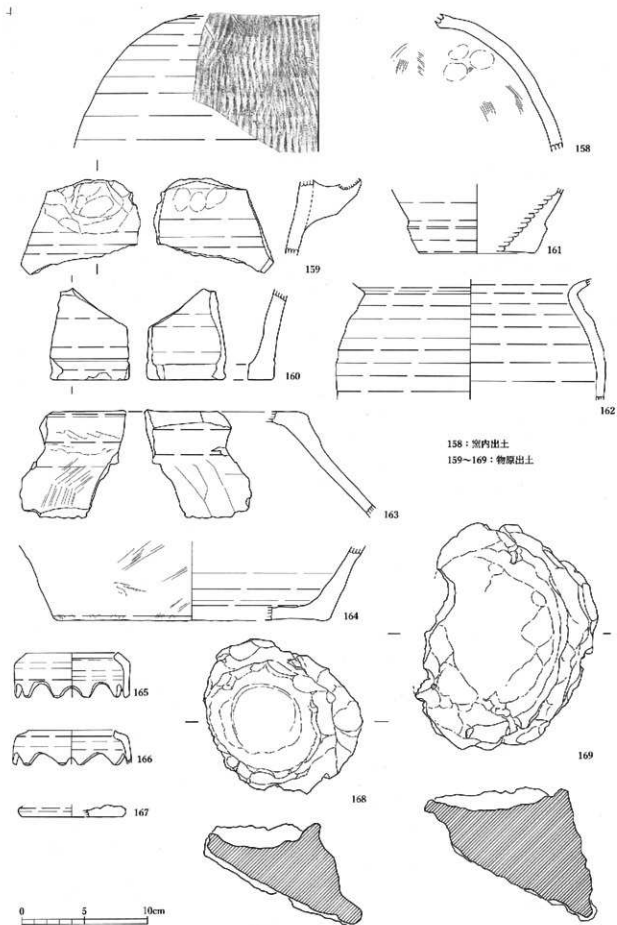
第14図 大針6号窯 出土遺物実測図(5)



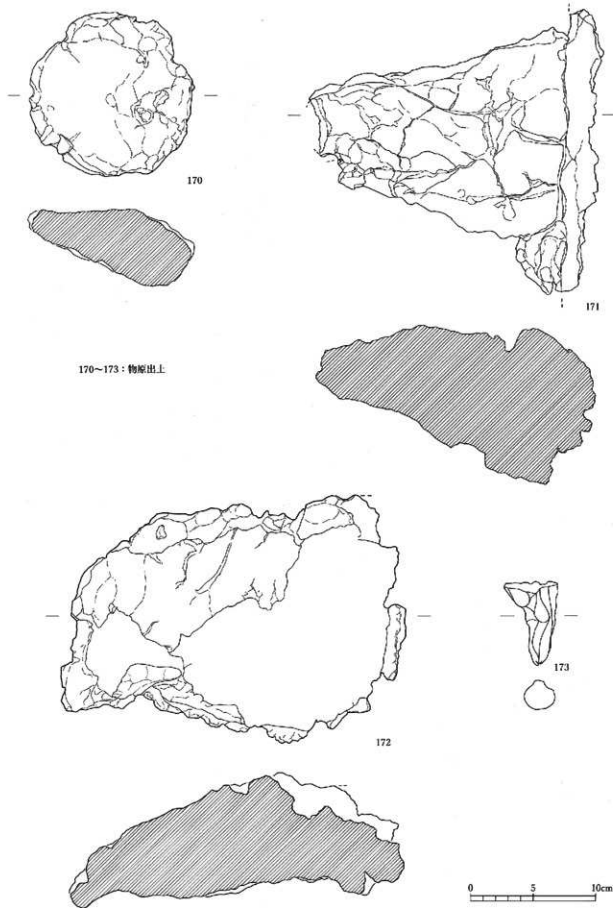
第15図 大針6号窯 出土遺物実測図(6)



第16図 大針6号窯 出土遺物実測図(7)



第17図 大針6号窯 出土遺物実測図(8)



第 18 図 大針6号窯 出土遺物実測図 (9)

範囲内で確認できる構造としては、分焰柱を伴う寸胴気味の窯体平面プランを持つ窯であることのほか、床面傾斜は焚口から分焰柱までは平坦で、分焰柱と焼成室の境で僅かに下るも緩やかな上りに転じることが挙げられる。なお、窯に付帯する遺構等は検出されていない。

6号窯の窯内と物原から出土した遺物は、灰釉陶器の他に若干量の須恵器と土師器がある。灰釉陶器では碗類と皿類が主体となり、鉢類（鉢・片口鉢・鉄鉢）、瓶類（長頸瓶・広口瓶）、壺類（短頸壺）、その他に蓋や風字硯等も作られている。窯道具はサヤとトチが出土している。須恵器は甕、播鉢、甕が僅かに出土している。甕に関しては窯内からも出土しているため灰釉陶器との併焼を考えられるが、窯内覆土も大きく攪乱を受けていたため確実な併焼例とは言えず可能性に留める。灰釉陶器の碗類と皿類の平均的な法量値と器形のほか、浸け掛け主体の施釉であること、高台は外側の稜がやや不明瞭な三日月高台であることなど東濃窯灰釉陶器編年の大原2号窯式の特徴を確認できる。一方、口縁端部が玉縁状に短く折り返される器形であること、刷毛塗りの碗皿が2～3割程度存在することなど前段階の光ヶ丘1号窯式の特徴もある。つまり大原2号窯式のうちでも古い様相を含んだ窯である。以上から、本窯は大原2号窯式に比定されるが、光ヶ丘1号窯式期の終わりから程ない時期に開始したものと考えられる。実年代は10世紀前半が推定される。窯体構造も大原2号窯式期のものとして矛盾はない。

第2節 大針8号窯

大針8号窯は6号窯から約50m南南東に位置し、同一西向き斜面の標高175～180m辺りに構築された山茶碗窯である。8号窯と9号窯は一体の調査区としてグリッドを設定している。グリッド番号は、6号窯からの続きで北から南にP・Q…Yとし、東西方向のグリッド番号数字は東端を起点に振っている。調査面積は約260㎡で、窯体と付随する遺構、物原を確認している。出土遺物はコンテナ整理箱92箱分である。

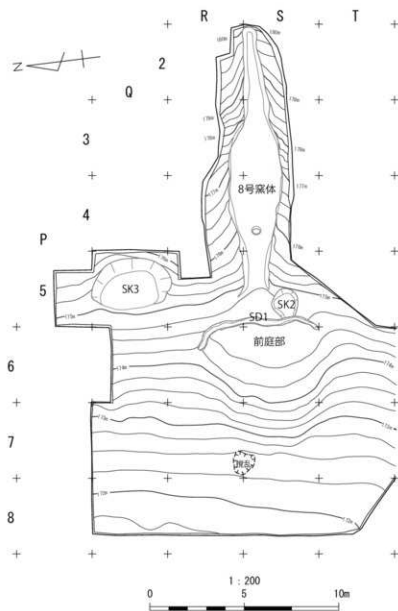
1. 窯体（第20・21図）

本窯は、地山をトンネル状に掘り抜いて構築された窯である。焚口・燃焼室・分焰柱・焼成室・煙道を検出したが、焚口付近は攪乱を受けたため一部削平されている。天井は全て窯内に崩落しており、焼成室と煙道との境にダンパーの痕跡は確認されていない。窯体の主軸はN-84°-Wを示し西に開口している。主軸全長13.79m、焼成室床面最大幅2.7m、焼成室床面の傾斜角は25～30°、焚口と先端の煙出しとの比高差は約4.4mである。検出時、窯体覆土中には崩落した天井や側壁上半部が破片となって堆積していた。なお、燃焼室から焼成室にかけて床面直上から多量の焼成不良の山茶碗と窯道具が出土している。

焚口・燃焼室

焚口は左右の側壁の立ち上がりが始まる部分と考えられ、その床面幅は約1.09mを測る。焚口から分焰柱に向かって地山面あるいは粘土面の被熱硬化が認められる。築窯時の排土でつくられた前庭部に向かってほぼ「ハ」の字形に開き、焚口の前右側にはSK2が広がる。なお、焚口の右側壁は攪乱により一部削平されていた。

燃焼室は焚口から分焰柱前までの範囲で全長約2.85m、床面最大幅約1.76mを計る。焚口から分焰柱に向かい徐々に広がる平面形である。床面は約3～5°の僅かな傾斜をもって分焰柱に向かう。分焰柱の前前方約50cmより15～20°の傾斜角で床面が上がり始める。燃焼室床面直上には分焰柱の手前一部貼り床と思われる面が確認されたが、大半で貼り床は確認されず炭化した地山が露出していた。燃焼室の側壁は床面と同様にほとんどの範囲で貼り壁は確認されず、赤色被熱した地山がみられる。



第19図 大針8号窯 グリッドおよび遺構配置図 S=1/200

分焰柱

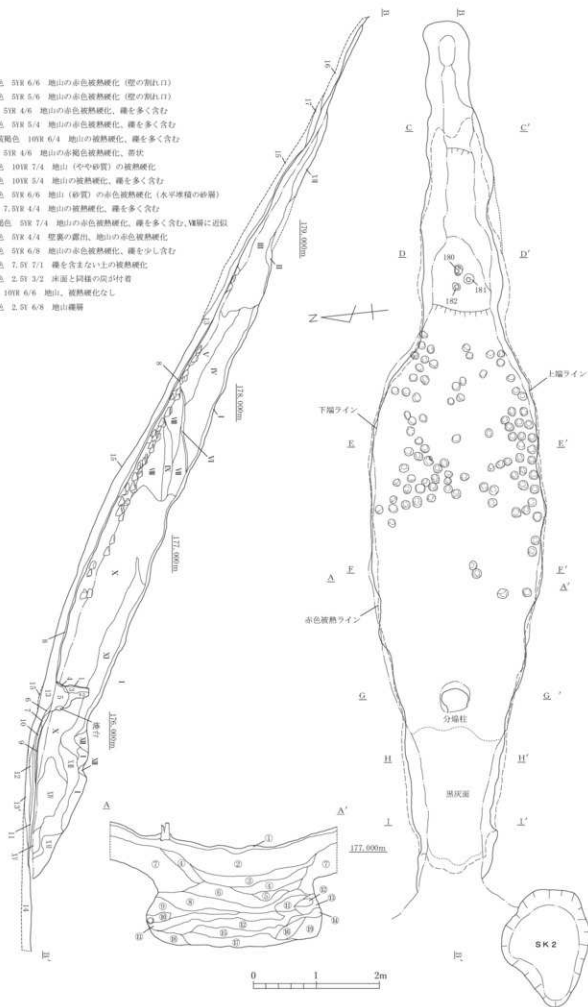
分焰柱は前方上端の一部が失われており、高さ約57cmまで残存している。基底部の平面形は、長径約48cm、短径約46cmと円形プランを呈する。断ち割り調査の結果から、分焰柱は地山である砂礫土を基礎とし、礫を含まない盛土(粘土)で構築されたことが分かる。柱の外縁部の一部では、補強材として粘土が貼られていた痕跡が残っている。

焼成室

焼成室は分焰柱の中央から煙道との境で床面傾斜が変化する部分までの間である。床面全体に貼り土(貼り床)されていたが、煙道との境で貼り土は途切れる。全長は窯体主軸上で約5.86mを測る。平面形は燃焼室から大きく開き始め、窯体プランは焼成室中央部で最大幅約2.7mを迎える。また、煙道へ向かって徐々に狭くなり煙道との境で約92cmとなる。床面傾斜は、分焰柱付近で約10°~15°と緩やかであるが煙道へ向かうにつれ徐々に角度を増していく。床面幅が最大となるあたりから傾斜角は約25°~30°となる。断ち割

(窯体断面)

- I 明褐色 5YR 6/6 地山の赤色被熱酸化 (壁の割れ口)
- II 赤褐色 5YR 5/6 地山の赤色被熱酸化 (壁の割れ口)
- III 赤褐色 5YR 4/6 地山の赤色被熱酸化、礫を多く含む
- IV 赤黄褐色 5YR 5/4 地山の赤色被熱酸化、礫を多く含む
- V にぶい黄褐色 10YR 6/4 地山の被熱酸化、礫を多く含む
- VI 赤褐色 5YR 4/6 地山の赤褐色被熱酸化、苔状
- VII 浅黄褐色 10YR 7/4 地山 (やや砂質) の被熱酸化
- VIII 暗黄褐色 10YR 5/4 地山の被熱酸化、礫を多く含む
- IX 淡赤褐色 5YR 6/6 地山 (砂質) の赤色被熱酸化 (水平層様の砂層)
- X 暗褐色 7.5YR 4/4 地山の被熱酸化、礫を多く含む
- XI 淡赤黄褐色 5YR 7/4 地山の赤色被熱酸化、礫を多く含む、VII層に近似
- XII 暗赤褐色 5YR 4/4 空襲の露出、地山の赤色被熱酸化
- XIII 赤褐色 5YR 6/8 地山の赤色被熱酸化、礫を少し含む
- XIV 灰白褐色 7.5Y 7/1 礫を含まない土の被熱酸化
- XV 黒灰褐色 2.5Y 3/2 床面と同様の炭が付着
- XVI 黄褐色 10YR 6/8 地山、被熱酸化なし
- XVII 黄褐色 2.5Y 6/8 地山礫層



第20図 大針8号窯 窯体実測図(1)

(実体断面) (断面)

① 暗褐色土層 2.5Y 3/3 腐葉土

② 灰白色粘質土層 2.5Y 8/2 礫を含まない砂質で粘性は少ない、やや硬化した粘質土で小ブロック状に割れる。①層との境2~3cmの有層分が深い

③ 灰褐色粘土層 2.5Y 7/2 礫を含まない砂質でやや粘性あり、締まりあり(②層からの自然変化)

④ 灰黄褐色土層 2.5Y 6/2 1cm以下の礫を僅かに含む、有層分の影響が③層より深い、やや締まりが強い

⑤ 黄褐色土層 2.5Y 6/4 礫を含まない砂質で締まりあり、地山土と色調が近似する

⑥ 灰褐色土層 2.5Y 5/1 1~2cm大の礫を少量含む、ややソルト質で締まりが強い、有層分の影響が全体的に⑤層より深い

⑦ 明黄褐色土層 10YR 6/6 地山土、1~4cm大の礫を多量含む均質で安定し締まりあり

⑧ 浅黄褐色土層 2.5Y 6/3 1~3cm大の礫を少量含む均質で締まりあり

⑨ 黄褐色土層 2.5Y 5/3 1cm以下の礫を僅かに含む、地山土を少量含む、やや粗めで締まりが強い

⑩ 赤褐色土層 5YR 5/4 地土が主体、⑨層との混合土で粗く締まりが強い

⑪ 暗赤褐色土層 5YR 4/3 暗い色の赤色鉄酸化層(天井)で礫をほぼ含まない

⑫ 黄灰褐色土層 2.5Y 5/3 ⑩層と同一の層か、1cm以下の礫と地山土を礫層が含む

⑬ 黄赤褐色土層 7.5YR 5/4 粗砂と地山土・地土+小ブロックが混在する、粗く締まりを欠く

⑭ 黄赤褐色土層 7.5YR 6/4 浅黄褐色土に地土が多く混ざり(⑬層と近似)、粗く締まりを欠く

⑮ 浅灰褐色土層 10YR 6/1 木炭粒・地山土を少量含むやや粗めで締まりを欠く

⑯ 黄褐色土層 7.5YR 5/3 黄褐色土・地土が粗く混在する、色調にムラあり、礫をほぼ含まない、粗く締まりを欠く

⑰ 黄褐色土層 10YR 6/4 被熱硬化した地土ブロック(焼灰質)を多く含む、やや粗めで締まりが強い

(実体断面) (断面)

1 灰黄褐色土層 2.5Y 5/2 分層柱状り土、被熱硬化しているがやや強い

2 浅褐色土層 7.5YR 7/6 分層柱状土、弱めの被熱硬化、礫を含まない土小ブロック(焼灰質)を少量含む強い

3 明赤褐色土層 5YR 5/8 分層柱状土、赤色被熱硬化し礫を含まない

4 赤褐色土層 5YR 5/6 分層柱状土、赤色被熱硬化し礫を含まない

5 黄褐色土層 7.5YR 7/8 分層柱状土、弱い赤色被熱硬化で礫を含まない

6 浅灰褐色土層 2.5Y 7/6 弱く被熱硬化した地山砂礫層

7 近い・暗褐色土層 7.5YR 7/4 腐り床か、弱い赤色被熱硬化、礫を含まない砂質で締まりなし

8 暗黄褐色土層 7.5YR 6/6 腐り床、赤色被熱硬化、1cm以下の礫を少量含むやや砂質で締まりなし

9 照褐色土層 8.2/1 木炭の埋蔵で粘土が混ざる、柔らかく締まりなし

10 黄褐色土層 2.5Y 6/6 被熱硬化土、1cm以下の礫を僅かに含むやや砂質、地山の一部と思われるが粒子が粗く締まりを欠く

11 灰褐色土層 10Y 2/1 地山土の灰化層、礫を含まない、被熱硬化しているが柔らかく締まりを欠く

12 黄褐色土層 2.5Y 6/8 地山土の被熱硬化、礫を含まない砂質あり

13 赤褐色砂礫土層 2.5YR 4/6 赤色被熱硬化した地山砂礫土層

13' 赤褐色砂礫土層 2.5YR 4/6 赤色被熱硬化した地山砂礫土層、13層よりやや礫が少ない

14 黄褐色土層 10YR 6/6 地山層、8cm大の礫を少量含む均質で安定、締まりあり

14' 黄褐色土層 10YR 6/6 14層の地山土のうち、3cm前後の礫の含有量がやや多くなる

15 黄褐色砂礫土層 10YR 6/5 地山砂礫土層、1~3cm大の礫を主体に5cm以上の礫も含む壁部より1m以下の方が礫が多くなる(9号室も同様)

15' 黄褐色砂質土層 10YR 6/5 15層の地山砂礫層から礫が多くなり砂質土層となっている、柔らかい

15'' 浅黄褐色土層 2.5Y 7/2 15層のうち砂質土層の地山土、柔らかい

16 白灰色粘土層 2.5Y 8/1 地山粘土層、礫を含まない層で締まりあり、ソルト質が混ざる

17 明黄褐色砂礫土層 7.5YR 7/8 地山砂礫層、3cm前後の礫が主体で固く締まる

18 近い・黄褐色土層 10YR 7/3 被熱硬化した地山砂礫層、やや強い

18' 暗黄褐色土層 7.5YR 6/4 赤色被熱硬化した地山壁面

19 照褐色土層 7.5YR 6/8 弱く被熱した地山砂礫土層、硬化はしていない

20 照赤褐色土層 5YR 6/8 赤色被熱硬化した地山砂礫層

21 浅灰褐色土層 2.5Y 6/1 古い腐り床か、被熱硬化している、礫を含まない粗粒度

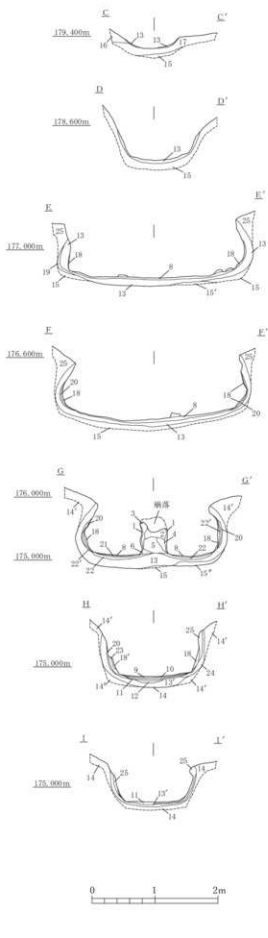
22 黄褐色土層 2.5Y 6/6 被熱硬化した地山砂礫土層、黄色に変色しやや砂質で締まりが強い

22' 黄褐色土層 10YR 7/6 被熱硬化した地山砂礫土層、黄褐色に変色

23 浅黄色土層 5Y 7/3 被熱硬化した地山層、弱く変色

24 暗赤褐色土層 2.5YR 4/2 赤色被熱硬化した地山層

25 明褐色土層 2.5YR 6/8 赤色被熱硬化した地山層



第21図 大針8号窯 窯体実測図(2)

り調査の結果、本窯の床面は1枚の貼り土（貼り床）がなされている。床面上には焼台62個が残存しているが、ほぼ元位置を保っていると推定されるものは20個程であると考えられる。また、床から剥がれた焼台や製品など窯内遺物の多くは焼成室手前より分焰柱に引っかかるような状態で出土している。左右の側壁は貼り壁が広く剥落し地山が露出した状態で検出された。斯ち割り調査の結果からも、複数回にわたる貼り壁の痕跡は確認できなかった。

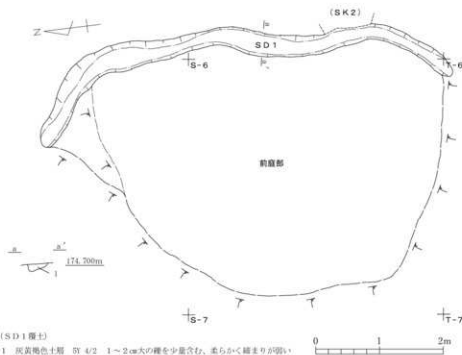
焼成室の覆土は、下から順に天井・側壁の落下破片（第20図⑩～⑰）、黄褐色土層（同⑩、流入土）、浅黄褐色土層（同⑧、流入土）が堆積している。覆土最下層に上方からの流入土（自然流入土）がみられないことから本窯は天井が崩落したために廃棄された可能性が高いものと推定される。焼成室出土遺物の大半が焼成不足であることが、焼成中の天井崩落状況を物語っている。

煙道部

焼成室の貼り床が途切れ、傾斜が変化する部分から先端の煙出し部分までが煙道部に相当する。全長は約4.6mで、左右の側壁は先端の煙出しに向かって徐々に幅を減していく平面形である。焼成室との境から1.2mほど奥までの範囲は約25°の床面傾斜角で、床面上には伏せた状態の碗（第29図180～182）が出土している。その上方は床面は約30°の傾斜角をもって先端に向かい、C-C'ラインから主軸上に28cm手前の地点から約23～25°と緩やかに立ち上がっている。床面は貼り土（貼り床）がされておらず、全体が地山素掘りの状態で表面は被熱のため赤褐色を呈する。側壁も同様に貼り土は行われておらず、地山面の状態で表面は被熱により赤褐色となっている。なお、焼成室との境にダンパー（火災調整施設）は検出されなかった。

2. 前庭部・排水溝（第22図）

窯体焚口前方（西側）には平坦な前庭部が設けられていた。窯体築窯時の掘り抜き排土を斜面下方に盛った後、人為的に作り出した作業面である。その規模は南北約6.2m、東西約3.8mを測る。また、前庭部の



第22図 大針8号窯 前庭部実測図

東側ラインに沿うように南北方向に延びる長さ約 6.3 m の排水溝 (SD 1) が設けられていた。SD 1 は凹凸があるもののほぼ直線的な平面形で、上面幅 20 ~ 44 cm、底面幅 12 ~ 32 cm、深さ 10 cm 前後を計測する。横断面形は逆台形または浅い U 字状を呈する。SD 1 底面は中央部から徐々に下がっていき、南北端部は開口して斜面下方に排水するようになっている。SD 1 の覆土は礫を少量含む灰黄褐色土層で遺物は出土していない。

3. 土坑状遺構 (第 23・24 図))

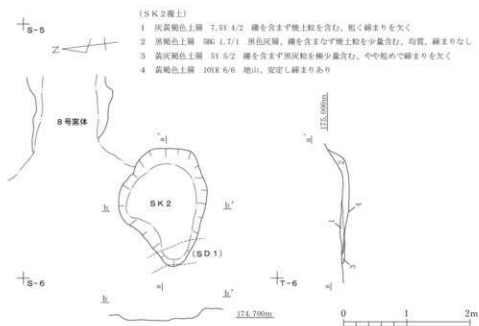
地山を掘り込んだ、あるいは掘削した状態の遺構について一括して SK 2 とした。

SK 2 (第 23 図)

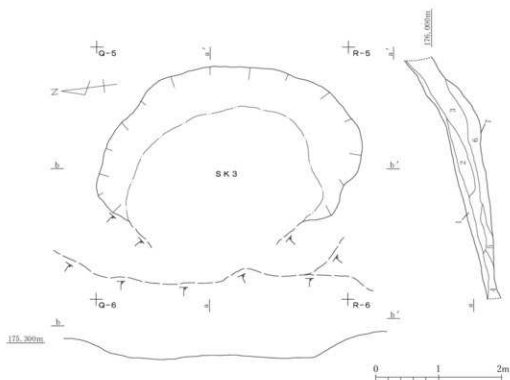
SK 2 は竈体焚口の南側に掘削された土坑状遺構である。東西方向の幅は約 1.06 m、南北方向の幅 0.74 m を測る。平面プランは東西方向に長い不整形な楕円形を呈する。遺構の深さは斜面上方側(東側)で約 16 cm、斜面下方側(西側)では約 4 cm 前後と浅い。底面は平坦な印象を受けるが東から西に向かって下降している。覆土は下層が黄灰褐色土層と黒色灰層、上層が灰黄褐色土層で、主体である黒色灰層から遺物が少量出土している。焚口に溜まった黒色灰の廃棄場と推測される。本遺構の西側を一部切断するように SD 1 が走っているが切合い関係では SK 2 が新しく、SD 1 の一部を削る形で SK 2 が作られている。

SK 3 (第 24 図)

SK 3 は竈体焚口の北側 Q-5 区を中心とした範囲で検出した遺構である。東西に約 2.7 m、南北に約 4.2 m を測る不整形な楕円形の平面プランである。やや大型の遺構であるが深度は最大で 20 cm 前後、覆土は黄褐色シルト質土層 (第 24 図 6) である。斜面上方側 (東側) は周辺の地形に沿って削平した状態であり、斜面下方となる西側が広く開口している。遺構の底面は広く平坦にみられるが、全体的に浅い皿状を呈している。底面は地山土が露出しており、粘土等の堆積やビット状の遺構は検出されていない。また、覆土や遺構底面直上から遺物が出土しているが、その量は少ないため不良品を投棄する場所として活用されていないと推測される。開口部における床面標高は約 175.0 m で、8 号竈焚口床面よりも 30 cm 程高い。



第 23 図 大針 8 号竈 SK 2 実測図



- 1 暗褐色土層 7.0YR 3/3 腐葉土。2層・3層との境には薄く灰褐色有機土層 (2.5Y5/1) あり
- 2 浅灰褐色シルト質土層 2.0Y 7/2 礫を含まず均質で柔らかい。やや締まりを欠き遺物を僅かに含む
- 3 浅黄褐色シルト質土層 2.0Y 7/3 礫を含まず均質で締まりあり。遺物を僅かに含む
- 4 浅灰褐色シルト質土層 2.0Y 6/2 礫を含まない (他の2・3・5層に比べ土が固まっている (小ブロック状に割れる))
やや締まりを欠く
- 5 浅黄色土層 2.0Y 6/3 礫を含まず均質で締まりあり (2・3・4層に比べ粘性がない)
- 6 黄褐色シルト質土層 2.0Y 6/4 SK3覆土。礫を含まず均質でやや締まりを欠く。上層に比べやや粘い。遺物を少量含む
- 7 明黄褐色土層 10YR 6/5 地山礫。2~5cm大の礫を少量含む。安定し締まりあり

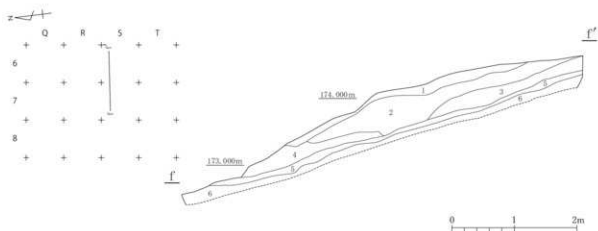
第24図 大針8号窯 SK3 実測図

4. 物原 (第25・26図)

物原は焼成不良品や欠損品、焼台、灰や焼土など窯の作業に伴って生じた廃棄物を投棄した場所で、窯体焚口前方にある前庭部を基点に西側の斜面下方に広がる。その範囲は東西約11m、南北約16mに及び、随所で近年の人為的な攪乱等がみられる。

物原の遺物包含層は主に掘り抜き排土の外縁を覆うように堆積しているが、堆積状況は場所によって若干様相が異なる。約32cmと最も厚い堆積をみせるのは、窯体主軸延長線上にあたるS-7・8区である。ここでは遺物や焼台が多く集積した暗灰褐色土層 (第25図39) と赤黄褐色土層 (同42) を下層とし、上層には焼土や焼台破片を多量に含む暗褐色土層 (同32) が堆積する。また、掘り抜き排土の南側縁辺部であるT-6・7・8区では、遺物や焼台を多く含む黒灰褐色土層 (同37) と黄褐色土層 (同36) の堆積がみられる。その上層には遺物・焼台破片等を含む現代攪乱盛土が厚く堆積し、最も攪乱の被害が著しい。隣接する9号窯遺物包含層及び掘り抜き排土との上下関係は見られず、T・U区境で8号窯物原の広がりも収まっている。

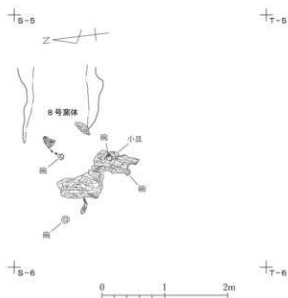
窯体の掘り抜き排土は、黄褐色砂礫土あるいは黄橙褐色土層が主体で (第26図1~4)、旧表土 (第25図47、第26図5) の上に堆積している。掘り抜き排土の規模は東西約6.2m、南北約6.2m、中心部での厚さは約65cmを測る。



(掘り抜き排土断面)

- 1 黄褐色土層 2.0V 7/6 掘り抜き排土、1～3cm大の礫を多く含む粗い砂礫土、締まりを欠く
- 2 黄褐色土層 10VR 6/6 掘り抜き排土、1～3cm大の礫を少量含む、やや粒子が粗い砂質土、やや締まりを欠く
- 3 黄褐色土層 10VR 5/6 掘り抜き排土、1～3cm大の礫を少量含む、やや粒子が粗い、やや締まりを欠く
- 4 明黄褐色砂礫土層 10RX 7/6 掘り抜き排土、1～3cm大の礫が主体の粗めの砂礫土、やや締まりを欠く
- 5 灰黄褐色土層 2.R 5/1～5/2 母岩土層、礫を含まずやや砂質、均質で締まりあり
- 6 に近い黄褐色土層 10RX 5/4 地山層、4cm前後の礫を少量含む、均質で安定し締まりあり

第26図 大針8号窯 掘り抜き排土断面実測図



第27図 大針8号窯 焚口前炭化樹皮検出状況実測図

5. 炭化樹皮（第27図）

窯体検出時、焚口手前（S-5区）に細い木炭粒や炭化した樹皮、木材が確認された。焚口床面からつながらる底面からは5cm程度浮いており、木片の下からも遺物が出土しているなど窯焚きに伴うものではないと考えられる。

6. 出土遺物（第28～34図）

大針8号窯は、窯内、土坑、物原等から合計5790個体の遺物が出土した（第2表）。このうち焼台は実測用の数点を除き現地で個数を確認したのちに廃棄している。焼台を除く山茶碗類の個体数は4770点であり、こちらを山茶碗出土比率の母数として扱う。碗・小皿の生産を主体とし、両者で出土の88%を占めている。胎土は緻密で黄灰色から灰白色を呈するものが多い。また、山茶碗以外に若干量の土師器と須恵器、灰釉陶器が物原から出土しているが、他所からの混入品と考えられる。

6-1. 山茶碗

(1) 碗類

碗（第29図174～198、第30図199～221、第31図222～224）

碗は本窯の最多生産器種で、出土個体数は山茶碗類の約79%を占めている。口径12.2～16.2cm、器高4.6～6.8cm、高台径4.2～7.1cmと法量値に幅がみられる。特に小型なもの（222・223）と大型なもの（224）が存在するが、法量値による明確な区分には至らず例外的な資料として扱う。平均的な法量は口径14.7cm、器高5.7cm、高台径5.8cm前後である。高台は付高台でやや低く、基部の幅も広い断面三角形を呈する。体部が高台脇から直線的に開きながら立ち上がり口縁部に至るもの（174～182、189、193、194、198、

第2表 大針8号窯グリッド別出土遺物個体数表

分類	器種名	窯内	SK2	SK3	Q				R				S				T				表採	計	
					5	6	7	8	5	6	7	8	4	5	6	7	8	5	6	7			8
山茶碗 碗類	碗	669	3	1	4	390	154	22	36	585	409	56	3	81	261	160	54	16	375	270	23	90	3662
	無高台碗	6				6	2			1	17	9	6		1	10	1	4		6	3		72
	穿孔碗	3				2																	5
	刻線碗																		1		1		5
山茶碗 皿類	小皿	62	1			68	24	4	6	140	73	18		16	52	32	10	2	42	21	3	9	583
	平高台皿					1														1			4
	大皿																						1
山茶碗 鉢類	鉢																		1	1		1	4
	無高台鉢																						1
	片口鉢					7		1		5	2					2	3			2	2		24
山茶碗 その他	仏供																			1			2
	六器																					1	3
山茶碗 窯道具類	窯道具差A	8				62	11	3	1	70	60	10		11	31	12	7	2	43	37		13	381
	窯道具差B									6	3	3			1	1	1			2	1		18
	窯道具差C										1	1									1		4
	窯道具差D					1																	1
	焼台	142				8	4			42	395	55			79	151	13		10	96		8	1003
須恵器	壺類																						3
	甗																						1
土師器	器種不明																						1
灰釉陶器	碗	1		1												2							6
	皿																				1		2
	鉢類																						1
	瓶類					2					1												3
計	891	4	2	6	546	198	32	44	868	960	149	3	109	438	363	92	21	485	432	27	120	5790	

201、204、205、207、210、217、223)、体部が丸みをもって立ち上がり口縁部に至るもの(183、187、188、190～192、195～197、199、200、202、203、206、208、209、211～216、218、222、224)がある。いずれも口縁部は外反し、口縁端部が面取りされるものが多い。器壁は全体的にやや薄く、底部に向かうにつれて器壁が厚い。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に成形されている。底部内面中央にはロクロ目によって生じた小突起をそのまま残すものがみられるが、短い静止指ナデ調整で小突起を消したものも確認することができる。高台端部に靱殻痕がみられるものを多く確認しているが、一部の碗では靱殻痕が確認できないもの(219～221)もある。碗は重ね焼きされており、内面に上に重ねられた碗の高台が熔着したものや、接着痕がみられる。また、多く碗で口縁部から体部内外面にかけて降灰(自然釉)を受けていることを確認できる。

無高台碗(第31図225～237)

無高台碗は72個体出土している。口径13.3～16.2cm、器高4.9～6.0cm、底径5.1～6.8cmと法量地に幅がみられるが、平均的な法量は口径14.5cm、器高5.5cm、底径6.1cm前後である。碗と同様に器壁は全体的にやや薄く、底部に向かうにつれて器壁が厚い。体部が直線的に開きながら立ち上がり口縁部に至るもの(226、229、231、234、236、237)、体部は丸みをもって立ち上がり口縁部に至るもの(227、228、230、232、235)がある。いずれも口縁部は外反し、口縁端部が面取りされるものが多い。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に仕上げられている。底部内面中央にはロクロ目によって生じた小突起をそのまま残すものがみられるが、短い静止指ナデ調整で小突起を消したものも確認することができる。

穿孔碗(第31図238～240)

体部あるいは底部に穿孔のある資料が5個体出土している。うち1個体が体部、4個体が底部に施されている。なお、一部意図的な穿孔ではなく自然に割れたことによるものの可能性も否定できない。穿孔の大きさには個体差があり、体部に穿孔がある238は欠損部が大きく不明だが、239は底部外面からヘラ状工具により直径0.8cm前後の孔をあけているものと考えられる。240は底部に穿孔を持つ無高台碗で、穿孔は最大3.4cmの不整形な楕円形である。いずれも、体部は高台脇から直線的あるいは丸みをもって立ち上がるが、口縁部は欠損しているため詳細は不明である。

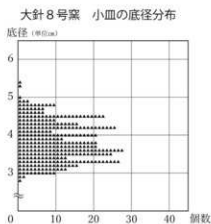
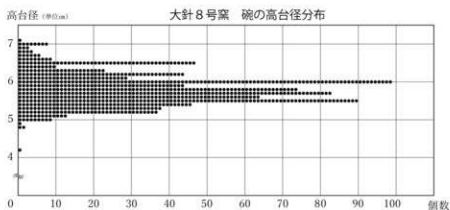
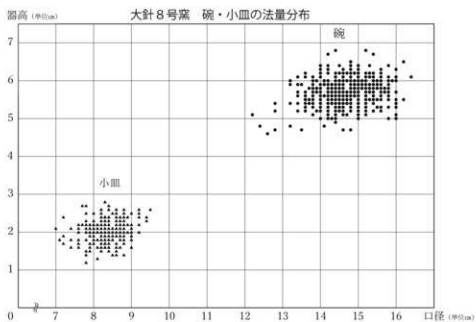
刻線碗(第31図241)

体部外面にヘラ状工具により刻線の施された碗の破片であるが、全容は不明である。口縁部は内外面ともにナデ調整され、体部内面には降灰(自然釉)がみられる。胎土は緻密で灰白色を呈している。

(2) 皿類

小皿(第32図242～284)

小皿は碗の次に出土量の多い器種で、山茶碗類の約12%を占めている。すべて無高台の小皿で、口径7.0～9.5cm、器高1.2～2.8cm、底径2.8～5.4cmを測る。法量値に幅がみられるが、平均値は口径8.3cm、器高2.0cm、底径3.8cm前後である。底部から口縁に向かって直線的に開くもの(242～244、246～248、251、253、254、258、259、265、270、272～274、278、280、282、284)、丸みを帯びながら立ち上がるもの(245、249、250、252、255～257、260～264、266～269、271、275～277、279、281)がみられる。口縁部は外反しないものが多く、中には口縁端部が肥厚し面をもつものも確認できる。器壁は全体的にやや厚く、器高もやや深い形状である。底部外面には回転糸切痕が残り、そのうち板目状圧痕が認められるものも確認できる。また、底部内面中央のロクロ目によって生じた小突起を静止指ナデ調整により消しているものもあ



第28図 大針8号窯 出土遺物法量分布図

る。

平高台皿（第32図285・286）

平高台皿は2個体出土している。小皿と同様に無高台であるが、底部と体部の境にくびれがみられる。口径5.0cm、器高2.8cm、底径3.3cmを測り、分量値に幅がみられる。底部から口縁にかけて丸みをもって立ち上がるものがみられる。口縁部は外反せず、端部が肥厚し面をもつ。器壁は全体的にやや厚く、底部に向かうにつれて器壁が厚くなる。底部外面には回転系切痕が残る。

大皿（第33図287）

大皿は1個体みの出土である。口径19.8cm、器高3.1cm、底径9.5cmを測り、底部から口縁にかけて直線的に開く。口縁部は外反せず、端部が肥厚し面をもつ。器壁は全体的にやや厚く、底部外面には回転系切痕が残る。

（3）鉢類

鉢（第33図288・289）

鉢は3個体出土している。口径16.9～17.2cm、器高6.8～7.3cm、高台径6.2～7.0cmを測る。高台脇から直線的に開くもの（288）、丸みをもって立ち上がるもの（289）が確認される。器壁は全体的にやや厚く、底部に向かうにつれて器壁が厚くなる。口縁部は外反し、端部が肥厚し面をもつ。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に成形される。なお、口縁部の大半が欠損しているため、片口が施されていたかは不明である。

無高台鉢（第33図290）

高台のない平底の鉢が1個体確認され、口径14.6cm、器高5.8cm、底径7.0cmを測る。底部から丸みをもって立ち上がり、器壁は全体的にやや厚い。口縁部は僅かに外反し、端部が面取りされる。体部外面はロクロ目による凹凸がみられ、ヘラ状工具による沈線が2条施されている。底部外面は回転系切痕が残る。なお、上記の鉢と同様に口縁部の大半が欠損しているため、片口が施されていたかは不明である。

片口鉢（第33図291～293）

片口鉢は、個体を識別できた小破片を含む24個体が出土している。口径15.9～18.8cm、器高5.7～7.3cm、高台径6.1～7.0cmを計測する。平均値は口径17.5cm、器高6.8cm、高台径6.6cm前後である。高台脇からやや直線的に開きながら立ち上がるもの（291）、やや丸みをもって立ち上がるもの（292）が確認されている。器壁は全体的にやや厚く、底部に向かうにつれて器壁が厚い。口縁部は外反し、端部が肥厚し面をもつ。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に成形される。口縁端部には1ヶ所内外面からの指圧により片口が作り出されている。また、体部内面に降灰（自然軸）を受けていることを確認することができる。

（4）その他

仏供（第33図294）

仏供は2個体出土している。口径16.2cm、器高6.1cm、底径7.6cmを計測する。器壁は全体的にやや薄く、底部に向かうにつれて器壁が厚い。高台脇から体部が直線的に開きながら立ち上がり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反し、口縁端部が面取りされる。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に成形されている。高台は裾張りの形に作り出され、底部外面には回転系切痕及び板目状圧痕が残る。

六器（第33図295・296）

六器は3個体出土している。受皿と小杯を別々に成形した後、小杯を受皿内部に2個（現存1個）設置し

たものである。受皿は口径 11.2～11.5cm、器高 3.3～3.8cm、底径 4.8～5.1cmを測り、高台脇から丸みをもって立ち上がる。口縁部はほぼ外反しないが、端部は回転ナデ調整される。小杯部分は、口径 3.9cm、器高 1.4cm、底径 2.9cm前後を計測する。底部から口縁かけて直線的に開き、体部内面には指ナデ調整されるものも確認されている。

(5) 窯道具

窯道具蓋 (第 34 図 299～313)

窯道具の蓋は、焼成時に碗の重ね焼きの最上段に用いられ、製品への降灰(自然釉)を防ぐものである。胎土は緻密で黄灰色から灰白色を呈している。404 個体が出土しており、器形から A～D に分類する。蓋 A (299～305、308) は有高台の碗を転用したもので、窯道具蓋の 9 割強を占めている。口径 11.8～15.8cm、器高 5.0～6.7cm、天井径 4.9～6.6cmと量量地に幅がみられるが、平均的な量量は口径 14.3cm、器高 5.7cm、天井径 5.6cm前後である。小振りな碗を転用したもの(308)も確認されている。蓋 B (306、307) は無高台の碗を蓋に転用したもので、18 個体が出土している。蓋 A・B は碗同様に天井部から口縁部にかけて直線的に開くもの、丸みをもちながら開くものがみられる。器壁は全体的にやや厚いものが多い。ほとんどのものが大きく歪んでおり、天井部から体部外面にかけて降灰している。

蓋 C (309～312) は皿形の蓋で、4 個体出している。このうち 309 は平高台皿を転用している。口径 6.2～10.4cm、器高 1.6～2.8cm、天井径 3.6～5.4cmを計測する。天井部から底部に向かって直線的に開くもの(309、310)、丸みを帯びながら開くもの(311、312)がみられる。器壁は製品と比べ全体的に厚く、体部内外面にはロクロ目が残る。特に 310～312 は、内面の調整が製品の皿よりも雑なことから窯道具専用の可能性がある。いずれも大きく歪んでおり、天井部から体部外面にかけて降灰している。

蓋 D (313) は上記の窯道具蓋とは異なり、平底の大皿を人為的に大きく歪ませ左右非対称に成形されている。天井部から体部外面にかけて自然釉がみられることから、焼成時に碗の重ね焼きの最上段に用いられた蓋と考えられる。内面はコテで調整され、重ね焼きに伴う粗粒殻が残るなど窯道具専用として作られたものではない。天井部外面には茎状の植物痕が著しく残る。

焼台 (第 34 図 314・315)

焼台は窯体の傾斜に合わせて、製品を水平に置くための支台である。窯内から 142 個体、物原から 861 個体が出土している。314 は長さ 13.5cm、幅 13.0cm、高さ 7.1cm、315 は長さ 14.1cm、幅 11.2cm、高さ 7.5cmを測る。傾斜角は共に 20～25°である。おおよそ焼台はこのサイズが主体となる。胎土は砂礫を多く含む粗目の粘土を用いて、赤茶褐色を呈する。焼台上面には、碗を重ね焼きした際にできた高台の圧痕が認められる。また、焼台側面には成形時の指圧痕による凹みが見られる。焼台上面を水平にした際の焼台底面は、焼成室床面の傾斜角とおおむね一致する。

6-2. 須恵器

混入品と考えられる須恵器が物原からごく少量出している。器種は壺類と甗である。

壺類 (第 34 図 297)

胴部破片のみの出土で器形の詳細については不明である。胴部は下方から丸みをもって立ち上がり、やや内傾しながら上方に至る。胴部上方に張りをもち、粘土組輪積み技法により成形される。胴部外面の上方には沈線で区画された 2 段の刻線文が巡り、下方には斜位のタタキ目が残る。内面の当て具痕は丁寧にナデ消しされている。

甌 (第 34 図 298)

底部から胴部の小破片が 1 点出土している。残存長 7.9cm、底径 21.0cmを測り、ヘラ状工具により 2ヶ所楕円形の円孔が成形されている。内外面にはロクロ目が残り、胎土は礫をほとんど含まない緻密なもので、全体的に灰色から灰白色を呈する。

6-3. 土師器・灰釉陶器

掲載をしていないが土師器の小破片と灰釉陶器が出土している。土師器は極めて小さい破片が 1 点確認されたのみで、器種も不明である。灰釉陶器は碗類・皿類・鉢類・瓶類と思われる小破片が数点確認されたが、近接する灰釉陶器窯の大針 6 号窯ないし 7 号窯の遺物が混入したものと考えられる。

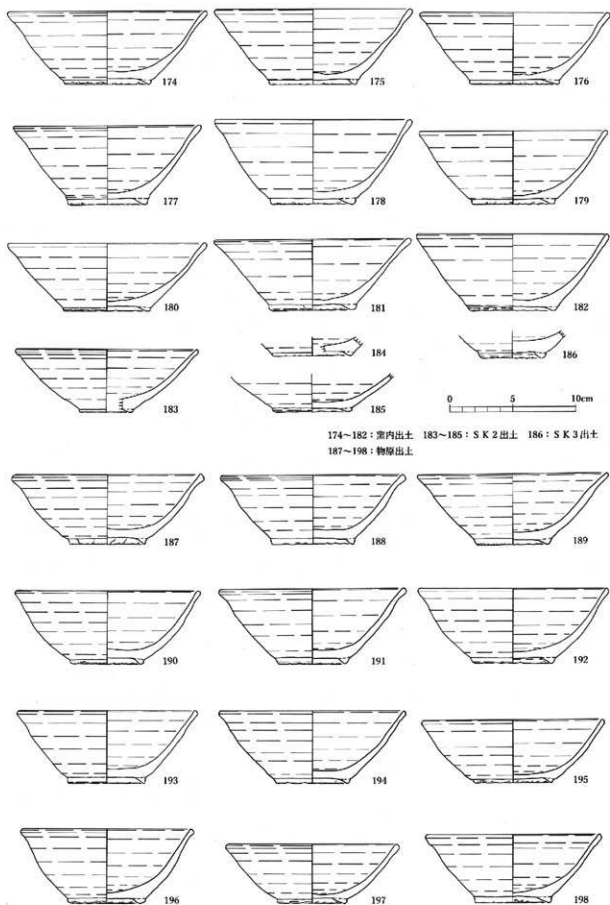
7. 大針 8 号窯まとめ

大針 8 号窯は全長 13.79 m、床面最大幅 2.7 mを計測するなど、当地方の山茶碗窯では比較的大きい部類である。特徴としては、焼成室の中央付近で床面最大幅を持つ胴張りの平面形であること、分焰柱前方から始まる床面の傾斜が焼成室から煙道部にかけてほぼ一定であることなどがある。このような本窯の規模と特徴は、東濃山山茶碗編年の窯洞 1 号窯式期の窯体構造に当てはめられる。窯内からは多量の遺物が出土したが、焼成室床面上では生焼けで積み重なった状態のものが多く、焼成途中で天井が崩落し窯体が廃絶した状況が窺える。焼成室内に直径 14cm程度の焼台を敷き詰めた場合、推定で約 390 個の焼台が並ぶ。

付帯する遺構として S K 2 と S K 3、S D 1 を伴う前底部が検出されている。S K 2 は窯体焚口前右脇に作られ、遺物はほとんど出土していない。黒色灰を主体とする覆土となっており、焚口付近に溜まった黒色灰を排出したものであろう。ただし遺構は浅く、複数回の排出に対応したものかは不明である。S K 3 は 3 × 2 m 程度の比較的平坦な底面を持つ大型土坑である。まとまった遺物の投棄もないことから作業場あるいは粘土置き場等の可能性が考えられる。しかし、底面上にロクロピットほか作業場の痕跡や粘土置き場を使用した痕跡は確認されていない。前底部平坦面には窯体側に溝が掘られるなど雨水対策がされており、山茶碗生産に伴う作業を行うための場と推測されるが、ロクロピット等の遺構は確認されていない。

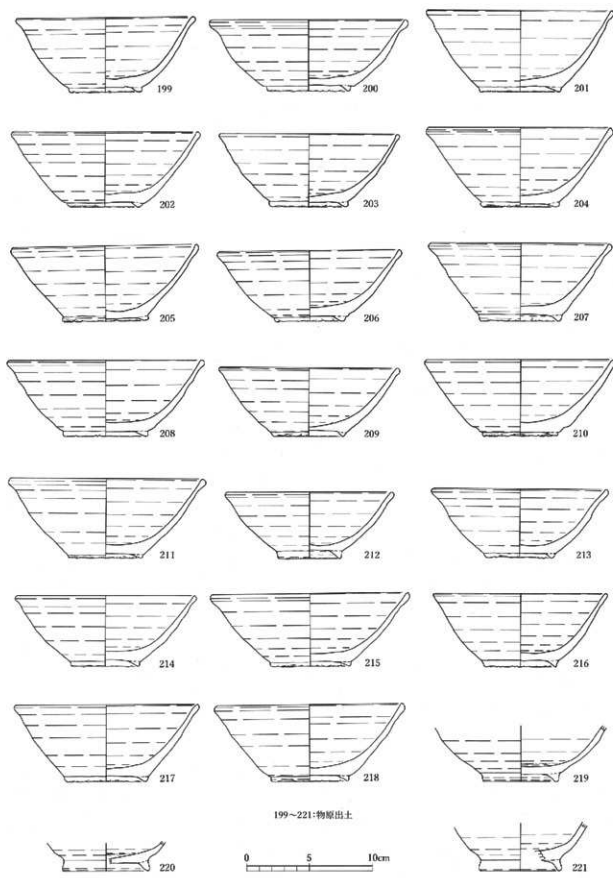
出土遺物の主体となる碗は、法量の平均値が口径 14.7cm、器高 5.7cm、高台径 5.8cmである。また、胴部より肉厚な底部、底部と胴部の境に段差のない平滑な内面、底部内面の静止指ナデ調整はごく弱いものと未調整のものがあるといった特徴がある。小型の碗は例外的に存在する程度だが、分化の兆しがみられる。小皿は法量の平均値が口径 8.3cm、器高 2.0cm、底径 3.8cmである。また、胴部より肉厚な底部、底部と胴部の境に段差のない平滑な内面、大半の小皿で底部内面の静止指ナデ調整はごく弱いといった特徴がある。このような碗皿類の特徴は窯洞 1 号窯式に当て嵌まるものであり、本窯の山茶碗は窯洞 1 号窯式に比定できる。さらに碗の法量値分布から、小型といえる範囲に分布域が及んでいる状況は、次段階の白土原 1 号窯式の法量値分布域に近づいており、本窯の山茶碗は窯洞 1 号窯式でも後半代と考えられる。また、小皿主体の皿類の中で大皿 (287) の出土は、市内山茶碗窯において珍しい出土例である。市内では他に北小木大上 3 号窯で確認されたのみであり、本窯出土の大皿は、器形・法量値を含め北小木大上 3 号窯の大皿と近似している。北小木大上 3 号窯も窯洞 1 号窯式であることは、市内における山茶碗の大皿生産はごく限られた期間に少量生産されたものと推測する。

碗と小皿の底部内面静止指ナデ調整の有無を精査すると、窯内と物原で差が明確に現れる。調整率を窯内:物原で示すと、碗は 69%:19%、小皿は 92%:62%となる。先行する物原遺物の調整が低いことは明白であり、

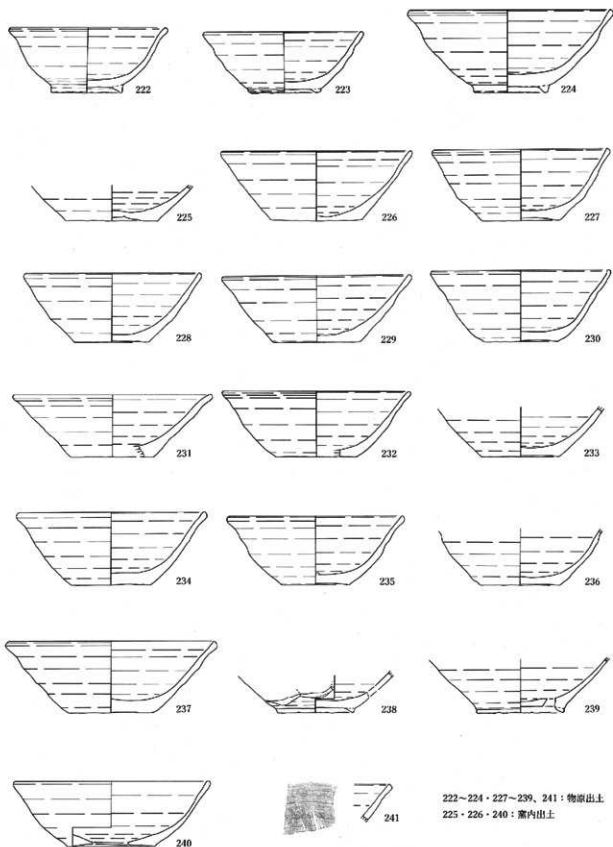


174~182 : 案内出土 183~185 : S K 2 出土 186 : S K 3 出土
 187~198 : 物原出土

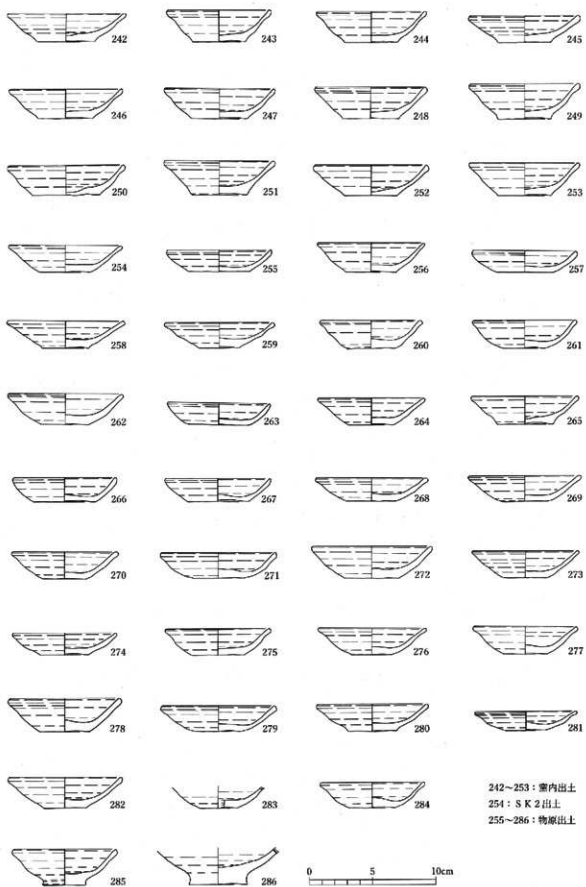
第29図 大針8号窯 出土遺物実測図(1)



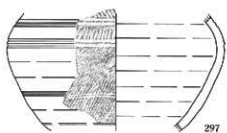
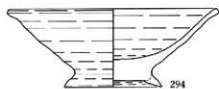
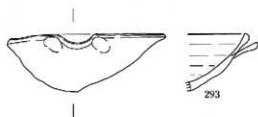
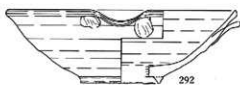
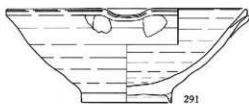
第30図 大針8号窯 出土遺物実測図(2)



第31図 大針8号窯 出土遺物実測図(3)



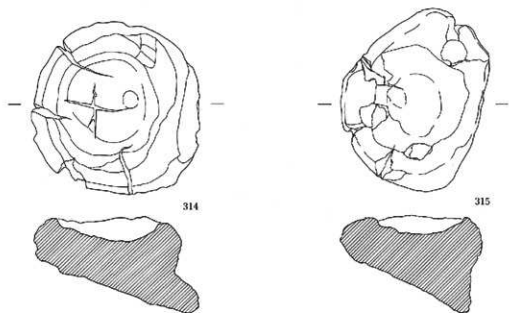
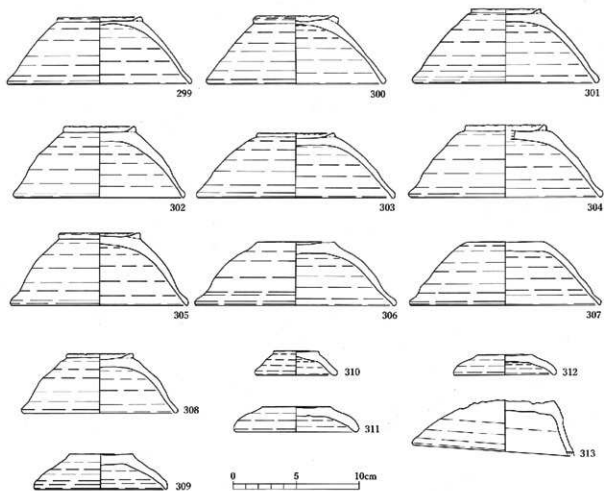
第32図 大針8号窯 出土遺物実測図(4)



287~298 : 物原出土



第33図 大針8号窯 出土遺物実測図(5)



299・300・314・315：窯内出土 301～313：物原出土

第34図 大針8号窯 出土遺物実測図(6)

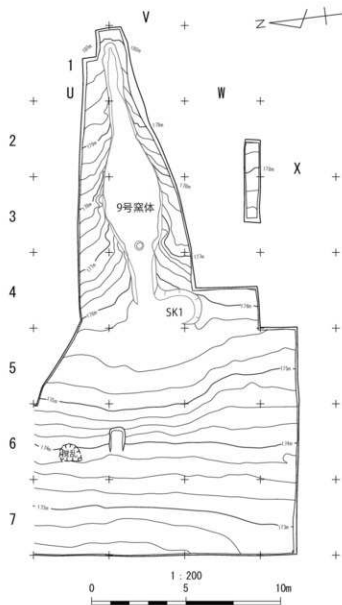
製品作成の時期差に調整率が反映している。

第3節 大針9号窯

大針9号窯は8号窯の南に平行する形で隣接し、西向き斜面の標高175～180m辺りに構築された山茶碗窯である。グリッド設定は8号窯と同一のものである。調査面積は約240㎡で、窯体と付随する遺構、物原を確認している。出土遺物はコンテナ整理箱40箱分である。

1. 窯体 (第36・37図)

本窯は、8号窯と同様、分焰柱を伴う単室の地下式密窯である。基盤をなす土岐砂礫層を掘削して構築され、焚口・燃焼室・分焰柱・焼成室・煙道を検出した。天井は全て窯内に崩落しており、焼成室と煙道との



第35図 大針9号窯 グリッドおよび遺構配置図 S=1/200

境にダンパーの一部と考えられる痕跡が確認された。窯体の主軸はN-89°-Eを示し西に開口している。主軸全長14.09m、焼成室床面最大幅3.2m、焼成室床面の傾斜角は25～30°、焚口と先端の煙出しとの比高差は約4.4mである。検出時、窯体覆土中には崩落した天井や側壁上半部が破片となって堆積していた。なお、燃焼室から焼成室にかけて床面直上から多量の焼成不良の山茶碗と窯道具が出土している。

焚口・燃焼室

焚口の幅は床面部分において約90cmを計測し、この焚口部分から被熱による地山の変化が両側壁で約1m地点にみられる。また、焚口の右側壁部分から南西方向に向かって掘られた土坑状遺構（SK1）が確認されている。

燃焼室は焚口から分焰柱までの範囲で約2.8mを測る。燃焼室の両側壁は分焰柱に向かって徐々に幅を広げる平面形となり、床面幅は分焰柱の手前で約1.6mを計測する。約5°の僅かな傾斜をもって分焰柱に向かい下降し、分焰柱の手前28cmの地点から約20°で上がり始める。燃焼室の側壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、分焰柱の付近で約59cmの高さまで残存する。

燃焼室床面直上の貼り床は全て剥落しており、被熱硬化した地山が露出していた。燃焼室の側壁は床面と同様にほとんどの範囲で貼り壁が剥落し、被熱硬化した地山がみられる。

分焰柱

分焰柱はほとんどが削平されており、僅かにその基部が残存している。基底部の平面形は長径49cm、短径46cmと円形プランを呈する。また、残存高は約30cmまで計測可能である。断ち割り調査の結果から、分焰柱は地山である砂礫土が被熱により赤色に変化する。その上位には浅黄橙褐色土が約10cmみられ、硬く焼き締まった部分のみ剥離して被熱部分が残っている。

焼成室

焼成室は天井部を除き良好に残存し、残存部分の全長は窯体主軸上で約5.4mを測る。平面形は燃焼室から大きく開き始め、焼成室中央部やや手前で最大幅3.2mを迎える。そこから煙道部に向かって徐々に幅を狭め末端部で約1.2mとなる。床面は分焰柱の端から約75cm上方の地点まで25°で、そこから焼成室末端部までは25～30°で立ち上がる。断ち割り調査の結果、本窯の床面は1枚の貼り土（貼り床）がなされている。床面上には焼台270個が残存しており、ほぼ元位置を保っていると思われる。また、床から剝がれた焼台や製品など窯内遺物の多くは、焼成室手前より分焰柱に引っかかるような状態で出土している。確認されただけでも窯内覆土から出土した焼台は222個を数える。両側壁は焼成室中央部まではおおむね傾斜して立ち上がるが、上部ではやや垂直気味に立ち上がる。一部貼り壁が剥落し、地山が露出した状態にある。貼り壁が残存する部分は最も高いところで約58cmを測る。

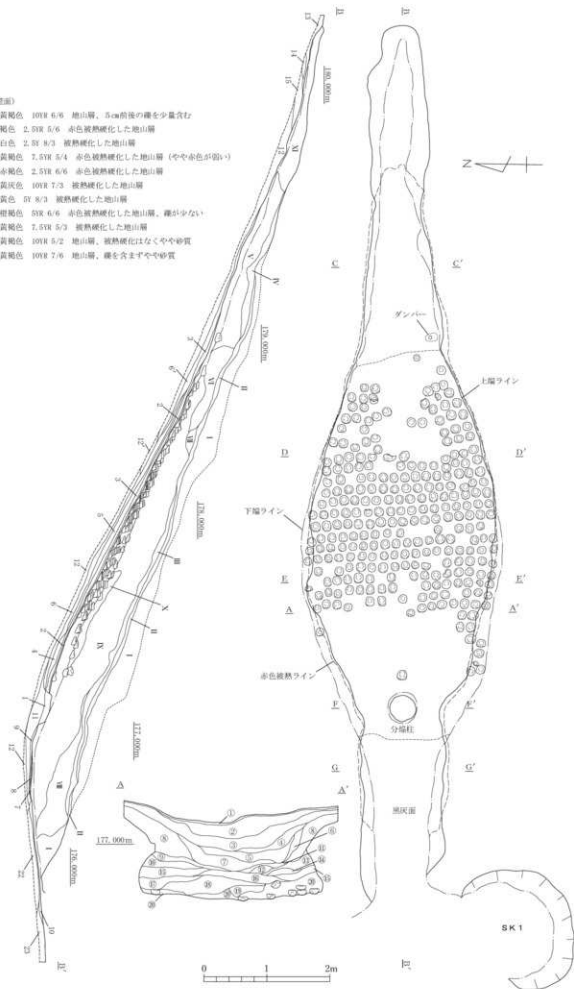
焼成室の覆土は、下から順に天井・側壁等の落下破片（第36図⑨～⑫）、黄橙褐色土層（同⑧、流入土）、灰褐色土層（同⑦、流入土）が堆積している。覆土最下層に上方からの流入土（自然流入土）がみられないことから、本窯は天井が崩落したために廃棄された可能性が高いものと推測される。

ダンパー

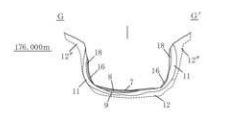
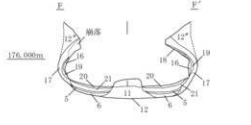
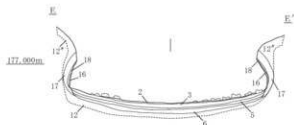
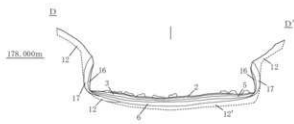
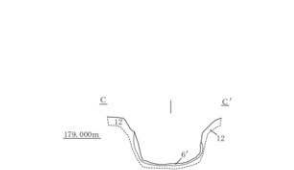
焼成室との境に近い煙道部右壁付近にダンパーの一部と考えられる焼土塊を確認している。歪な楕円形を呈し、おおよそ幅20cm、奥行14cm、高さ8cmの大きさを残す。明橙褐色の貼り土（粘土）で赤色被熱硬化している。上面には直径5cm程度の円形の窪みが確認され、木芯の痕跡の可能性はある。ただし、ダンパー部調査中に炭化木材など木芯に関わるものは出土していない。検出したダンパーが、左右の壁を繋ぐように設置されたものの一部か、独立して設置されたものかは不明である。

(断体断面)

- I 明黄褐色 10YR 6/6 地山層、5cm前後の礫を少量含む
- II 赤褐色 2.5YR 5/6 赤色被熱硬化した地山層
- III 黄白色 2.0Y 8/3 被熱硬化した地山層
- IV 赤黄褐色 7.5YR 5/4 赤色被熱硬化した地山層 (やや赤色が強い)
- V 明赤褐色 2.5YR 6/6 赤色被熱硬化した地山層
- VI 浅黄灰色 10YR 7/3 被熱硬化した地山層
- VII 白灰色 10Y 8/3 被熱硬化した地山層
- VIII 赤黄褐色 5YR 6/6 赤色被熱硬化した地山層、礫が少ない
- IX 暗黄褐色 7.5YR 5/3 被熱硬化した地山層
- X 灰黄褐色 10YR 5/2 地山層、被熱硬化はなくやや砂質
- XI 明黄褐色 10YR 7/6 地山層、礫を含まずやや砂質



第36図 大針9号窯 断体実測図(1)



(躯体隆上断面)

- ① 短筒色土層 7.5W 3/3 腐葉土
- ② 灰褐色土層 2.5V 5/2 礫を含まない、やや硬化した粘質土でブロック状に割れる。粗いが締まりあり
- ③ 浅黄褐色土層 2.5V 7/3 3cm前後の礫を少量含む、均質で締まりあり、②層と同様にやや砂質で硬化している
- ④ 灰褐色土層 2.5V 7/5 礫をほぼ含まない、均質で締まりあり、②-③層のように粘質は全く硬化しない
- ⑤ 灰褐色土層 2.5V 6/3 3cm前後の礫をごく少量含む、本底粒を少量含む、土層に比べやや灰褐色、均質で締まりあり
- ⑥ 明黄褐色土層 2.5V 7/6 礫を含まず細粒、均質で締まりあり
- ⑦ 灰褐色土層 2.5V 5/1 3cm前後の礫をごく少量含む、本底粒を少量含む、全体的に⑤層よりも灰褐色
- ⑧ 黄褐色土層 10V 6/6 2~3cm前後の礫を多く含む、地山上の西塔層（流れ込みか）、固く締まりあり
- ⑨ 短赤褐色土層 7.5W 5/3 細い地上ブロックを粗く含む、締まりは弱い、天井裏か
- ⑩ 短黄褐色土層 10V 6/3 地上粒・明るい地上ブロックを多く含む、小礫を多く含む、粗く締まりは弱い
- ⑪ 短灰褐色土層 10V 4/1 全体的に灰褐色、本底・本底粒を多く含む礫を含まない、やや粗めで締まりは弱い
- ⑫ 赤黄褐色土層 8V7/3 礫を含まない、地土塊・本底粒を粗く含む、柔らかく締まりは欠く
- ⑬ 灰褐色土層 2.5V 6/5 1cm以下の礫を少量含む、やや粗めで締まりは弱い、窓簾に接する面は地土粒・本底粒が少量混ざる
- ⑭ 短黄褐色土層 7.5W 7/7 地土・地土塊が主体、ガサガサで粗く締まりなし
- ⑮ 短黄褐色土層 2.5V 6/4 礫をほぼ含まない、地土粒・本底粒を少量含む、やや砂質で柔らかく締まりは弱い
- ⑯ 短灰黄褐色土層 2.5V 5/2 礫をほぼ含まない、地土粒・本底粒多く含む、やや粗めの砂質で締まりは弱い、全体的に灰褐色
- ⑰ 短黄褐色土層 2.5V 7/2 1cm以下の礫を少量含む、地土塊・塊方を少量含む、粗砂混じりで締まりは弱い
- ⑱ 灰黄褐色土層 10V 6/2 礫をほぼ含まない、地土が主体で非常に粗い、締まりは弱い
- ⑲ 浅黄褐色土層 2.5V 7/4 礫を含まない、やや中粒で均質、締まりは弱い
- ⑳ 短黄褐色土層 2.5V 6/2 1cm以下の礫を多く含む、地土塊・地土粒を多く含む、非常に粗く締まりなし

(躯体割ち削り土層断面)

- 1 浅黄褐色土層 10V 7/4 2cm前後の礫を含む、弱く赤色被熱硬化した地山
- 2 淡褐色土層 5V 7/5 陥り床、赤色被熱硬化、1~5mm大の礫を含む
- 3 黄褐色土層 2.5V 7/4 弱い被熱硬化した地山層、1cm以下の礫を含む
- 4 明褐色土層 5V 6/6 ややまだらに赤色被熱硬化した地山層、5mm以下の礫を少量含む
- 5 黒灰褐色土層 7.5W 3/1 地山上の腐植層、被熱硬化、1cm以下の礫を少量含む、濃淡に多少のムラがみられるが均質
- 6 短赤褐色土層 2.5W 4/2 赤色被熱硬化した地山層、2cm前後の礫を少量含む、全体的に短く5層からの変化は自然
- 6' 赤褐色土層 5V 6/6 赤色被熱硬化した地山砂礫土層、6層より明るい、11層に対応
- 7 浅黄褐色土層 7.5W 7/4 弱く赤色被熱硬化した地山層
- 8 灰黄褐色土層 2.5V 6/2 弱く被熱硬化した地山層
- 9 黄褐色土層 2.5V 7/5 弱く被熱硬化した地山層、やや砂質
- 10 黒褐色土層 X3 本底粒・灰化土・地上土の混合土層、締まりなし
- 11 赤褐色土層 2.5V 5/6 赤色被熱硬化した地山層
- 12 黄褐色砂礫土層 10V 6/4 1~3cm大の礫が主体の地山砂礫土層、やや締まりを欠く
- 12' 黄褐色砂礫土層 12層の地山砂礫土層のうち礫が少なく砂質土が主体、柔らかいが締まりあり
- 12'' 黄褐色砂礫土層 12層の地山砂質土のうち礫の混有がやや少ない、固く締まる
- 13 白灰色粘土層 2.5V 8/1 地山粘土層、礫を含まずソブ土を少量含む、締まりあり
- 14 明褐色色砂質土層 7.5W 6/8 地山層、ソブ土、礫を含まない、締まりあり
- 15 短黄褐色色砂土層 10V 6/8 地山層、2cm前後の礫を多く含む、締まりあり
- 16 に近い黄褐色土層 2.5V 6/3 被熱硬化した地山砂礫土層
- 17 赤褐色土層 2.5V 5/6 赤色被熱硬化した地山砂礫土層、6'層・11層と同じ層か
- 18 黄褐色土層 7.5W 6/7 被熱硬化した地山砂礫土層、被熱により僅かに明るく黄色
- 19 黄褐色土層 2.5V 6/8 被熱硬化した地山砂礫土層、18層に対応するものだが18層より暗い
- 20 赤黄褐色土層 2.5V 6/2 陥り床、分層粒層のみ確認される、被熱硬化、礫を含まない
- 21 浅赤黄褐色土層 8V 6/4 弱く赤色被熱硬化した地山砂礫土層
- 22 浅黄褐色土層 10V 7/4 浅黄粘質土 (5V7/3) が4ブロック状に広がる地山、10層との境付近は部分的に僅かに被熱の影響を受ける、締まりあり
- 23 黄褐色土層 10V 6/5 地山層、礫をほぼ含まない、均質で安定し締まりあり

第37図 大針9号窯 窯体実測図(2)

煙道部

煙道部は良好に残存しており、傾斜が変化する部分から先端の煙出し部分までが煙道部に相当する。全長は約 5.4 m、最大幅約 1.3 m、先端部で約 50cm を測る。焼成室と煙道部との境は傾斜角を変化させている。床面傾斜は 20° で約 4.4 m 続いたあと、傾斜角は 10° となり末端部まで立ち上がる。床面は地山を掘り抜いたままで、貼り床は確認されず表面が被熱硬化している。両側壁はやや垂直に立ち上がり、内傾して立ち上がる焼成室とは対照的である。両側壁は床面と同様に地山を掘り抜いたままで、被熱硬化しているのが確認できる。

2. 遺構

地山を掘り込んだ、あるいは掘削した状態の遺構について一括して SK とした。

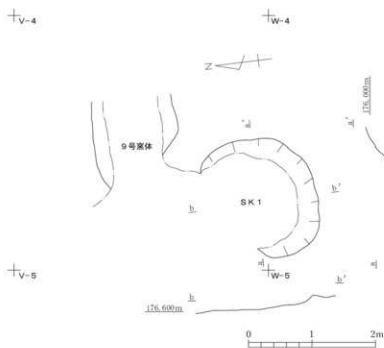
SK 1 (第 38 図)

SK 1 は窯体焚口前方右側に掘削された土坑状遺構である。東西方向の幅は約 1.9 m、南北方向の幅は約 1.8 m、深さは最大で 20cm 程度である。窯体前方となる北側に開口しており、底面は平坦に近いが開口部へ緩く下る形状で最終的に焚口前とほぼ同じになる。平面プランはやや東西方向に長い不整形な楕円形を呈する。図示していないが、覆土は黒色灰の堆積を調査時に確認しており、焚口に溜まった黒色灰の排出場と推測される。覆土内からごく少量の山茶碗が出土している。

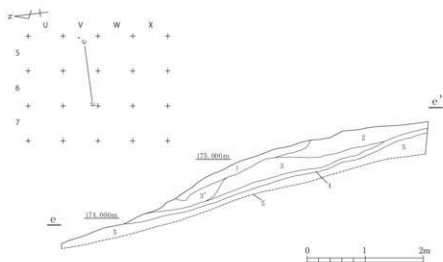
3. 物原 (第 39・40 図)

物原は焼成不良品や欠損品、焼台、灰や焼土など窯の操作に伴って生じた廃棄物を投棄した場所で、窯体焚口前方にある前底部を基点に西側の斜面下方に広がる。その範囲は東西約 12 m、南北約 14 m に及び、一部近年の人為的な攪乱がみられる。

物原の遺物包含層は、おおむね掘り抜き排土の外縁を覆うように堆積している。約 30cm と最も厚い堆積



第 38 図 大針 9 号窯 SK 1 実測図



(掘り抜き排土断面)

- 1 黄褐色砂礫土層 2.0/6.4 掘り抜き排土、1～5cm大の礫を多く含む、粘土層で締まりは弱い
- 2 灰褐色土層 1.0/1.6/4 掘り抜き排土、1～2cm大の礫を少量含む、均質で締まりあり、5層と比べやや色がくすむ
- 3 黄褐色土層 1.0/1.5/6 掘り抜き排土、1～2cm大の礫を少量含む、今や粘土層だが締まりあり
- 3' 灰褐色砂礫土層 1.0/1.6/6 掘り抜き排土、2～3cm大の礫を多く含む、粘土層で締まりは弱い
- 4 灰褐色土層 2.0/1.5/1 旧表土層、礫含まず、今や砂質で表から3'が締まりあり、有礫分の影響で円礫多い
- 5 5.0/1.5/1 黄褐色土層 2.0/1.5/1 地山層、礫をほぼ含まない、均質で安定し締まりあり

第40図 大針9号窯 掘り抜き排土断面実測図

をみせるのは、窯体主軸から南西方向にあたるW-6区である。ここでは遺物や焼台が多く集積した暗灰褐色土層（第39図25）と赤黄褐色土層（同26）が堆積する。また、窯体主軸延長線上であるV-6・7区は遺物や焼台、焼土塊破片を多量に含む黄褐色土層（同22）と焼土塊破片を含む暗褐色土層（同21）の堆積がみられる。さらに、掘り抜き排土の西側縁辺部であるW-6・7区では、遺物や焼台を多く含む全体的に灰黒い暗灰褐色土層（同15）、その下層には焼土破片等が主体の赤黄褐色土層（同16）が堆積する。土層の堆積は斜面下方に向かうにつれ薄く単純なものとなり、遺物の出土量も確実に少なくなっている。遺物の出土はV-6区とW-5・6区が主体となり、窯体主軸延長の南側に包含層が堆積している状況である。8号窯物原と接するU区は遺物の出土量も少なく、9号窯物原はV区寄りのU区内で取まっていると考えられる。

窯体の掘り抜き排土は、黄褐色砂礫土および黄褐色土（第39図31、第40図1～3）が主体で、旧表土（第39図32、第40図4）の上に堆積している。掘り抜き排土の規模はおおよそ東西5.3m、南北7.2mの範囲にあり、最も厚いところで48cmを測る。

4. 出土遺物（第41～46図）

大針9号窯は、窯内、土坑、物原等から合計2184個体の遺物が出土している（第3表）。このうち焼台は実測用の数点を除き現地で個数を確認したのちに廃棄している。焼台を除く山茶碗類の個体数は1567点であり、こちらを山茶碗出土比率の母数として扱う。碗・小皿の生産を主体とし、両者で出土個体数の約91%を占めている。胎土は緻密で黄灰色から灰白色を呈するものが多い。また、8号窯同様に若干量の灰釉陶器が出土している。

第3表 大針9号窯グリッド別出土遺物個体数表

分類	器種名	室内	SK1	U			V					W			X			W・X	表探	計		
				5	6	7	2	3	4	5	6	7	4	5	6	7	5				6	7
山茶碗 碗類	碗	157	6	6	27	6	1	1	22	57	223	49	1	184	384	18	9	7	10	13	18	1199
	無高台碗	11										1	1		3				2			15
	穿孔碗	1										1		6	7							18
山茶碗 皿類	小皿	52	1	1	1	1					2	51	8	3	24	36	2	2	3			187
	平高台皿	2											1									3
	大皿	2												3								5
山茶碗 鉢類	鉢	2												1			1					4
	無高台鉢										1											1
	片口鉢	3													1							4
山茶碗 その他	仏供											1										1
	小杯	2												1								3
	小壺	1																				1
山茶碗 窯道具類	壺													1								1
	窯道具蓋A	17						1	4	16			3	30	36	2	1				2	112
	窯道具蓋B									1				2	7	1			1		1	13
	焼台	492								98	6			1	14							611
	降灰壁									1												1
灰釉陶器	その他窯道具	1																				1
	碗	2																		1		3
	瓶・壺類	1																				1
	計	746	7	7	28	7	1	1	23	64	392	66	7	252	489	23	13	10	13	14	21	2184

4-1. 山茶碗

(1) 碗類

碗 (第42図316~338、第43図339~359)

碗は最も多く生産される器種で、出土個体数は山茶碗の約79%を占めている。口径13.0~16.2cm、器高4.2~6.3cm、高台径4.8~6.9cmと法量値に幅がみられる。平均的な法量は口径14.9cm、器高5.5cm、高台径5.7cm前後である。高台は付高台でやや小さく低く、基部の幅も広い断面三角形あるいは断面三角形が潰れた方形を呈する。体部が高台脇から直線的に開きながら立ち上がり口縁部に至るもの(317、319、320、322~324、330~334、340、341、343、344、348~350、352、353、357)、体部が丸みをもって立ち上がり口縁部に至るもの(316、318、321、325~328、336、337、339、342、345~347、351、354~356、359)がある。いずれも口縁部は外反し、口縁端部が面取りされるものもある。器壁は全体的に薄くなり、底部に向かうにつれて厚くなる。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に成形される。底部内面中央にはロクロ目によって生じた小突起をそのまま残すものもみられるが、短い静止指ナデ調整で小突起を消したものも一部で確認することができる。高台端部には髹殺痕が多く確認されているが、一部の碗には髹殺痕がみられないもの(359)もある。また、底部外面に髹殺痕とは別に植物痕が確認されている。原則的に底部外面には回転糸切痕が残るのみであるが、植物の葉を模したような刻線模様を確認されたもの(358)が1点出土している。碗は重ね焼きされており、内面に上に重ねられた碗の高台が熔着したものや、接着痕がみられる。また、多く碗で口縁部から体部内外面にかけて降灰(自然釉)を受けていることを確認することができる。

無高台碗 (第43図360・361、第44図362~367)

無高台碗は18個体出土している。口径14.8~15.2cm、器高4.6~5.0cm、底径6.0~6.4cmと法量地に幅がみられる。平均的な法量は口径14.9cm、器高4.8cm、底径6.1cm前後である。碗と同様に体部が直線的に開きながら立ち上がり口縁部に至るもの(360、362)、体部は丸みをもって立ち上がり口縁部に至るもの

の(363, 364)がある。いずれも口縁部は外反し、口縁端部が面取りされるものもある。器壁は全体的に薄くなり、底部に向かうにつれて厚くなる。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に成形される。底部内面中央にはロクロ目によって生じた小突起をそのまま残すものがみられる。底部外面には回転糸切痕が残り、そのうち板目状圧痕が認められるものも確認できる。

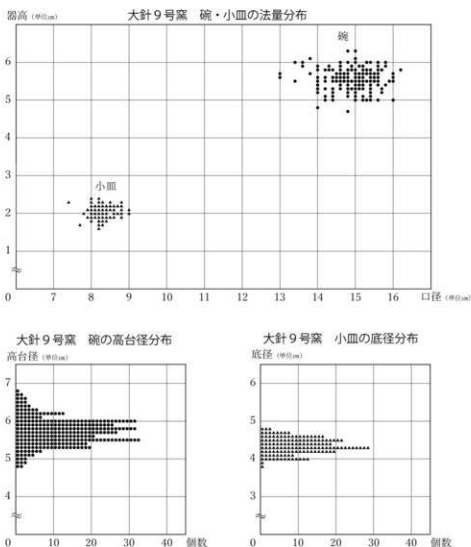
穿孔碗(第44図 368～371)

体部あるいは底部に穿孔のある資料が15個体出土している。なお、一部意図的な穿孔ではなく自然に割れたことによるもの可能性も否定できない。穿孔の大きさには個体差があり、有高台の碗(368～370)と無高台の碗(371)に穿孔が確認される。なお、370は底部外面中央からへら状工具により直径1.8cm前後の孔をあけているものと考えられる。いずれも、体部は高台脇から直線のあるいは丸みをもって立ち上がるが、口縁部は欠損しているため詳細は不明である。胎土は緻密で黄灰色から灰白色を呈している。

(2) 皿類

小皿(第44図 372～407、第45図 408・409)

小皿は碗の次に出土量の多い器種で、山茶碗の約12%を占めている。すべて無高台の小皿で、口径7.4～9.0cm、器高1.6～2.4cm、底径3.8～4.8cmを測る。法量値に幅がみられるが、平均値は口径8.3cm、器高



第41図 大針9号窯 出土遺物法量分布図

2.1cm、底径4.4cm前後である。底部から口縁に向かって直線的に開くもの(373、377～380、382、383、386～389、391～393、396、397、399～406、409)、丸みを帯びながら立ち上がるもの(372、374～376、381、384、385、390、394、395、398、407、408)がみられる。口縁部はほとんど外反せず、口縁端部は丸く収められるものが多い。器壁は全体的にやや厚く、扁平でやや浅い形状である。底部外面には回転系切痕が残る、そのうち板目状圧痕が認められるものも確認できる。また、底部内面中央のロクロ目によって生じた小突起を静止指ナデ調整により消しているものもある。

平高台皿(第45図410～412)

平高台皿は3個体出土している。小皿と同様に無高台であるが、底部と体部の境にくびれがみられる。口径8.6～9.0cm、器高2.7～3.4cm、底径4.2～4.6cmを測る。底部から口縁にかけて直線的に開くもの(411、412)と、僅かに丸みをもって立ち上がるもの(410)がみられる。口縁部は外反せず、端部は丸く収められる。器壁は全体的にやや厚く、底部に向かうにつれ器壁が厚くなる。底部外面には回転系切痕が残る。

大皿(第45図413～415)

大皿は3個体出土している。口径はおおよそ12cm前後のもの(413、414)と15cm前後のもの(415)となる。底部から口縁にかけて直線的に開くもの(414、415)、丸みをもって立ち上がるもの(413)がみられる。口縁部は外反せず端部は肥厚するが、丸く収められる。外面はロクロ目を残すが、内面は平滑に成形される。器壁は全体的にやや厚く、底部は欠損しているため詳細については不明である。大きさから推測すると、413と414は六器の受皿の可能性がある。

(3) 鉢類

鉢(第45図416)

鉢は口径15.9cm、器高6.0cm、高台径5.5cmを計測する。体部は、高台脇から丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反し端部が面取りされる。器壁は全体的にやや薄く、底部に向かうにつれ器壁がやや厚くなる。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に仕上げられる。なお、口縁部が一部欠損しているため、片口が施されていたかは不明である。また、体部外面に降灰を受けていることを確認できる。

無高台鉢(第45図417)

高台のない平底の鉢が1個体確認され、底径6.0cmを測る。体部は、底部からやや直線的に開きながら立ち上がる。口縁部は欠損しているため詳細については不明である。器壁は全体的にやや薄く底部に向かうにつれ厚くなる。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に成形される。底部外面は回転系切痕が残る。なお、口縁部が欠損しているため、片口が施されていたかは不明である。

片口鉢(第45図418・419)

片口鉢は4個体出土している。口径15.7～17.0cm、器高6.0～7.4cm、高台径5.5～6.6cmを計測する。体部は、高台脇からやや丸みをもって立ち上がる。口縁部はほとんど外反せず、端部が面取りされる。器壁は全体的にやや厚く、底部に向かうにつれて器壁が厚い。体部外面はロクロ目による凹凸がみられるが、体部内面は平滑に成形される。口縁端部には1ヶ所内外面からの指圧により片口が作り出されている。また、体部内面に降灰(自然釉)を受けていることを確認することができる。

(4) その他

仏供(第45図420)

体部は、高台脇から直線的に開きながら立ち上がる。口縁部は欠損しているため詳細については不明である。器壁は全体的にやや薄く、底部に向かうにつれて器壁が厚い。体部外面はロクロ目による凹凸がみられ

るが、体部内面は平滑に成形される。底部外面には回転糸切痕及び板目状圧痕が残る。胎土は緻密で黄灰色を呈する。

小杯（第45図421）

体部は直線的に開きながら口縁部に至る。口縁部は外反せず、端部はやや内傾気味で丸く取られる。器壁は全体的にやや薄く、底部は欠損しているため詳細については不明である。胎土は緻密で灰白色を呈し、体部内面には降灰（自然釉）がみられる。

小壺（第45図422）

小壺は口径5.6cm、器高5.4cm、底径5.7cmを測る。胴部は、底部からやや直線的に立ち上がりながら肩部に至り、肩部からは極端に内傾させる。直線的な短い頸部を成形し、端部は丸く取られる。内外面には口クロ目による凹凸がみられ、底部外面には回転糸切痕が残る。胎土は緻密で黄灰色を呈している。

（5）窯道具

窯道具蓋（第45図423～430、第46図431～433）

窯道具の蓋は、焼成時に碗の重ね焼きの最上段に用いられ、製品への降灰（自然釉）を防ぐものである。125個体が出土しており、器形により蓋Aと蓋Bに分類する。蓋の約9割は有高台の碗を転用した蓋A（423～430）で、口径13.8～16.0cm、器高4.5～6.0cm、天井径5.2～6.7cmと法量地に幅がみられる。平均的な法量は口径15.1cm、器高5.3cm、天井径5.8cm前後である。また、無高台の碗を蓋に転用した蓋B（431～433）は、口径13.4～16.0cm、器高4.5～5.5cm、天井径5.5～6.6cmを計測する。体部は天井部から底部にかけて直線的に開くもの、丸みをもちながら開くものがみられる。器壁は底部がやや厚く、体部は薄くなるものが多い。ほとんどのものが大きく歪んでおり、天井部から体部外面にかけて降灰しているのを確認できる。いずれも胎土は緻密で、黄灰色から灰白色を呈している。

焼台（第46図434・435）

焼台は窯体の傾斜に合わせて、製品を水平に置き重ね焼きするための支台である。室内から492個体、物原から119個体出土している。434は長さ11.6cm、幅12.0cm、高さ7.5cmを測る。435は長さ13.5cm、幅13.0cm、高さ6.8cmを測る。傾斜角はいずれも20～25°である。その他の焼台もおおむね同じ大きさである。胎土は砂礫を多く含む粗目の粘土を用いて、茶褐色から赤茶褐色を呈している。焼台上面には、碗を重ね焼きした際にできた高台の圧痕が認められる。また、焼台側面には成形時の指圧痕による凹みがみられる。焼台上面を水平にした際の焼台底面は、焼成室床面の傾斜角とおおむね一致する。

その他窯道具（第46図436）

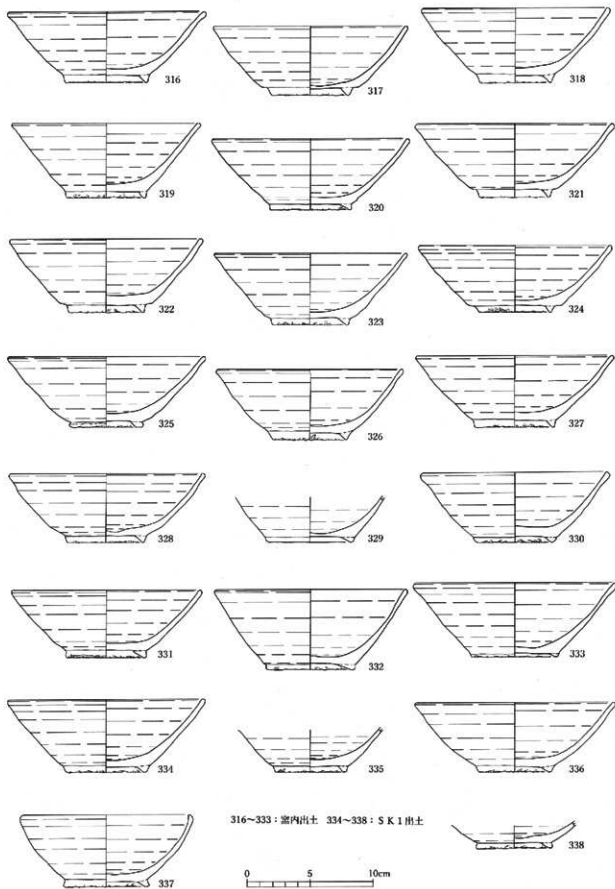
砂礫を多く含む粘土を板状に成形したもので、長さ16.5cm、幅22.4cm、厚さ5.5cmを計測する。なお、本資料は物原より出土しているため、実際に室内で使用されたのか詳細については不明な点が多いのが現状である。胎土は非常に粗く、黄赤褐色を呈している。自然釉の付着はない。

4-2. 灰釉陶器

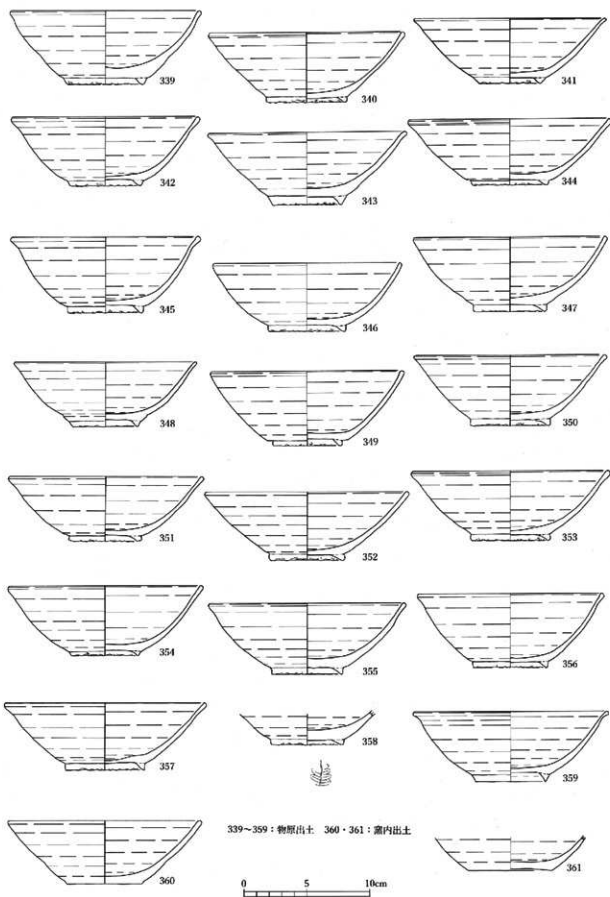
掲載はしていないが、灰釉陶器の碗類と思われる小破片が出土している。9号窯の灰釉陶器と同様に近接する灰釉陶器窯の大針6号窯ないし7号窯の遺物が混入したものと考えられる。

5. 大針9号窯まとめ

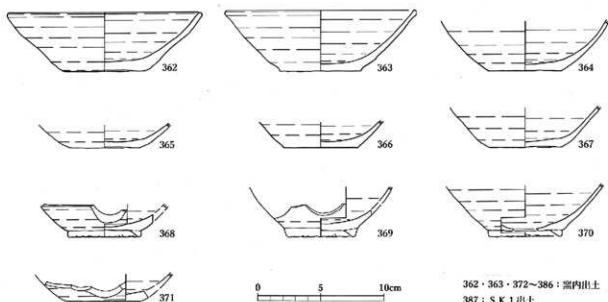
大針9号窯は全長14.09m、最大幅3.2mを測り、8号窯同様に当地域の山茶碗窯としては規模が大きい



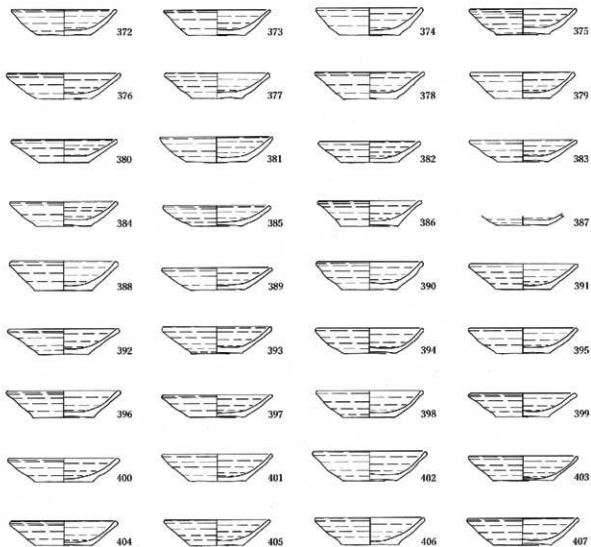
第42図 大針9号窯 出土遺物実測図(1)



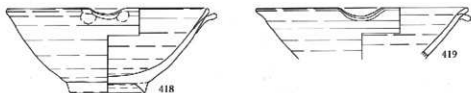
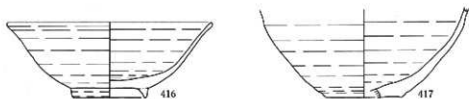
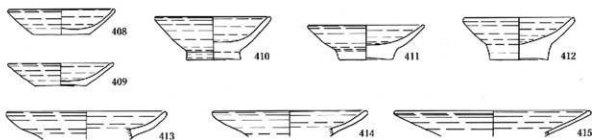
第43図 大針9号窯 出土遺物実測図(2)



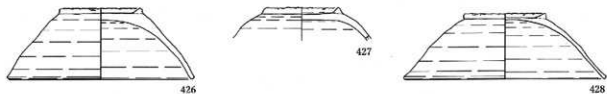
362・363・372～386：富内出土
 387：S K 1 出土
 364～371・388～407：物原出土



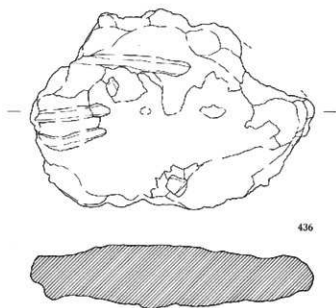
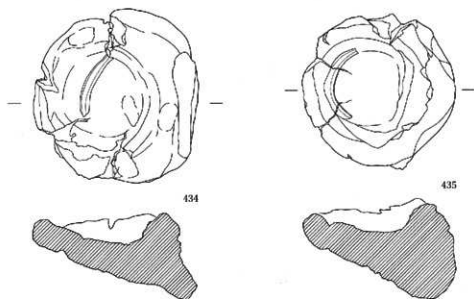
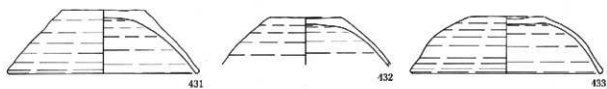
第44図 大針9号窯 出土遺物実測図(3)



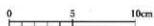
408・409・412・415・417・419・420・428～430：物原出土
410・411・413・414・416・418・421～427：室内出土



第45図 大針9号窯 出土遺物実測図(4)



431・434・435：富内出土 432・433・436：物原出土



第46図 大針9号窯 出土遺物実測図(5)

窯である。特に、床面最大幅が3mを越える窯は現在市内で発掘調査された中で本窯のみである。窯体構造は、焼成室の中央付近で床面最大幅を持つ明瞭な胴張りの平面形で、東濃窯山茶碗編年の白土原1号窯式期の特徴を示す。一方、全体的な規模の大きさ、分焰柱前方から床面傾斜が始まること、焼成室から煙道部にかけて傾斜の変化が僅かなこと、煙道部の長さや平面形は白土原1号窯式期より窯洞1号窯式期の特徴を示している。以上から、本窯は窯洞1号窯式期の窯体構造を主体とするが、例外的に床面幅が広く胴張りの著しい焼成室をもつ窯体となる。

また、焼成室床面に270個と多量の焼台がおおよそ元位置を保持して残存していたことも本窯の特徴である。窯内覆土からは流れ落ちた焼台が222個出土しているが、小破片をまとめて1個体と計上しているものもあり、単純に足した492個が焼成室に並ぶ全個数とはならない。焼成室平面図上で流出した焼台の位置を復元するとおおよそ460～470個となる。隣接する8号窯よりも規模の大きい9号窯であるが、焼台数からも8号窯の推定390個より顕著な多さを示している。さらに焼成後に焼台を全て撤去して物原に廃棄したと考えた場合、9号窯物原出土の焼台数119個体は明らかに少ない。つまり、9号窯で使用された焼台の大半は一度の焼成で撤去されず、次の焼成でもそのまま使用された状況が推測される。残存焼台が床へ強固に貼り付いていたのは調査時に確認しており、強固な貼り付きゆえに撤去されず連続使用されたものと推測する。

付帯する遺構はSK1が検出されたのみである。SK1覆土はほぼ黒色灰層で、罌口に溜まった黒色灰を排出したものと推測されるが、浅い作りで堆積量は決して多いものではなかった。

遺物の主体となる碗は、法量の平均値が口径14.9cm、器高5.5cm、高台径5.7cmである。また、底部に向かい厚みを増す器壁、底部と胴部の境に段差のない平滑な内面、底部内面の静止指ナデ調整は未調整かごく弱いものなどの特徴がある。小皿の法量の平均値は口径8.3cm、器高2.1cm、底径4.4cmである。また、大半の資料で胴部より厚みのある底部、底部と胴部の境の段差がない平滑な内面、底部内面の静止指ナデ調整は未調整かごく弱いものなどの特徴がある。このような碗皿類の特徴は窯洞1号窯式に当て嵌まるものであり、本窯の山茶碗は窯体構造と矛盾なく窯洞1号窯式に比定できる。

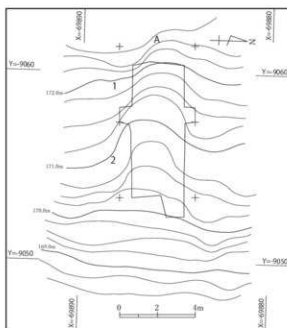
碗と小皿の底部内面静止指ナデ調整の有無を精査すると、碗が約5%、小皿が約3%といずれも8号窯より低いもので、窯内と物原で調整率の差はほとんど現れなかった。底部内面の調整率の低さを製品作成時期の古さと捉えるならば、本窯は窯洞1号窯式期でも古い段階に操業していたと推測される。

第4節 大針11号窯

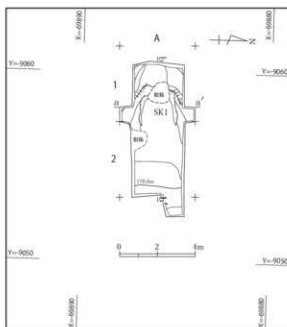
大針11号窯調査区は、大針6・8・9号窯調査区より400m程北西に当たる山林の一部を対象としている。一帯は標高168～172mの東向き斜面で、開発工事で掘削を伴う範囲が調査対象となる。周囲は国道248号線バイパスと民間企業の造成等で大きく改変されており、11号窯に近接して所在した大針2号窯と5号窯は発掘調査が実施されたのち開発に伴い滅失している。なお、5号窯の窯体は調査以前の削平によりすでに滅失した状態であった。

本発掘調査に先立ち簡易な掘削を伴う踏査を行ったところ、一帯は広く攪乱を受けた痕跡があった。また、他所からの流入土と思われる盛土の堆積も確認されるなど、調査対象地が改変を受けていることが判明した。踏査では開発対象地の西端の一部において遺物の分布を確認したが、窯体の位置を確認するに至らなかった。比較的攪乱などの影響が少なく、地形的特徴から窯体が所在する可能性のある地点でトレンチ調査を実施した。窯体は検出されなかったが、遺物を多く包含する層が部分的に確認できた。その結果、窯体自体

は確認調査トレンチよりも西側の開発対象外にあると推定できた。しかし、開発対象地の西側全体がすでに造成による地形の変更を受けており、窠体は滅失あるいはは造成土の下に存在していると判断した。今回の発掘調査は物原を対象としたものである。攪乱を大きく受けた場所と開発工事の影響を受けない場所は調査対象外とし、トレンチ調査部を広げる形で対象範囲を設定した。調査では4×4mのグリッドを東西方向に設定し、グリッド番号を西から順にA-1、A-2、A-3とした。なお、調査中の判断でA-3グリッドは対象から外れている。最終的な調査面積は約24㎡となり、委託者からの要望により調査後には人力による埋



第47図 大針11号窠 調査前地形図 S=1/200



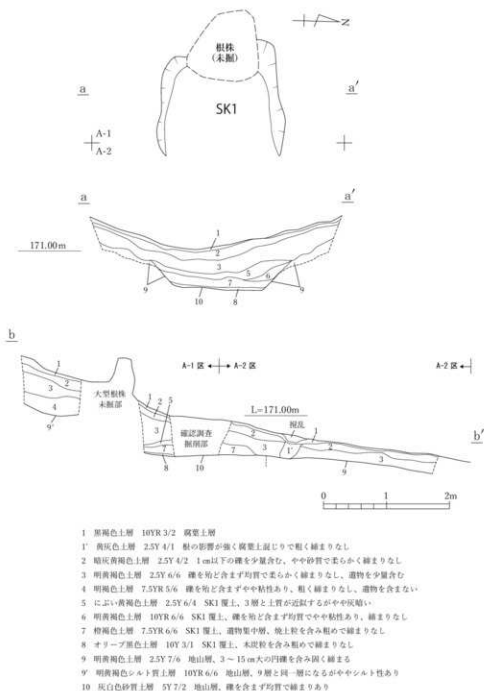
第48図 大針11号窠 調査後地形および遺構配置図 S=1/200

め戻しを行っている。調査区内からは土坑が1基（SK1）と遺物包含層が検出され、それぞれに伴う遺物が出土している。また、グリッド周辺の攪乱土と盛土内に混在していた遺物も可能な限り採取している。

1. 遺構

SK1（第49図）

A-1区を中心にA-2区へ広がる形で検出された土坑である。なお、本発掘調査に先立つ確認調査で検出した遺物包含層は、SK1覆土であったことが本発掘調査で判明している。東向き斜面の地山を掘り込んで作っており、東側が開口する土坑となる。土坑の西辺では安全面から人力による撤去ができなかった大型根株周辺を未掘部として残しており、遺構を完全に検出したものではない。調査の結果、平面形は隅丸方形を



第49図 大針11号窯 SK1 実測図および土層断面実測図

呈し、南北方向が長軸で約 2.0 m、東西方向が短軸で約 1.8 m を測る。覆土は上層からにぶい黄褐色土層（第 49 図 5）、橙褐色土層（同 7）、オリーブ黒色土層（同 8）となる。にぶい黄褐色土層と橙褐色土層の間に部分的に明黄褐色土層（同 6）が挟まる。なお、にぶい黄褐色土層（同 5）は包含層の明黄褐色土層（同 3）から連続する自然変化によるものである。明黄褐色土層（同 6）は地山土の流れ込みの無遺物層であり、純粋に S K 1 覆土と判断できるのは橙褐色土層（同 7）とオリーブ黒色土層（同 8）である。特に、橙褐色土層（同 7）は取り上げ時に黄赤褐遺物集中層として扱った層で、S K 1 覆土の主体層となっている。オリーブ黒色土層（同 8）は橙褐色土層（同 7）に比べ薄い堆積で、木炭粒を含み全体的に黒く遺物の含有は少量である。S K 1 は明黄褐色の地山土（同 9）を掘り込んで作られているが、底面は灰白色砂質土の地山（同 10）となっている。

2. 物原（第 49 図）

調査地点は大針 11 号窯の物原にあたる。地表から地山面までは、A-1 区で最大約 70cm、A-2 区で 40～30cm 程と東へ向かうにつれ堆積は薄くなっている。表土の腐葉土層（第 49 図 1）下は薄い暗灰色土層（同 2）となり、地山と S K 1 の上は主に明黄褐色土層（同 3）が堆積する。調査区西端部では、明黄褐色土層と地山の間に無遺物の明褐色土層（同 4）が堆積している。明黄褐色土層（同 3）は遺物取り上げ時に 2 層とした層である。2 層内の遺物出土は S K 1 付近にほぼ限られ、A-3 区方面や A-1 区西半部からの出土は皆無に等しい。地山は明黄褐色土層（同 9）あるいは明黄褐色シルト質土層（同 9'）になるが、S K 1 底部のみ灰白色砂質の地山土（同 10）となる。これは地山明黄褐色土の下層となる灰白色砂質土が S K 1 の掘り込みによって現れたものと考えられる。遺物の出土状況と土層の観察から、調査区は 11 号物原の中心ではないと推測される。また、S K 1 に堆積するオリーブ黒色土層と遺物の出土状況を見ると調査区の比較的近くに窯体が存在した可能性が考えられる。

3. 出土遺物（第 50～52 図）

調査では山茶碗が出土している。S K 1 と包含層からの出土遺物を中心とした報告となる。このうち S K 1 からはまとまった量の子茶碗が出土しているが、包含層からはまばらに出土する程度で、遺物出土の主体は S K 1 となっている。また、調査区周辺は流入土による盛土の堆積などが広くみられ、盛土に混在していた山茶碗も可能な限り採集している。出土地点による出土量の割合を見ると、S K 1 が約 63%、包含層が約 14%、表探が約 23% となっている。出土した山茶碗は東濃型山茶碗で、灰白色～灰白黄色を呈する緻密な胎土を持っている。出土した個体の総数は 706 点であり、本書ではこのうち 59 点を掲載しているが、掲載資料以外の遺物についても計測と観察を行い遺物の情報に反映させている。

なお、今回出土した山茶碗は明らかに時代の離れた二つの窯式の子茶碗が出土している。遺構や包含層からの出土が主体となるものを大針 11 号窯の遺物として扱い、表探などから若干量の出土となる一方を別窯からの混入品として扱って報告する。

3-1. 11 号窯出土の子茶碗

出土した 706 個体のうち、大針 11 号窯に属する子茶碗は 651 個体と全体の約 9 割にあたる。器種は碗類、皿類、鉢、窯道具類に分類される（第 4 表）。S K 1 からの出土が 441 個体と 11 号窯遺物の 2/3 は S K 1 覆土内であり、包含層からの出土も S K 1 付近に固まるなど遺物出土は S K 1 中心となっている。

第4表 大針11号窯 グリッド別出土遺物個体数表

帰属	分類	器種名	SK1	A			表探	計
				1	2	3		
11号窯 出土	碗類	碗1	341	3	58	5	93	500
		碗2	24	5			5	34
		無高台碗	17		2	1	3	23
		穿孔碗	2					2
		刻線碗	2		1			3
	皿類	小皿	13	2	4		6	25
	鉢類	鉢	1					1
	窯道具類	窯道具蓋 A	37		4		7	48
		窯道具蓋 B	2	1	1		8	12
		窯道具蓋 C					1	1
	焼台	2					2	
11号窯 以外	碗類	碗	4	4	3	1	33	45
	皿類	小皿	1		2		4	7
	窯道具類	窯道具蓋			1		2	3
計			446	15	76	7	162	706

(1) 碗類

碗 (第51図437～453)

碗は534個体が出土しており、大針11号遺物の約8割を占めるなど出土の主体器種となっている。大きさにより主体となる碗1(473～447)と小型の碗2(448～453)に分類される。碗1が500個体の出土に対し碗2は34個体の出土となり、全体においても碗1の出土量が約7割を占める。碗1の法量値は、口径13.0～14.5cm、器高5.0～6.4cm、高台径3.9～5.8cmのを測る。平均値は口径13.7cm、器高5.8cm、高台径4.7cmとなる。碗2の法量値は、口径10.6～12.0cm、器高4.7～5.2cm、高台径3.4～4.5cmを測る。平均値は口径11.4cm、器高4.9cm、高台径3.9cmとなる。平均値で見るとおおよその器高:口径は碗1が1:2.4、碗2が1:2.3と近い比にある。ロクロ成形で外面にはロクロ目の凹凸が弱く残る。内面は、底部から胴部への変化に弱い段を持って境としており、境から口縁部まで平滑に成形される。腰部から胴部下半に張りをもって口縁へ開き、外面の口縁部直下で若干の括れを持ち口縁部が肥厚な器形となる。口縁部は直線的に開くものが大半だが、僅かに外反するものも存在する。口縁端部はナデ調整で丸く仕上げられている。高台は全て付高台で、断面形は不整形な三角形を呈する。なお、高台端部には柵痕が付いている。原則的に底部内面は静止指ナデ調整されている。底部外面には回転系切痕が残るが、高台接合の際の指ナデで回転系切痕の大半が消されている碗もごく少量ある。また、碗の約7割の底部外面に板目状圧痕が認められる。

無高台碗 (第51図454～459)

高台の付かない平底の碗で、23個体が出土している。無高台碗の法量値は、口径13.0～14.4cm、器高5.0～5.7cm、底径4.5～5.4cmを測る。平均値は口径13.6cm、器高5.3cm、底径5.1cmとなる。器形と大きさは碗1に対応している。碗2に対応する無高台碗は本発掘調査で出土していないが、試掘調査で出土している。原則的に底部内面は静止指ナデ調整されている。底部外面では例外なく回転系切痕を残し、板目状圧痕は15個体で認められる。

穿孔碗 (第51図460)

底部に穿孔を持つ碗が2個体が出土している。460は碗1に対応する大きさで、底部の穿孔は不整形な楕円を呈している。穿孔は底部の中心から外れた場所にあり、孔の大きさは最大で1.6cm程度である。観察では焼成前の人為的な穿孔に焼成後の割れが重なったもので、本来の形は不明である。別個体の底部穿孔も

やはり中心から外れた場所にある不整形な楕円だが、焼成後に打ち欠いたような形状である。

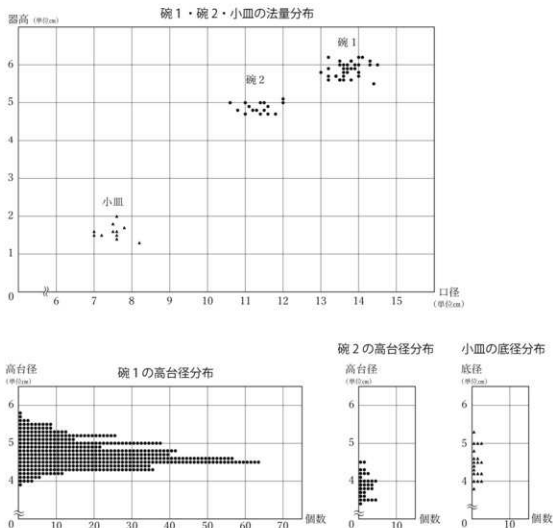
刻線碗（第51図461～463）

刻線碗は内面に刻線が施されたもの（461、462）と外面に刻線が施されたもの（463）があり、器形と大きさは碗1に対応している。461と462は胴部内面に斜格子状の刻線が雑に施され、463は刻線が口縁部付近まで及んでいることが確認できる。いずれも底部に刻線は認められない。463は胴部外面から口縁部外面にかけて片切り状の刻線が直線的に1筋施されている。

(2) 皿類

小皿（第51図464～471）

皿類は平底の小皿が出土している。出土量は25個体と11号遺物全体の4%にも満たない。約半数の13個体がSK1からの出土である。小皿の法量値は、口径7.0～8.2cm、器高1.4～1.6cm、底径3.8～5.3cmを測る。平均値は口径7.5cm、器高1.5cm、底径4.5cmとなる。ロクロ成形だが外面のロクロ目は目立たない。基本的に腰部から口縁部まで直線的に開く器形だが、465のように腰部に張りを持つものも存在する。口縁部は肥厚気味で鋭角なものが多いなか、ナデ調整により丸く成形されたものもある。底部内面は中心と外縁が窪む。底部から胴部への変化が明確な段として境を呈し、胴部から口縁部にかけては平滑に成形されている。原則的に底部内面には静止指ナデ調整されるが、未調整のものも1個体存在する。底部外面は例外



第50図 大針11号窯 出土遺物法量分布図

なく回転系切痕を残し、板目状圧痕は約半数の13個体で認められる。

(3) 鉢類

鉢 (第51図472)

鉢類は鉢の口縁部に該当するもの(472)が出土している。残存率が悪いので、図上復元も難しく口径は不明である。碗類と比較すると倍程度の厚みがある。残存部の観察では、胴部から口縁部まで直線的に開く器形である。外面はロクロ目が弱い凹凸を残し、内面は平滑に成形されロクロ目の凹凸が僅かに分かる程度である。口縁部は鋭角に作りつつも端部はやや丸めに成形される。

(4) 窯道具類

窯道具蓋 (第52図473～479)

製品を降灰から守るために使用されたもので、61個体が出土している。外面は程度や範囲には個体差があるものの、降灰による自然釉や窯ボロが付着する。蓋は器形により分類している。有高台碗を転用した蓋A(473～476)、と無高台碗を転用した蓋B(477、478)、専用蓋として作られた蓋C(479)に分類できる。さらに、蓋Aは大きさから碗1転用蓋(473、474)と碗2転用蓋(475、476)に分けられる。個体数で比較すると、蓋Aが48個体(うち碗2転用6個体)、蓋Bが12個体、蓋Cが1個体と、蓋Aが約8割を占める。蓋C(479)は、浅い無高台碗形状のものを伏せて使用したものである。同器形の製品が出土していないこと、内面の中心に静止指ナデ調整が認められないこと、内面が平滑に成形されていないことから最初から窯道具として作られた蓋と判断できる。天井径は4.8cmを測り、碗類転用蓋と比較して口縁への開きが広い。下部の欠損は口縁に近い部位と考えられ、器高は3.5～4.0cm程度と推測される。

焼台 (第52図480・481)

製品を積み重ねて置くため室内床面に設置されるものである。胎土は5mm以下の小礫を多く含む粗いもので、良く焼き締まっているが大小のひび割れも多い。色は灰黄色を呈するが、上面と底面は褐色が強い。手捏ね成形であるが、表面に成形の際にできる指跡などは確認されない。上面は小さな凹凸はあるものの平坦に作られており、製品の明確な設置痕は認められない。なお、481の上面には植物圧痕がみられる。長さど幅は直径12cm程度で、上面の計測値は480が直径約8cm、481が直径約9cmとなる。

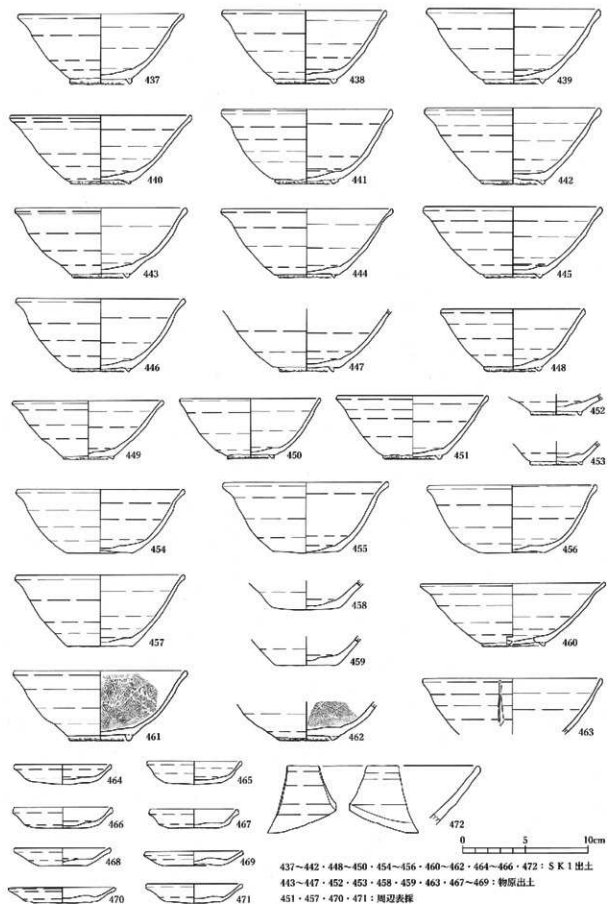
3-2, 11号窯以外の山茶碗

大針11号窯とは別の窯で焼成され、本調査区内に混入したと考えられる山茶碗である。発掘調査区内から55個体を採集している。大半が攪乱土および混入した盛土内から出土したものである。僅かにSK1より5個体、包含層から12個体の出土が確認される。出土した器種は碗、小皿、窯道具蓋である。胎土は緻密で良く焼き締まり、色は灰白色～灰黄白色を呈している。

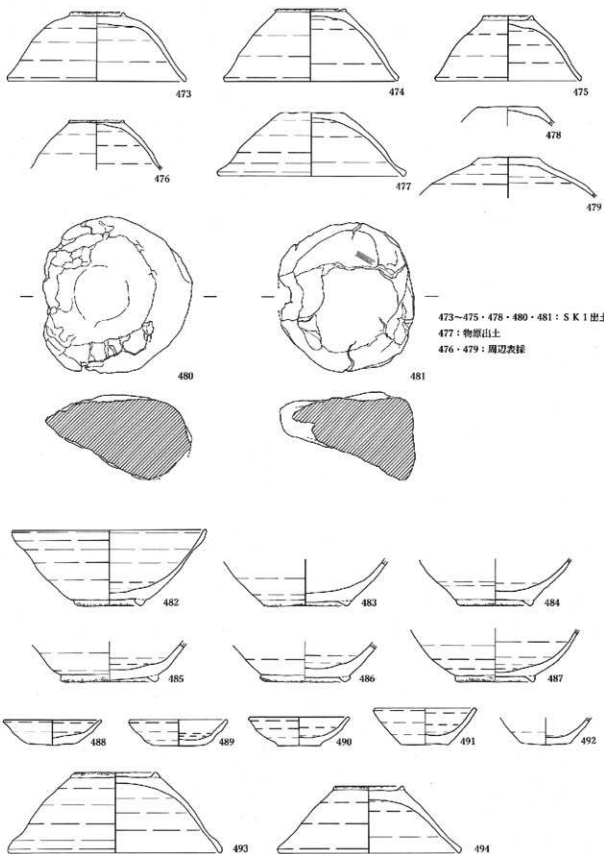
(1) 碗類

碗 (第52図482～487)

主体器種となる製品で、特別な加工が器面に施された碗は確認されていない。SK1で4個体、包含層から8個体、表採で33個体の計45個体が出土している。口縁まで残存していた資料は482のみで、他の44個体は底部片である。482の法量値は、口径15.2cm、器高6.0cm、高台径4.8cmを測る。その他底部の計測を含めると、高台径は4.8～7.5cmの範囲にあり、平均値は6.5cmである。なお、482の高台は他の資料と比較して底部外縁より内側に付けられているため小振りな径となり、482を外すと高台径は5.7～7.5cmである。全体的に腰部は弱い張りをもって開く器形とみられる。482の観察では口縁部までほぼ直線的に開

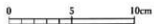


第51図 大針11号窯 出土遺物実測図(1)



473~475・478・480・481：S K I 出土
 477：物原出土
 476・479：周辺表採

483・484・488：S K I 出土 485・486・491・492・494：物原出土
 482・487・489・490・493：周辺表採



第52図 大針11号窯出土遺物実測図(2)

き、口縁端部は丸く仕上げられている。内面は底部から口縁部まで平滑に仕成形され、底部と胴部の境も不明瞭なものが多い。なお、485と486の様に弱い段による境を持つものも存在する。高台はすべて付高台で、基本的な断面形は三角形を呈するが、外面に稜を持つ不整形に近いものもみられる。高台端部には靱痕が残るが、11号窯の碗より少なく弱い痕跡である。底部内面の静止指ナデ調整は過半数のもので認められないが、確認できるものでもごく弱い。底部外面では例外なく回転糸切痕が残り、5割弱の資料に板目状圧痕が認められる。11号窯の碗と比較して全体的に大振り内で肉厚な碗となっている。

(2) 皿類

小皿 (第52図488～492)

皿類は平底の小皿が7個体出土している。このうち488はSK1からの出土、491と492は包含層からの出土である。法量値は、口径7.6～7.8cm、器高2.1～2.9cm、底径3.5～4.2cmを測る。平均値は口径7.7cm、器高2.4cm、底径3.9cmとなる。外面にはロクロ目によるごく弱い凹凸が残る。腰部から胴部にかけて弱い張りをもって開くもの(488、490)と、直線的に開くもの(489、491、492)がある。口縁部は外反せず端部は丸く取められている。底部内面は基本的に平坦で、胴部への変化で僅かな段を境とするものもあるが、明確な境のないものもある。胴部内面から口縁部までは平滑に成形されている。底部内面の静止指ナデ調整は認められるものと認められないものがあるが、個体数が少ないため傾向を掴むに至らない。認められるものに関しても、碗と同様にごく弱い調整である。原則的に底部外面は回転糸切痕が残るが、492は回転糸切痕がナデ消された訳でもなく認められない。回転を利用し切り取った痕跡は確認できるため、回転ヘラ切など糸切りとは異なる技法で底面をロクロから切り離したものと考えられる。底部外面の板目状圧痕は、認められるものと認められないものが存在する。11号窯の小皿よりも器高が高く肉厚な小皿である。

(3) 窯道具類

窯道具蓋 (第52図493・494)

窯道具類は窯道具の蓋が3個体出土している。うち1個体が包含層出土で2個体が表探である。焼成時に製品を降灰から守る道具として製品に被せられたもので、外面全体に自然釉と窯ボロが付着している。493と494は天井部に高台が付いており、碗を蓋に転用して使用したものである。法量値は、493が口径16.7cm、器高6.4cm、天井径6.4cmを測り、494が口径14.3cm、器高5.3cm、天井径5.3cmを測る。元々は碗として作られたものであり、493と494を碗の法量値に含めると、碗の大きさは大小の幅が広がる。

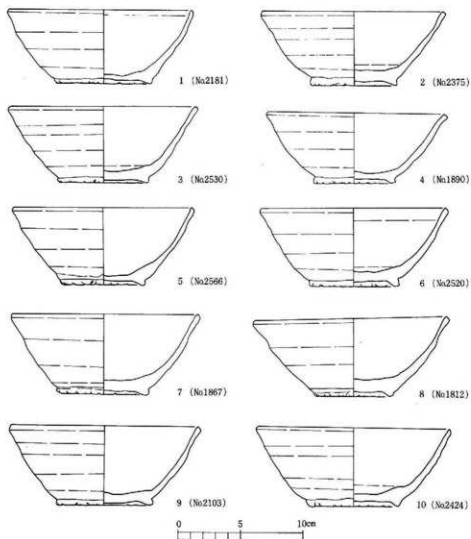
4. 大針11号窯まとめ

今回の発掘調査は、地形が広く攪乱を受けているなかで物原の一部と土坑(SK1)を1基検出している。遺物はSK1とSK1周辺の層から出土した程度で遺物包含層の広がり認められない。調査地点は物原の裾部にあたる考えられ、東向き斜面の開発対象地西端に設定した調査区よりもさらに西側に窯体と物原の主体があると推測される。今回の開発対象地の西側一帯はすでに造成等の改変を受けており、11号窯体と物原は削平されて滅失した可能性が考えられる。

出土した遺物のうち、SK1を主体にグリッド調査区内のおおむね攪乱を受けていない土層から出土したものを大針11号窯の遺物として扱う。11号窯の山茶碗は、碗と小皿の平均的な法量値、大小に分類可能な碗、薄手の作り、内面底部の静止指ナデ調整の具合や底部と胴部の境を示す段、高台の形状などの特徴から東濃窯山茶碗編年の明和1号窯式に比定できる。実年代は13世紀後葉から14世紀初頭である。11号窯とは別窯のものとした山茶碗は、碗と小皿の法量値、特に底部が肉厚な作り、底部内面の静止指ナデ調整の程度、

高台の大きさや形状などの特徴から浅間窯下1号窯式の後半期に比定できる。実年代は12世紀第3四半世紀でも後年代と推測される。

以上のように、今回の発掘調査では明和1号窯式と浅間窯下1号窯式の二つの窯式の山茶碗が確認された。浅間窯下1号窯式は明和1号窯式に先行する窯式で、この二つの窯式には約1世紀の隔りがある。調査区内から両窯式の間を埋める窯式の子茶碗が出土していないことから、浅間窯下1号窯式の子茶碗は11号窯と別の窯で焼成されたものが混入したものと考えられる。すでに滅失しているものの子茶碗である大針2号窯と5号窯が11号窯付近に所在しており、このうち5号窯の子茶碗は浅間窯下1号窯式に比定されている。浅間窯下1号窯式の子茶碗は主に流入した盛土から出土しており、流入土は位置関係的にも5号窯物原の土であると考えられる。つまり、今回の調査で出土した浅間窯下1号窯式の子茶碗は5号窯遺物とするのが自然である。5号窯出土の子茶碗(第53図)との比較でも、観察の限り同一窯の子茶碗と判断できる。SK1覆土や包含層に混在していた浅間窯下1号窯式の子茶碗は、現代擾乱によるもののほか、11号窯稼働時においてすでに周辺に散乱していた5号窯遺物が混入したものと考えられる。



第53図 大針5号窯出土遺物実測図

(『一般国道248号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』より転載)

第4章 総括

第3章の各窯の成果として報告した内容と一部重複するが、今回の発掘調査の総括を行う。

灰釉陶器窯

本書で報告した窯のうち、大針6号窯が灰釉陶器窯である。東濃窯灰釉陶器編年(註1)では、6号窯は大原2号窯式に比定される。大原2号窯式の実年代は10世紀前半である。市内ではこれまでに大原2号窯、北丘7号窯、大針起4号窯、大針3号窯、住古1号窯が大原2号窯式に比定されている。

6号窯は窯体の一部(焚口～焼成室前半)と物原が調査対象となったが、窯体・物原とも広く現代擾乱を受けていた。窯体上半部(焼成室後半～煙道部)は調査区域外で、開発の影響を受けず現状保存されるため窯体の全容は不明である。確認できた範囲内で明らかとなった窯体構造としては、①分焰柱を伴い寸型を推察する窯体平面プランであること、②床面傾斜は分焰柱までほぼ平坦で、分焰柱奥で僅かに下がり緩やかな上りに転じること、などである。部分的ではあるが、今回の6号窯を市内の灰釉陶器窯と比較すると、やはり大原2号窯式の北丘7号窯と大針起4号窯に近似する。なお、大針起4号窯は、北丘7号窯より新しく大原2号窯と大針3号窯より古いという時期関係が報告されている(註2)。

6号窯から出土した灰釉陶器は、施釉技法として刷毛塗りや浸け掛けの両方が確認されたが、浸け掛けが大半を占めていた。碗Aと皿は法量値により、大中小(小さい順に碗A1・A2・A3、皿1・皿2・皿3)に分類した。主体は中型の碗A2と皿2である。また、1個体のみだが深碗(碗B)も出土する。そのほかの器種では、輪花碗、輪花皿、段皿、耳皿、鉢類、小瓶、長頸瓶、広口瓶、短頸壺、四足壺、覆宝珠形の摘みをもつ蓋などがある。これは大針3号窯とほぼ同じ器種構成である。法量値の幅に多少の差はあるものの、碗が大きさにより3つに分類される点が共通している(註3)。ただし、6号窯の碗皿類は口縁端部が短く外反する作りを主体としており、刷毛塗りも一定量確認できることなど古い特徴を含むことから、生産の開始が光ヶ丘1号窯式期に近い可能性が高い。大原2号窯式から生産が開始され、次段階で盛行する器種に折縁皿がある。大針3号窯からは出土しているものの、6号窯では小破片すら確認されていない点から、生産が始まる前段階である可能性が考えられる。また、6号窯に近い器種構成には大針起4号窯も該当する。碗皿類は、浸け掛けを主体としながら刷毛塗りを一定量含む施釉であること、口縁端部が短く外反する成形であること、生産器種に折縁皿を含まないことなどの共通点から、時間的な差は大きくないと考えられる。なお、大針起4号窯における碗皿類の法量値による区分は碗で大小に分類されるのみで細かく合致するものではない。もし、6号窯出土の須恵器が6号窯灰釉陶器と併焼されたものならば、大針起4号窯より古い時期の特徴となるが、今回の調査では確実な併焼資料はみられなかった。

したがって、窯体構造と出土遺物から、6号窯は大針起4号窯と同時期の可能性が高く、大原2号窯式内でも大原2号窯と大針3号窯より古い時期の窯と判断できる。実年代を10世紀前半代としたが、10世紀初頭には操業を開始していた可能性が考えられる。6号窯に近接する灰釉陶器窯では窯式の連続性がみられ、大針4号窯と大針16号窯(光ヶ丘1号窯式後半)→大針6号窯と大針起4号窯(大原2号窯式前半)→大針3号窯(大原2号窯式後半)→大針1号窯と大針7号窯(虎浜山1号窯式)といったように、同一地区内における9世紀後半から10世紀代にわたる灰釉陶器の変遷を確認できる。

山茶碗窯

本書で報告した窯のうち、大針8・9・11号窯が山茶碗窯である。このうち8号窯と9号窯は窯体および物原など窯跡に伴う遺構を検出したが、11号窯は物原の一部と土坑1基を検出したのみである。東濃窯

山茶碗編年(註4)では、8号窯と9号窯が窯洞1号窯式、11号窯が明和1号窯式に比定される。なお、大針11号窯調査区内から浅間窯下1号窯式の山茶碗が出土しているが、これは近接して所在した大針5号窯(滅失)遺物が混入したものと考えられる。

8号窯と9号窯の窯体は全長や床面最大幅など規模の差はあるが、①平面プランは胴張りを呈すること、②床面傾斜は分楹柱直前から緩やかに始まり、焼成室から煙道部にかけて傾斜に大きな変化はないこと、という構造は共通しており、窯洞1号窯式期の窯体として矛盾はない。また、窯洞1号窯式期の窯体は最も規模が大きくなる時期であり、両窯ともその特徴がよく表れている。多治見市内の発掘調査例から、該当窯式期の窯体全長は11.2mから17.2mまであり、平均値は約13.1mである。8号窯は全長約13.8m、9号窯は全長約14.1mであることから平均値を上回る大きい部類の窯体といえる。焼成室の長さは平均約6.2mに対し、8号窯は約5.9m、9号窯は約5.4mとなり、全長に比例するように長くはない。ただし、焼成室最大幅の平均値が約2.5mを示すなか、8号窯は2.7m、9号窯は3.2mと広めである。特に9号窯の床面幅の広さは山茶碗窯のなかで突出している。焼成室の長さが8号窯や窯洞1号窯式期の平均値より短い9号窯であるが、幅を広くすることで焼成空間を大きく確保しているものと推測される。

8号窯と9号窯の前後関係は、U区内におおよそ物原の境があるものの、包含層の明確な上下関係は確認できなかった。出土遺物からいずれも窯洞1号窯式に比定されるが、器形や厚み、平均法量値がほぼ同じであるため、出土遺物により時期の前後関係を掴むのは難しい。ただし、8号窯に小型の碗が若干存在し、底部内面における静止指ナデ調整の調整率が8号窯>9号窯という8号窯遺物に新しい要素がみられる。よって9号窯が先行して稼働・廃絶したのち、大針8号窯が築窯されるといった前後関係を求められる。窯洞1号窯式の実年代は13世紀前半代の比較的短い期間(AD.1210~1220頃)が与えられている。つまり、9号窯から8号窯へはほぼ期間を置かず生産を開始したと考えられる。9号窯は焼成室を短めにし床面幅の広い焼成空間を設けたが、天井の強度が低いなど何らかの根拠を加味した上で、8号窯では幅を狭め長さを伸ばした焼成空間を設けたものと推測する(註5)。

11号窯は出土遺物の特徴から明和1号窯式と比定した。調査範囲が物原の一部であり、土坑1基と出土遺物から分かる限られた成果である。碗の平均的な法量値と器形、底部内面の調整など明和1号窯式の特徴に該当するものである。大針地区内において大畑大洞4号窯式以降の窯跡は現在のところ確認されておらず、11号窯が大針地区における山茶碗生産の最終例と考えられる。大針古窯跡群が立地する華立山山麓に分布する一大生産地である北小木古窯跡群は、白土原1号窯式期に生産の最盛期を迎え、明和1号窯式期から窯数が減少傾向にある。同時に市内における山茶碗生産の主体は、小名田・高田地区や土岐川以南に移り、その動きに追隨して大針地区も生産の主要地から外れる状況が推測される。

(註1) 東濃窯灰釉陶器編年(山内2008)に準拠する。第1段階:光ヶ丘1号窯式、第2段階:大原2号窯式、第3段階:虎浜山1号窯式、第4段階:丸石2号窯式、第5段階:明和27号窯式、第6段階:西坂1号窯式

(註2) 山内伸浩2012「第7章総括 大針起4号窯 編年の位置づけ」『北丘30号窯・大針起4号窯発掘調査報告書』

(註3) 碗の大きさによる出土割合は、大針3号窯では小型のものが最も高いという差はある。

(註4) 東濃窯山茶碗編年(山内2008)に準拠する。第1段階:矢戸上野2号窯式、第2段階:谷迫間2号窯式、第3段階:浅間窯下1号窯式、第4段階:丸石3号窯式、第5段階:窯洞1号窯式、第6段階:白土原1号窯式、第7段階:明和1号窯式、第8段階:大畑大洞4号窯式、第9段階:大谷洞14号窯式、第10段階:大洞東1号窯式、第11段階:脇之島3号窯式、第12段階:生田2号窯式

(註5) 岩下英治 2001「第9章総括 第6節 窯体構造の変化についての考察」『北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』では、窯洞1号窯式について「この時期は、山茶碗窯における窯体構造の混迷期であり、試行錯誤している経過が窺える」と考察している。大針8・9号窯の構造も試行錯誤の一環と考えられる。

参考文献

- 小木曾郁夫、齋藤孝正、若尾正成ほか 1981『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
山内伸浩、若尾正成ほか 1987『一般公道248号道路改良工事に伴う埋蔵文化座発掘調査報告書』多治見市教育委員会
田口昭二、山内伸浩ほか 1991『北小木古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
田口昭二、山内伸浩ほか 2001『北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』多治見市教育委員会
山内伸浩 2008「東濃地域における灰釉陶器・山茶碗生産の様相 一窯の分布と変遷からの視点一」『日本考古学会2008年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会
山内伸浩 2012『北丘30号窯・大針起4号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
山内伸浩 2016『大針16号窯・北丘30号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
河野典夫、各務嘉洋 2016『住吉古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会

第5表 大針6号 窯出土遺物観察表

法量値の単位はcm。()内は推定値

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	施軸	へう附り		備考
										外部	内部	
1	003	碗A2	B-1	室内焼成塗土 黄褐	全体2/12	(12.6)	4.4	(6.4)	○	○	○	
2	007	碗A2	B-1	室内焼成塗土 黄褐	口縁部4/12	(15.5)	—	—	○	○	—	
3	001	碗A2	B-1	室内焼成塗土上半 暗黄褐	底部完形	—	—	5.9	○	○	○	
4	002	碗A2	B-1	室内焼成塗土上半 暗黄褐	底部完形	—	—	6.2	○	×	○	
5	004	碗A2	B-1	室内焼成塗土 黄褐	底部10/12	—	—	6.7	○	○	○	一部焼成やや不足
6	014	碗A1	C-3	3層 暗灰褐	全体6/12	(9.8)	3.2	4.7	○	○	○	
7	009	碗A1	A-2	2層 黄褐	全体6/12	9.6	3.4	4.6	○	○	○	
8	013	碗A1	C-2	3層 暗灰黄褐	全体2/12	(10.2)	3.2	4.6	○	○	○	一部焼成やや不足
9	011	碗A1	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	全体2/12	(10.6)	3.7	5.4	○	○	○	体部内面に重ね焼きの痕跡
10	012	碗A1	B-3	1層 灰葉土	全体2/12	(10.6)	3.7	4.8	○	○	○	体部内面に重ね焼きの痕跡
11	015	碗A1	全区	表掻	全体4/12	(11.6)	3.3	5.1	○	×	○	体部内面・高台縁部に重ね焼きの痕跡
12	010	碗A1	B-2	撥乱塗土	全体5/12	11.2	3.7	5.1	○	×	○	体部内面に重ね焼きの痕跡
13	008	碗A1	A-2	1層 灰葉土	全体4/12	11.4	3.5	5.0	○	○	○	体部内面に重ね焼きの痕跡
14	021	碗A2	B-4	2層 黄褐	全体6/12	12.8	4.6	6.6	○	○	○	
15	018	碗A2	B-3	2層 褐色	全体5/12	(13.0)	4.5	6.8	○	○	○	
16	022	碗A2	C-2	1層 灰葉土	全体3/12	(13.2)	4.9	6.4	○	○	○	
17	026	碗A2	C-2	2層 黄褐	全体4/12	(13.9)	4.1	6.4	○	○	○	
18	020	碗A2	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	全体2/12	(14.0)	4.5	6.6	不明	○	○	焼成不足
19	023	碗A2	C-2	2層 暗褐	全体4/12	(13.4)	4.6	6.2	○	○	○	
20	030	碗A2	C-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	全体5/12	(14.1)	4.5	6.0	○	○	○	
21	024	碗A2	C-2	2層 黄褐	全体4/12	(14.2)	4.8	6.7	○	○	○	
22	029	碗A2	C-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	全体3/12	(13.9)	5.0	6.2	○	○	○	一部焼成過多。体部内面に重ね焼きの痕跡
23	019	碗A2	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	全体3/12	(14.4)	4.7	6.7	○	○	○	体部内面に自然軸降灰及び多量のボロ付着
24	025	碗A2	C-2	2層 黄褐	全体4/12	(15.0)	4.6	6.6	○	○	○	釜み大
25	027	碗A2	C-2	2層 黄褐	全体4/12	(14.6)	4.6	6.5	○	○	○	
26	017	碗A2	A-2	2層 黄褐	全体3/12	(15.2)	5.0	6.8	○	○	○	
27	044	碗A2	A-2	2層 黄褐	口縁部3/12	(12.0)	—	—	○	×	—	口縁が外反しない
28	045	碗A2	C-2	2層 黄褐	口縁部2/12	(12.6)	—	—	○	○	—	口縁が外反しない
29	048	碗A2	全区	地山面滑溜中	底部3/12	—	—	(6.1)	○	○	○	角高台
30	047	碗A2	C-3	1層 灰葉土	底部4/12	—	—	(6.2)	○	×	○	角高台
31	043	碗A2	B-4	2層 暗黄褐	底部9/12	—	—	6.7	○	○	×	底部外面に糸切痕
32	016	碗A3	A-2	2層 黄褐	全体3/12	(16.6)	4.8	7.4	○	○	○	
33	028	碗A3	C-2	撥乱塗土	全体3/12	(16.4)	5.0	7.2	○	○	○	
34	031	碗A3	A-3	2層 黄褐	全体2/12	(18.4)	5.5	7.2	○	○	○	
35	033	碗A3	全区	表掻	全体3/12	(17.2)	5.7	(7.1)	○	○	—	
36	032	碗A3	C-2	2層 黄褐	全体4/12	(19.0)	5.2	7.7	○	○	○	
37	035	碗A3	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰・埋込含)	全体4/12	(18.6)	6.0	7.5	○	○	○	体部内面に自然軸降灰及び多量のボロ付着
38	034	碗A3	A-2	2層 黄褐	全体5/12	(20.0)	6.3	8.6	○	○	○	胴毛盛りか。体部内面に多量のボロ付着
39	036	碗A3	C-2	2層 黄褐	全体5/12	(18.4)	5.9	8.3	○	○	○	体部内面に重ね焼きの痕跡
40	037	碗A3	C-3	2層 黄褐	全体3/12	(20.0)	6.5	9.2	○	○	○	
41	038	碗B	B-2	撥乱塗土	全体3/12	(16.4)	7.2	8.8	○	○	○	一部焼成不足
42	040	碗A3	C-2	2層 黄褐	底部9/12	—	—	7.5	○	○	○	底部外面に割線
43	046	碗A2	全区	表掻	口縁部破片	—	—	—	○	—	—	体部内面に洗線
44	041	碗A3	B-4	1層 灰葉土	口縁部1/12	(17.3)	—	—	○	○	—	体部外面に割線。胴毛盛りか
45	042	碗A2	C-3	2層 黄褐	口縁部2/12	(15.4)	—	—	○	—	—	体部外面に割線。胴毛盛りか
46	039	碗A1	B-3	2層 暗黄褐	底部完形	—	—	5.0	○	○	○	底部内面に割線
47	060	碗A2	B-4	2層 暗黄褐	底部完形	—	—	6.0	○	×	○	底部内面に割線

造物番号	躯体番号	器種	グリッド	造構・階序	残存率	口径	器高	高台径 底径	施釉	へう削り 胴部 外面	底部 外面	備考
46	050	輪花靴	B-2	襷瓦盛土	全体4/12	(155)	5.2	(6.4)	○	×	○	
49	049	輪花靴	B-1	室内燃焼空置土	全体2/12	(178)	8.2	(8.0)	○	—	—	体部外面に小片破着
50	052	輪花靴	C-3	1層 灰葉土 (襷瓦倉)	口縁部1/12	(142)	—	—	○	—	—	
51	051	輪花靴	B-3	2層 黄褐 (襷瓦倉)	口縁部1/12	—	—	—	○	○	—	
52	005	皿1	B-1	室内分層柱付近覆土下平 黄褐	全体2/12	(126)	2.0	(6.2)	○	○	○	
53	006	皿2	B-1	室内燃焼空置土 黄褐	底部完形	—	—	6.4	○	○	○	一部焼成過多か、底部外面に割縁
54	054	皿1	B-3	1層 灰葉土	全体5/12	(124)	2.5	6.2	○	○	○	
55	056	皿1	B-3	襷瓦盛土	全体9/12	134	2.6	5.8	○	○	○	
56	055	皿1	B-3	2層 暗黄褐 (襷瓦倉)	全体3/12	(132)	2.5	(6.6)	○	○	○	
57	007	皿2	C-2	襷瓦盛土	全体5/12	(140)	2.5	6.7	○	○	○	
58	069	皿2	C-3	2層 黄褐	全体10/12	140	2.6	6.4	○	○	○	
59	057	皿2	全灰	表様	全体2/12	(137)	3.0	(6.6)	○	○	○	
60	066	皿2	C-2	2層 黄褐	全体10/12	144	2.8	6.4	○	○	○	眉毛盛りか
61	070	皿2	C-3	3層 黒灰褐 (黒色灰・襷瓦倉)	全体6/12	146	2.7	6.7	○	○	○	一部焼成やや不足
62	059	皿2	A-2	2層 黄褐	全体4/12	(148)	2.9	6.2	○	○	○	
63	061	皿2	B-2	襷瓦盛土	全体7/12	146	3.1	7.0	○	○	○	
64	064	皿2	B-2	襷瓦盛土	全体6/12	(142)	3.2	6.3	○	○	○	一部焼成やや不足
65	053	皿2	B-2	1層 灰葉土	全体1/12	(144)	3.0	(6.6)	○	×	○	
66	058	皿2	A-2	2層 黄褐	全体4/12	(152)	2.8	6.7	○	○	○	
67	005	皿2	C-2	2層 黄褐	全体11/12	152	3.1	6.5	○	×	○	眉毛盛りか
68	063	皿2	B-2	襷瓦盛土	全体6/12	149	3.2	7.4	○	○	○	一部焼成不足
69	060	皿2	B-2	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体7/12	154	3.7	7.0	○	○	○	焼成不足
70	002	皿2	B-2	襷瓦盛土	全体7/12	148	3.5	6.8	○	○	○	一部焼成過多
71	068	皿3	C-2	襷瓦盛土	全体4/12	(170)	3.6	8.8	○	○	○	焼成不足
72	073	皿3	B-2	襷瓦盛土	全体7/12	162	3.1	7.2	○	○	○	眉毛盛りか、体部内面に多量のボロ付着
73	075	皿3	B-3	2層 暗黄褐	全体4/12	(184)	3.8	7.6	○	○	○	
74	071	皿3	A-2	2層 黄褐	全体3/12	(184)	3.0	(7.8)	○	○	○	焼成やや不足
75	077	皿3	C-2	2層 黄褐	全体4/12	(170)	3.3	7.2	○	○	○	
76	078	皿3	C-3	3層 暗灰褐	全体6/12	174	4.0	7.3	○	○	○	歪み大
77	079	皿3	C-3	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体3/12	(180)	3.7	7.2	○	○	○	
78	076	皿3	B-3	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体7/12	184	3.5	8.5	○	○	○	一部焼成過多、体部内面に重ね焼きの痕跡
79	074	皿3	B-2	襷瓦盛土	口縁部3/12	(176)	—	—	○	○	○	
80	072	皿3	A-2	2層 黄褐	口縁部4/12	(166)	—	—	○	○	○	眉毛盛りか
81	066	皿2	B-1	室内燃焼空置土 黄褐	底部1/12	—	—	(7.6)	不明	—	○	角高台
82	097	皿2	B-2	襷瓦盛土	底部1/12	—	—	(6.8)	不明	—	—	角高台
83	093	皿1	C-3	1層 灰葉土 (襷瓦倉)	口縁部1/12	(132)	—	—	○	—	—	口縁が外反しない
84	092	皿2	C-3	1層 灰葉土	口縁部1/12	(152)	—	—	○	○	○	口縁が外反しない
85	095	皿2	C-3	3層 黒灰褐 (黒色灰・襷瓦倉)	口縁部1/12	(140)	—	—	○	○	○	口縁が外反しない
86	094	皿3	C-3	3層 暗灰褐	口縁部1/12	(172)	—	—	○	○	○	口縁が外反しない
87	089	皿2	C-3	2層 黄褐	全体5/12	144	2.6	6.6	○	×	○	底部外面に割縁、体部内面に重ね焼きの痕跡
88	088	皿3	C-2	襷瓦盛土	底部6/12	—	—	7.6	○	×	○	底部外面に割縁
89	090	皿2	C-2	2層 黄褐	全体6/12	143	2.9	6.8	○	○	○	一部焼成過多、底部外面に割縁
90	083	皿3	C-3	2層 暗褐	底部11/12	—	—	7.4	○	×	○	底部外面に割縁
91	732	皿3	C-2	2層 黒灰褐	底部2/12	—	—	(7.8)	不明	—	×	底部内面に割縁
92	086	皿1	C-3	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体2/12	(134)	2.6	(6.0)	○	○	○	体部外面に割縁
93	084	皿2	B-3	襷瓦盛土	口縁部1/12	—	—	—	○	—	—	体部外面に割縁
94	087	皿3	C-3	3層 黒灰褐 (黒色灰)	口縁部1/12	(166)	—	—	○	○	—	焼成不足、体部外面に割縁

造物番号	器体番号	器種	グリッド	造構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	施釉	へう附り		備考
										胴部 外面	底部 外面	
95	085	皿2	C-3	2層 黄褐	口縁部 1/12	(14.4)	—	—	○	×	—	一部焼成過多。器体外面に割線
96	733	皿3	B-3	2層 褐色	口縁部 2/12	(17.0)	—	—	不明	×	—	器体外面に割線
97	082	皿3	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰・橙乱倉)	底部 1/12	—	—	(7.6)	○	×	○	器体外面に割線
98	500	皿2	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	底部 5/12	—	—	(7.2)	不明	—	×	底部内面に割書
99	081	皿2	C-3	2層 黄灰褐	底部 10/12	—	—	6.5	○	×	○	底部内面に割書
100	100	投蓋	A-2	2層 黄褐	口縁部 1/12	(14.0)	—	—	○	×	—	胴毛塗りか
101	102	投蓋	C-2	1層 黄葉土	口縁部 2/12	(19.0)	—	—	○	○	○	—
102	101	投蓋	B-4	1層 黄葉土	底部 3/12	—	—	(8.0)	○	○	○	—
103	099	輪花蓋	C-4	2層 橙黄褐	口縁部 3/12	(13.2)	—	—	○	○	—	—
104	098	輪花蓋	C-3	2層 黄褐	口縁部 2/12	(14.3)	—	—	○	—	—	—
105	104	耳蓋	B-2	橙乱盛土	全体 5/12	—	2.9	4.8	×	×	×	—
106	105	耳蓋	B-2	橙乱盛土	全体 3/12	—	2.5	4.8	×	×	×	—
107	110	鉢	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰・橙乱倉)	全体 2/12	(24.8)	—	—	○	○	—	一部焼成やや不足。胴毛塗り
108	111	鉢	C-3	3層 黒色灰(黒色灰)	全体 2/12	(29.0)	(10.3)	(11.4)	○	○	—	一部焼成やや不足。胴毛塗り
109	108	鉢	B-1	橙乱盛土	底部 2/12	—	—	(11.0)	○	○	○	—
110	109	鉢	B-3	1層 黄葉土	底部 4/12	—	—	(13.4)	不明	—	○	—
111	112	片口	C-2	2層 黄褐	口縁部破片	—	—	—	○	—	—	—
112	107	無高台鉢	C-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	全体 3/12	(17.0)	(5.5)	(7.3)	○	○	○	—
113	106	無高台鉢	B-3	1層 黄葉土	全体 3/12	(18.0)	(3.6)	(7.6)	○	×	○	—
114	113	鉢鉢	B-1	室内橙燒黄葉土 黄褐	口縁部 1/12	(14.2)	—	—	○	×	—	—
115	119	長頸瓶	C-3	2層 黄褐	口縁部 2/12	(9.4)	—	—	○	—	—	—
116	117	長頸瓶	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	口縁部 1/12	(12.4)	—	—	○	—	—	—
117	114	長頸瓶	A-2	2層 黄褐	肩部破片	—	—	—	○	○	—	—
118	115	長頸瓶	B-2	3層 黒灰褐(黒色灰)	体部破片	—	—	—	○	○	—	—
119	122	長頸瓶	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	体部破片	—	—	—	○	○	—	—
120	118	長頸瓶	C-2	3層 橙灰黄褐	底部 6/12	—	—	7.6	○	○	○	—
121	116	長頸瓶	B-3	橙乱盛土	底部 3/12	—	—	(8.0)	○	○	○	—
122	127	広口瓶	C-3	3層 橙灰褐	口縁部 10/12	17.2	—	—	○	○	—	—
123	120	広口瓶	A-3	2層 黄褐	口縁部 4/12	(18.4)	—	—	○	—	—	—
124	126	広口瓶	C-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	口縁部 4/12	(17.0)	—	—	○	—	—	—
125	125	広口瓶	C-3	3層 橙灰褐	肩部破片	—	—	—	不明	—	—	—
126	123	手付瓶	B-4	2層 橙黄褐	肩部破片	—	—	—	不明	—	—	—
127	145	広口瓶	C-2	3層 黒灰褐(黒色灰)	全体 3/12	—	—	—	○	○	○	—
128	121	広口瓶	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰・橙乱倉)	体部破片	—	—	—	○	○	○	—
129	124	広口瓶	C-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	体部破片	—	—	—	○	○	—	—
130	148	広口瓶	C-3	1層 黄葉土(橙乱倉)	全体 1/12	—	—	(11.2)	不明	—	○	—
131	137	小瓶	B-3	2層 橙黄褐(橙乱倉)	口縁部 1/12	(5.0)	—	—	○	—	—	—
132	138	小瓶	C-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	底部 7/12	—	—	5.4	○	×	×	—
133	136	小瓶	B-2	橙乱盛土	底部 6/12	—	—	5.3	不明	○	×	—
134	134	小瓶	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	口縁部 10/12	7.0	—	—	○	—	—	—
135	135	小瓶	B-3	3層 黒灰褐(黒色灰)	口縁部 6/12	6.8	—	—	○	—	—	—
136	132	小瓶	B-1	橙乱盛土	底部 4/12	—	—	(6.6)	不明	○	○	—
137	133	小瓶	B-2	1層 黄葉土	底部 2/12	—	—	(12.4)	不明	○	○	—
138	141	短頸壺	C-3	3層 橙灰褐	口縁部 3/12	(9.2)	—	—	○	○	—	—
139	139	短頸壺	B-3	2層 橙黄褐	口縁部 2/12	(12.0)	—	—	○	—	—	—
140	140	短頸壺	C-2	2層 黄褐	口縁部 1/12	(8.2)	—	—	不明	—	—	—
141	142	短頸壺	C-3	3層 橙灰褐	口縁部 2/12	(9.8)	—	—	○	○	—	—

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	施釉	へう附り		備考
										胴部 外面	底部 外面	
142	146	四足壺	B-2	控乱焼土	体部破片	-	-	-	不明	-	-	体部外面に自然輪降灰
143	143	瓶・壺類	A-2	2層 黄褐	底部 10/12	-	-	14.6	○	○	○	体部内外面に自然輪降灰
144	144	瓶・壺類	B-1	控乱焼土	底部 3/12	-	-	(19.0)	○	○	○	体部内外面に自然輪降灰
157	147	取手	B-3	2層 黄褐 (控乱倉)	完形	-	高さ 1.4	-	×	-	-	手付瓶の把手か
146	129	壺・甕類	C-3	2層 黄灰褐	体部破片	-	-	-	不明	○	-	体部外面に自然輪降灰及び刷線
147	128	壺・甕類	B-3	3層 黄灰褐 (黒色灰)	体部破片	-	-	-	不明	○	-	体部外面に自然輪降灰及び刷線
148	130	壺・甕類	C-3	3層 黄灰褐 (黒色灰)	体部破片	-	-	-	不明	○	-	体部外面に自然輪降灰及び刷線
145	131	壺・甕類	C-4	2層 黄灰褐	体部破片	-	-	-	不明	不明	-	体部外面に自然輪降灰及び刷線
149	150	蓋	B-2	控乱焼土	胴小部完形	-	-	-	不明	-	-	甕笠形状のつまみ、体部外面に自然輪降灰
150	149	蓋	A-2	2層 黄褐	全体 3/12	13.6	-	-	○	○	-	短頸蓋に嵌合、胴毛塗り
151	151	蓋	B-2	控乱焼土	口縁部 2/12	(15.7)	-	-	不明	○	-	短頸蓋に嵌合、体部外面に自然輪降灰
152	153	蓋	B-3	2層 黄褐 (控乱倉)	口縁部 2/12	(15.6)	-	-	不明	不明	-	広口瓶に嵌合、体部外面に自然輪降灰
153	152	蓋	B-2	控乱焼土	口縁部 1/12	(15.0)	-	-	○	不明	-	広口瓶に嵌合
154	155	杯	B-3	3層 黄灰褐 (黒色灰・控乱倉)	体部破片	-	-	-	○	不明	-	胴毛塗り、体部内面に自然輪降灰
155	154	磨蝕不明	B-3	2層 黄褐 (控乱倉)	体部破片	-	-	-	-	-	-	体部外面に自然輪降灰
156	156	風字礎	B-2	控乱焼土	全体 3/12	-	-	-	×	○	-	焼成不足
158	164	須恵器 蓋	B-1	室内焼成塗土 黄褐	体部破片	-	-	-	-	-	-	外面にタウキ目あり
159	158	須恵器 瓶	B-3	1層 黄葉土	体部破片	-	-	-	-	-	-	把手部
160	159	須恵器 瓶	全区	表径	底部 1/12	-	-	-	-	○	-	底部に孔あり
161	157	須恵器 磨蝕	全区	表径	底部 4/12	-	-	(9.2)	-	-	×	
162	162	土師器 壺	B-1	控乱焼土	口縁部 1/12	-	-	-	-	-	○	
163	160	家道具 サヤ	B-3	2層 黄灰褐	天井部 1/12	-	-	-	-	-	-	
164	161	家道具 サヤ	全区	表径	底部 1/12	-	-	(21.6)	-	-	-	
165	166	王冠状ノコ	B-2	控乱焼土	全体 1/12	(8.4)	3.55	天井径 (7.3)	-	-	-	体部外面に自然輪降灰
166	167	王冠状ノコ	B-2	控乱焼土	全体 1/12	-	-	天井径 (6.9)	-	-	-	体部外面に自然輪降灰
167	171	家道具類	C-2	控乱焼土	全体 1/12	-	-	(8.0)	-	-	×	内縁状、体部内面に自然輪降灰、底部外面に糸割線
168	175	熨合	全区	表径	完形	長さ 12.3	幅 11.8	高さ 8.0	-	-	-	
169	174	熨合	全区	表径	全体 11/12	長さ (14.0)	幅 17.8	高さ 10.6	-	-	-	
170	176	熨合	全区	表径	完形	長さ 12.3	幅 12.9	高さ 6.0	-	-	-	
171	172	障衣壁	B-3	3層 黄灰褐 (黒色灰・控乱倉)	ほぼ完形	長さ 21.0	幅 20.3	高さ 12.0	-	-	-	
172	173	障衣壁	C-3	2層 黄褐	全体 9/12	長さ 26.3	幅 18.5	高さ 8.3	-	-	-	
173	168	家道具類	B-2	控乱焼土	-	-	-	-	-	-	-	自然輪の巻れ下がりか

第6表 大針8号窯 出土遺物観察表

度量値の単位はcm。()内は推定値

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切値	板目値	
174	864	碗	S-4	室内焼成塗土 黄赤褐	全体 6/12	(15.6)	5.8	6.6	○	○	○	焼成不足
175	869	碗	S-4	室内焼成塗土下層 黄赤褐 (分楯付付)	全体 6/12	(15.4)	6.0	6.8	○	○	○	焼成不足
176	867	碗	S-4	室内焼成塗土下層 黄赤褐 (遺物集中)	全体 7/12	14.4	5.7	6.4	○	○	○	焼成不足
177	865	碗	S-4	室内焼成塗土下層 黄赤褐 (遺物集中)	全体 11/12	14.8	6.3	6.2	○	○	○	焼成不足
178	866	碗	S-4	室内焼成塗土下層 黄赤褐 (遺物集中)	全体 11/12	15.4	6.7	6.6	○	○	○	焼成不足
179	868	碗	S-4	室内焼成塗土下層 黄赤褐 (遺物集中)	全体 6/12	(14.8)	5.8	6.4	○	○	○	焼成不足
180	861	碗	S-3	室内焼成部 床土 遺物①	全体 6/12	15.4	5.4	6.6	○	○	○	焼成不足
181	862	碗	S-3	室内焼成部 床土 遺物②	完形	15.4	5.6	6.4	○	○	×	焼成不足
182	863	碗	S-3	室内焼成部 床土 遺物③	全体 3/12	(14.8)	6.1	6.4	○	○	○	焼成不足
183	868	碗	S-5	SH2 塗土 黒色灰	全体 1/12	(14.2)	5.0	(4.2)	×	×	×	体部内面に自然輪降灰及び重ね焼きの痕跡、釜み大
184	869	碗	S-5	SH2 塗土 黒色灰	底部 1/12	-	-	(8.2)	×	○	×	重ね焼きの痕跡

造作番号	躯体番号	器種	グリッド	造構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
185	890	碗	S-5	SK2 覆土 黒色灰	底部3/12	—	—	(5.4)	×	○	○	体部内面に自然輪降灰及び重ね焼きの痕跡か
186	897	碗	Q-5	SK3 覆土 透黄褐	底部11/12	—	—	4.8	×	○	○	
187	896	碗	Q-7	1層 灰業土	全体7/12	14.8	5.8	5.8	×	○	×	一部焼成過多
188	897	碗	Q-7	1層 灰業土	全体5/12	(14.2)	5.5	6.2	×	○	不明	体部内面に自然輪降灰及びボロ付着
189	914	碗	R-8	1層 灰業土 (橙乱灰)	全体2/12	(14.9)	5.8	5.4	×	○	×	体部内面に自然輪降灰及びボロ付着
190	892	碗	Q-6	2層 透黄褐	全体7/12	14.2	5.8	5.2	×	○	×	体部内面に自然輪降灰
191	893	碗	Q-6	2層 透黄褐	全体5/12	(14.6)	6.0	5.2	×	○	×	焼成やや不足、重ね焼きの痕跡
192	898	碗	R-6	2層 透黄褐	全体4/12	(14.8)	6.0	6.2	×	○	×	焼成不足
193	921	碗	T-7	2層 透黄褐	全体4/12	(13.9)	5.8	6.0	×	○	×	一部焼成過多か
194	908	碗	R-7	北3層中層 黒灰褐 (黒色灰)	全体4/12	(14.6)	5.8	5.6	×	○	○	焼成不足
195	909	碗	R-7	南3層中層 黒灰褐 (黒色灰)	全体11/12	14.2	5.0	6.0	○	○	○	
196	910	碗	R-7	南3層中層 黒灰褐 (黒色灰)	全体7/12	13.4	5.9	5.5	×	○	○	一部焼成過多、体部内面に自然輪降灰、歪み大
197	915	碗	S-5	3層 透黄褐 (灰口煎)	全体3/12	(13.5)	4.7	5.2	○	○	×	焼成やや不足、体部内面に自然輪降灰
198	916	碗	S-5	3層 透黄褐 (灰口煎・灰樹皮下)	全体10/12	13.7	5.4	5.8	○	○	○	焼成やや不足、歪み大
199	894	碗	Q-6	3層 黒灰褐	全体8/12	14.0	5.8	5.0	×	○	×	体部内面に自然輪降灰及びボロ付着
200	895	碗	Q-6	3層 黒灰褐	全体4/12	(15.2)	5.6	6.2	○	○	不明	体部内面に自然輪降灰及び重ね焼きの痕跡
201	902	碗	R-6	3層 黄赤褐	全体9/12	14.5	6.4	6.2	×	○	○	焼成不足
202	903	碗	R-6	3層 黄赤褐	全体5/12	(14.4)	5.9	5.4	×	○	不明	焼成不足
203	899	碗	R-6	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体11/12	13.9	5.7	5.8	×	○	○	
204	900	碗	R-6	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体10/12	14.4	6.2	5.6	×	○	○	
205	901	碗	R-6	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体8/12	14.4	5.9	6.0	○	○	○	
206	906	碗	R-7	3層 透黄褐 (焼土澁)	全体10/12	14.0	5.8	5.2	×	○	×	体部内面に自然輪降灰
207	907	碗	R-7	3層 透黄褐 (焼土澁)	全体7/12	(14.0)	6.1	5.8	×	○	×	焼成やや不足
208	904	碗	R-7	3層 透黄褐	全体8/12	15.0	6.0	6.2	×	○	×	一部焼成やや不足、歪み大
209	905	碗	R-7	3層 透黄褐	全体7/12	13.8	5.4	5.4	×	○	×	体部内面に自然輪降灰
210	911	碗	R-7	南3層下層 黄赤褐	全体10/12	14.6	6.0	5.6	×	○	×	
211	912	碗	R-7	南3層下層 黄赤褐	全体7/12	(15.0)	6.2	5.4	×	○	不明	
212	913	碗	R-7	南3層下層 黄赤褐	全体6/12	(12.8)	5.2	4.8	×	○	×	
213	919	碗	T-6	3層 透黄褐	全体7/12	13.4	5.4	5.0	×	○	×	体部内面に自然輪降灰及び重ね焼きの痕跡、歪み大
214	922	碗	T-7	3層 透黄褐	全体7/12	(13.8)	5.6	5.0	×	○	×	体部内面に自然輪降灰
215	923	碗	T-7	3層 透黄褐 (橙乱灰)	全体4/12	(15.4)	5.7	6.0	×	○	○	体部内面に自然輪降灰
216	917	碗	S-6	3層最下 透黄褐 (黒色灰)	全体6/12	(13.6)	5.7	5.6	×	○	×	体部内面に自然輪降灰
217	918	碗	S-7	3層最下 透黄褐 (黒色灰)	全体6/12	(14.2)	6.0	6.2	×	○	×	一部焼成過多、体部内面に自然輪降灰及びボロ付着、歪み大
218	920	碗	T-6	3層最下 透黄褐 (黒色灰)	全体3/12	(14.5)	6.0	5.9	×	○	○	体部内面に自然輪降灰
219	976	碗	Q-6	2層 透黄褐	底部6/12	—	—	5.4	×	○	×	高台縁部に毛髪痕なし、体部外面に自然輪降灰及びボロ付着
220	978	碗	T-6	2層 透黄褐	底部5/12	—	—	(6.2)	×	不明	不明	焼成不足、高台縁部に毛髪痕なし、体部内面に自然輪降灰
221	977	碗	R-7	3層 透黄褐	底部2/12	—	—	(6.0)	不明	不明	不明	高台縁部に毛髪痕なし、体部外面に自然輪降灰
222	980	碗	R-7	3層 透黄褐	全体5/12	(12.2)	5.1	5.4	×	○	×	焼成不足
223	979	碗	Q-6	2層 透黄褐	全体5/12	(12.4)	4.8	5.2	×	○	×	体部外面に自然輪降灰及びボロ付着、歪み大
224	935	碗	Q-6	3層 黒灰褐	全体8/12	(16.2)	6.5	5.9	×	○	不明	体部内外面に自然輪降灰及びボロ付着、重ね焼きの痕跡
225	870	無高台碗	S-3	室内焼成安置土下層 黄赤褐	底部7/12	—	—	7.2	○	○	○	焼成不足
226	872	無高台碗	S-3-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐 (遺物集中)	全体3/12	(15.3)	5.5	7.2	○	○	○	焼成不足
227	933	無高台碗	T-7	1層 灰業土 (橙乱灰)	全体3/12	(13.4)	5.6	6.0	×	○	×	体部内面に自然輪降灰
228	928	無高台碗	R-6	橙乱土	全体6/12	(13.3)	5.4	5.8	×	○	○	体部内面に自然輪降灰及びボロ付着
229	931	無高台碗	S-7	橙乱土	全体3/12	(14.3)	5.2	6.8	×	○	○	焼成不足
230	924	無高台碗	Q-6	2層 透黄褐	全体3/12	(13.6)	5.8	5.8	×	○	×	体部内外面に自然輪降灰
231	927	無高台碗	R-6	2層 透黄褐	全体4/12	(15.4)	4.9	6.5	不明	○	○	体部内面に自然輪降灰及びボロ付着

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
232	925	無高台碗	Q-6	2層 浅黄褐(橙乱色)	全体2/12	(146)	5.2	(6.4)	不明	○	○	焼成不足
233	934	無高台碗	T-7	2層 黄灰褐	底部完形	—	—	6.0	×	○	○	体部内面に自然輪降灰及び小片燻着
234	930	無高台碗	S-6	1層 黄灰土・3層 黄赤褐	全体5/12	(146)	5.7	6.2	×	○	○	焼成やや不足、体部外面に自然輪降灰及び破口付着、壺み大
235	929	無高台碗	R-7	3層 暗黄褐	全体5/12	(133)	5.4	5.2	×	○	×	体部内面に自然輪降灰及び小破片・破口付着、壺み大
236	932	無高台碗	T-6	3層 暗黄褐	底部完形	—	—	6.2	×	○	×	体部内面に自然輪降灰
237	926	無高台碗	R-5	3層 暗黄褐	全体1/12	(162)	5.6	(6.4)	×	○	○	焼成不足
238	982	穿孔碗	Q-6	2層 浅黄褐(橙乱色)	底部完形	—	—	5.9	×	○	×	体部に穿孔あり、体部内面に自然輪降灰及び破口付着
239	981	穿孔碗	Q-6	2層 浅黄褐	底部11/12	—	—	6.6	○	○	○	体部に穿孔あり、一部焼成やや不足、体部内面に自然輪降灰
240	871	穿孔無高台碗	S-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐(遺物集中)	全体3/12	(150)	5.1	6.6	○	○	○	底部に穿孔あり、焼成不足
241	983	刷縁碗	R-7	南3層中層 黄灰褐(黒色灰)	全体1/12	—	—	—	不明	不明	不明	体部外面に刷縁、体部内面に自然輪降灰
242	873	小皿	S-3	室内焼成安置土下層 黄赤褐	全体5/12	(92)	2.2	4.6	○	○	○	焼成不足
243	874	小皿	S-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐(分層柱付着)	全体4/12	(80)	2.5	4.2	×	○	×	焼成不足
244	875	小皿	S-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐(分層柱付着)	全体7/12	8.4	2.4	4.2	○	○	×	焼成不足
245	876	小皿	S-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐(遺物集中)	全体7/12	8.4	2.1	4.2	○	○	○	焼成不足
246	877	小皿	S-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐(遺物集中)	全体6/12	(8.6)	2.3	4.3	○	○	○	焼成不足
247	878	小皿	S-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐(遺物集中)	全体6/12	8.6	2.4	4.4	○	○	×	焼成不足
248	879	小皿	S-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐(遺物集中)	全体10/12	8.5	2.5	4.5	○	○	○	焼成不足
249	880	小皿	S-4	室内焼成安置土下層 黄赤褐(遺物集中)	全体6/12	(8.3)	2.8	4.2	○	○	○	焼成不足
250	882	小皿	S-5	室内焼成安置土下層 黄灰褐	全体9/12	8.9	2.4	5.3	○	○	○	焼成不足、壺み大
251	883	小皿	S-5	室内焼成安置土下層 黄灰褐(虎遣)	全体4/12	(8.4)	2.7	4.2	○	○	○	焼成不足
252	884	小皿	S-5	室内焼成安置土下層 黄灰褐(虎遣)	全体9/12	8.7	2.4	4.1	○	○	○	焼成不足
253	881	小皿	S-5	室内焼成安置土下層 黄赤褐(鹿・粘土)	全体9/12	8.4	2.8	4.2	○	○	×	焼成不足
254	891	小皿	S-5	SK2 覆土上面 黄灰褐	全体4/12	(8.6)	2.1	4.0	×	○	○	体部内面に自然輪降灰及び小破片・破口付着、壺み大
255	968	小皿	全区	表採	全体9/12	8.0	1.7	4.9	不明	○	×	一部自然輪降灰
256	942	小皿	Q-7	全層一括	全体8/12	(8.3)	2.3	4.0	×	○	×	一部自然輪降灰、壺み大
257	936	小皿	Q-6	1層 黄灰土	全体10/12	8.0	1.7	4.4	○	○	○	体部内面に自然輪降灰
258	965	小皿	T-7	1層 黄灰土(橙乱色)	全体9/12	(8.8)	2.2	3.7	○	○	○	焼成不足、壺み大
259	961	小皿	T-6	1～2層一括	全体2/12	(8.4)	2.0	3.2	○	○	×	
260	937	小皿	Q-6	2層 浅黄褐	全体8/12	7.7	2.2	3.8	×	○	×	一部焼成過多
261	938	小皿	Q-6	2層 浅黄褐	全体4/12	(7.8)	2.2	3.2	×	○	×	
262	943	小皿	R-6	2層 浅黄褐	完形	8.8	2.4	3.7	×	○	○	壺み大
263	944	小皿	R-6	2層 暗黄褐	全体10/12	8.0	1.7	4.6	○	○	○	
264	953	小皿	R-7	北3層中層 黄灰褐(黒色灰)	全体9/12	8.2	2.1	3.6	×	○	○	体部内面に自然輪降灰
265	955	小皿	S-5	3層 暗黄灰褐(梵口前・虎脚或下)	全体3/12	(8.2)	2.2	4.4	○	○	○	体部外面に自然輪降灰及び破口付着
266	939	小皿	Q-6	3層 黄灰褐	全体10/12	8.0	1.9	4.8	○	○	×	体部外面に小片燻着、壺み大
267	940	小皿	Q-6	3層 黄灰褐	全体6/12	8.2	1.8	4.8	×	○	不明	体部外面に自然輪降灰
268	946	小皿	R-6	3層 黄灰褐(黒色灰)	全体11/12	8.4	1.8	3.8	○	○	○	体部内面に自然輪降灰及び小片燻着
269	947	小皿	R-6	3層 黄灰褐(黒色灰)	全体10/12	8.6	2.0	3.9	○	○	×	焼成やや不足、体部内面に自然輪降灰
270	948	小皿	R-6	3層 黄灰褐(黒色灰)	全体9/12	7.9	2.1	3.4	×	○	×	一部焼成やや不足
271	949	小皿	R-6	3層 黄灰褐(黒色灰)	全体7/12	7.8	2.0	4.0	不明	○	×	焼成不足、体部内面に自然輪降灰
272	960	小皿	R-6	3層 黄灰褐(黒色灰)	全体6/12	(9.2)	2.5	4.3	○	○	×	焼成不足
273	961	小皿	R-6	3層 黄灰褐(黒色灰)	全体7/12	8.0	2.1	3.5	×	○	×	焼成不足、壺み大
274	962	小皿	T-6	3層 灰黄褐(黒色灰)	全体4/12	(8.0)	1.7	3.8	×	○	○	
275	963	小皿	T-6	3層 灰黄褐(黒色灰)	全体5/12	(8.0)	2.1	4.2	○	○	○	体部内面に自然輪降灰
276	962	小皿	R-7	3層 暗黄褐(黄土型)	全体10/12	8.2	2.1	3.5	○	○	○	
277	966	小皿	S-6	3層 赤黄褐(黄土型)	全体10/12	7.9	2.2	3.4	×	○	×	一部自然輪降灰、壺み大
278	945	小皿	R-6	3層 黄赤褐	全体9/12	8.5	2.8	4.0	×	○	×	焼成不足、一部自然輪降灰

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
279	958	小皿	S-7	3層 黄赤褐	全体 8/12	8.8	2.0	3.8	×	○	×	歪み大
280	941	小皿	Q-7	3層 黄褐	全体 5/12	(8.5)	2.1	3.8	×	○	×	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着
281	959	小皿	S-7	3層 黄褐	全体 10/12	7.8	1.5	3.0	×	○	×	底部内面に自然輪降灰、歪み大
282	960	小皿	S-7	3層 黄褐	全体 8/12	8.8	2.4	3.3	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
283	964	小皿	T-6	3層 黄褐	底部 5/12	—	—	(3.0)	×	○	×	
284	967	小皿	T-7	3層 黄下 黒灰褐 (黒色灰)	全体 5/12	(8.0)	2.0	3.6	○	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
285	984	平高台皿	Q-6	撥灰塗土	全体 5/12	(7.8)	2.6	3.3	○	○	×	焼成不足
286	986	平高台皿	T-6	1～2層一括	底部 11/12	—	—	4.6	○	○	○	
287	987	大皿	R-7	3層 黄褐	全体 1/12	(19.8)	3.1	(9.5)	不明	○	○	一部焼成過多、底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
288	988	鉢	Q-7	全層一括	全体 5/12	(16.9)	6.8	6.2	×	○	×	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着
289	989	鉢	S-7	3層 黄褐 (撥灰合)	全体 4/12	(17.2)	7.3	7.0	×	○	×	焼成不足
290	990	無高台鉢	R-7	3層 黄褐	全体 7/12	(14.6)	5.6	7.0	×	○	×	底部外面に沈線
291	993	片口鉢	T-7	1層 黄赤土 (撥灰合)	全体 7/12	(18.6)	7.3	7.0	×	○	○	一部焼成過多、底部内面に自然輪降灰
292	991	片口鉢	S-7	3層 黄赤褐	全体 1/12	(17.8)	5.7	(6.2)	不明	不明	不明	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着、歪み大
293	992	片口鉢	T-6	3層 灰黒褐 (黒色灰)	全体 1/12	—	—	—	不明	不明	不明	底部内面に自然輪降灰
294	994	仏供	T-6	3層 灰黒褐 (黒色灰)	全体 6/12	(16.2)	6.1	7.6	×	○	○	底部内面に自然輪降灰及び歪む焼きの痕跡
295	995	六器	R-6	1層 黄赤土 (撥灰合)	全体 5/12	(11.2)	3.3	(4.8)	○	○	×	
296	996	六器	T-7	3層 灰褐	全体 6/12	(11.5)	3.8	5.1	不明	○	×	
297	999	須恵器 蓋	Q-7	2層 黄褐	全体 1/12	—	—	—	—	—	—	底部外面に帯状の刻線ありほぼ90度目、自然輪降灰及び小片付着
298	1000	須恵器 蓋	R-6	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体 1/12	—	—	21.0	—	—	—	底部に凹孔あり
299	885	甕道具蓋 A	S-5	室内焼成室壁土下層 黄灰褐 (黄土)	全体 5/12	(14.3)	5.3	天井径 6.6	○	○	○	焼成不足、底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
300	886	甕道具蓋 A	S-5	室内焼成室壁土下層 黄褐 (灰・粘土)	全体 5/12	(13.8)	5.4	天井径 6.0	○	×	不明	焼成不足、底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
301	870	甕道具蓋 A	R-6	2層 黄褐	全体 3/12	(14.2)	5.9	天井径 5.4	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
302	871	甕道具蓋 A	R-6	2層 黄褐	全体 3/12	(13.2)	5.6	天井径 5.5	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着、歪み大
303	873	甕道具蓋 A	R-7	3層 黄褐	全体 4/12	(15.4)	5.1	天井径 6.0	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
304	969	甕道具蓋 A	Q-6	3層 黒灰褐	全体 5/12	(14.9)	5.7	天井径 5.9	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及び小片・ボロ付着
305	972	甕道具蓋 A	R-6	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体 5/12	(13.8)	5.7	天井径 6.2	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
306	975	甕道具蓋 B	R-6	3層 黄赤褐	全体 3/12	(15.6)	5.1	天井径 (6.2)	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着、歪み大
307	974	甕道具蓋 B	Q-6	3層 黒灰褐	全体 2/12	(14.8)	5.0	天井径 6.0	○	○	○	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
308	997	甕道具蓋 A	Q-6	3層 黒灰褐	全体 9/12	12.0	4.7	天井径 5.2	○	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
309	985	甕道具蓋 C	R-6	3層 黒灰褐 (黒色灰)	全体 9/12	10.4	2.8	天井径 6.0	○	×	○	底部内外面に自然輪降灰及びボロ付着、歪み大
310	966	甕道具蓋 C	T-7	2層 黄灰褐	全体 11/12	6.2	1.9	天井径 3.6	×	○	×	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着、歪み大
311	954	甕道具蓋 C	R-7	南3層下層 黄赤褐	完形	9.2	2.0	天井径 5.4	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
312	957	甕道具蓋 C	S-6	3層 灰黒褐 (黒色灰)	全体 10/12	7.6	1.6	天井径 4.2	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着、歪み大
313	998	甕道具蓋 D	Q-6	3層 黒灰褐	全体 6/12	7.4	4.4	—	—	—	—	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
314	1001	焼台	S-3・4	室内焼成室壁土	全体 11/12	長さ 13.5	幅 7.1	—	—	—	—	
315	1002	焼台	S-3・4	室内焼成室壁土	全体 11/12	長さ 14.1	幅 11.2	—	—	—	—	

第7表 大針9号窯 出土遺物観察表

法量値の単位はcm。()内は推定値

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
316	1011	碗	V-2	室内焼成室壁土 黄赤褐	全体 8/12	15.5	5.8	6.3	×	○	×	焼成不足
317	1012	碗	V-3	室内焼成室壁土 黄赤褐	全体 11/12	15.2	5.4	6.0	×	○	×	焼成不足
318	1020	碗	V-2・3	室内焼成室壁土 黄赤褐	全体 9/12	14.3	5.9	5.5	×	○	×	焼成不足
319	1021	碗	V-2・3	室内焼成室壁土 黄赤褐	全体 9/12	14.3	5.9	6.1	×	○	○	焼成不足
320	1022	碗	V-4	室内焼成室壁土 黄赤褐	全体 10/12	15.4	5.7	6.4	×	○	○	焼成不足
321	1013	碗	V-3	室内焼成室壁土 黄赤褐	完形	15.2	5.8	5.2	×	○	×	

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
322	1014	碗	V-3	室内焼成室覆土 繪黄赤褐	全体 11/12	14.8	5.8	5.8	×	○	×	焼成やや不足
323	1015	碗	V-3	室内焼成室覆土 繪黄赤褐	全体 8/12	15.0	5.6	5.8	×	○	×	焼成不足
324	1016	碗	V-3	室内焼成室覆土 繪黄赤褐	全体 7/12	14.8	5.3	5.6	○	○	○	焼成不足
325	1017	碗	V-3	室内焼成室覆土 床上	全体 10/12	15.2	5.8	5.4	×	○	○	焼成不足
326	1018	碗	V-3	室内焼成室覆土 床上	全体 9/12	14.5	5.6	5.8	×	○	×	焼成不足
327	1019	碗	V-3	室内焼成室覆土 床上	全体 6/12	15.2	5.6	6.2	×	○	○	焼成不足
328	1023	碗	V-4	室内焼成室覆土 黄赤褐	全体 11/12	15.0	5.4	5.7	×	○	×	焼成不足
329	1026	碗	V-4	室内焼成室覆土 黄赤褐	底部 6/12	—	—	6.4	○	○	○	焼成不足
330	1024	碗	V-4	室内焼成室覆土 黄赤褐	全体 7/12	14.4	5.5	5.8	×	○	×	焼成やや不足
331	1027	碗	V-4	室内焼成室覆土 床面上	全体 10/12	14.8	5.3	6.0	×	○	○	焼成過多
332	1029	碗	V-4	室内焼成室覆土 黄赤褐	全体 6/12	14.8	6.3	6.6	○	○	○	焼成不足
333	1029	碗	V-4	室内焼成室覆土 黄赤褐	全体 4/12	(15.6)	5.6	6.7	○	○	○	焼成不足
334	1054	碗	V-4	2層 繪黄灰褐 (SK1 上面)	全体 7/12	(15.2)	5.7	6.0	×	○	×	焼成不足
335	1055	碗	V-4	2層 繪黄灰褐 (SK1 上面)	全体 4/12	(15.4)	5.5	5.4	×	○	○	焼成不足
336	1056	碗	V-4	2層 繪黄灰褐 (SK1 上面)	底部完形	—	—	5.2	○	○	×	
337	1057	碗	W-4	SK1 覆土 黒褐 (黒色灰)	全体 2/12	(13.0)	5.7	6.2	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着。歪み大
338	1058	碗	W-4	SK1 覆土 黒褐 (黒色灰)	底部 6/12	—	—	5.8	×	○	○	
339	1060	碗	V-4	2層 繪黄灰褐	全体 7/12	14.8	5.8	5.8	×	○	×	焼成不足
340	1062	碗	V-6	2層 繪黄褐	全体 4/12	(15.4)	5.5	5.8	×	○	○	焼成不足
341	1069	碗	W-5	2層 黄灰褐	全体 5/12	(15.0)	5.1	4.8	×	不明	不明	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着
342	1070	碗	W-5	2層 黄灰褐	全体 5/12	(14.6)	5.5	5.4	×	○	×	
343	1061	碗	V-5	2層 淡黄褐色	全体 4/12	(15.6)	5.7	5.4	×	○	×	焼成不足
344	1071	碗	W-5	2層 黒褐 (黒灰・焼土混)	全体 4/12	(15.7)	5.2	5.8	×	○	×	一部自然輪降灰
345	1074	碗	W-6	2層下半 黄褐	全体 5/12	(14.8)	6.0	5.8	×	○	○	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着
346	1067	碗	V-6	3層 繪黄赤褐	全体 5/12	(14.6)	5.4	6.0	×	○	○	
347	1066	碗	V-6	3層 繪褐	全体 5/12	(14.9)	5.9	5.5	×	○	○	底部内面に自然輪降灰
348	1068	碗	V-6	3層下半 繪黄灰褐砂	全体 3/12	(14.2)	5.1	5.0	×	○	×	底部内面に自然輪降灰
349	1063	碗	V-6	3層 黄赤褐	全体 7/12	15.2	5.9	5.4	×	○	×	焼成不足
350	1064	碗	V-6	3層 黄赤褐	全体 7/12	14.8	5.6	6.0	×	○	×	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着
351	1065	碗	V-6	3層 黄赤褐	全体 5/12	(15.2)	5.1	5.1	×	○	×	焼成不足
352	1075	碗	W-6	3層 黄赤褐 (焼土混)	全体 4/12	(15.6)	5.4	5.7	×	○	×	焼成不足
353	1072	碗	W-5	3層 繪灰褐 (灰混)	全体 10/12	15.4	5.5	6.0	×	○	○	焼成やや不足
354	1073	碗	W-5	3層 繪灰褐 (灰混)	全体 5/12	15.0	5.5	5.3	×	○	×	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着
355	1076	碗	W-6	3層 繪灰褐 (灰混)	全体 10/12	15.2	5.6	5.5	×	○	×	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着
356	1077	碗	W-6	3層 繪灰褐 (灰混)	全体 9/12	14.3	5.8	5.8	×	○	×	一部焼成過多。底部内面に自然輪降灰及びボロ付着。歪み大
357	1078	碗	W-6	3層 繪灰褐 (灰混)	全体 8/12	15.7	5.3	6.2	×	○	×	一部焼成過多
358	6796	碗	W-6	3層 繪灰褐 (灰混)	底部 11/12	—	—	5.4	×	○	不明	焼成不足。底部外面に割線模様あり
359	1114	碗	V-6	3層 繪褐	全体 4/12	(15.1)	5.5	5.5	×	○	○	高台縁部に毛土残存なし
360	1031	無高台碗	V-3	室内焼成室覆土 繪黄褐	全体 5/12	(14.8)	5.0	6.0	×	○	×	
361	1032	無高台碗	V-2・3	室内焼成室覆土 黄赤褐	底部完形	—	—	6.6	×	○	○	
362	1030	無高台碗	V-3	室内焼成室覆土 繪黄赤褐	全体 6/12	(15.2)	4.6	6.0	×	○	×	
363	1033	無高台碗	V-4	室内焼成室覆土 黄赤褐	全体 6/12	(14.8)	4.8	6.4	×	○	×	底部外面に自然輪降灰及びボロ付着
364	1080	無高台碗	V-7	1～2層一部	底部 8/12	—	—	5.7	×	○	×	
365	1081	無高台碗	W-6	2層 黄灰褐	底部完形	—	—	5.5	×	○	○	底部内面に自然輪降灰及びボロ付着
366	1079	無高台碗	V-6	3層 繪黄赤褐	底部完形	—	—	5.9	×	○	×	
367	1082	無高台碗	W-6	3層 繪灰褐 (灰・焼土混)	底部 9/12	—	—	5.6	×	○	×	
368	1110	穿孔碗	W-5	1層 黄赤土	底部 11/12	—	—	5.4	×	○	×	焼成やや不足。底部外面に自然輪降灰及びボロ付着

遺物番号	器体番号	器種	グリップ	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
369	1111	穿孔碗	W-6	3層 焼灰層 (灰塗)	底部完形	—	—	5.0	○	○	×	
370	1113	穿孔碗	W-6	3層 焼灰層 (灰・焼土塗)	全体4/12	—	—	(5.8)	不明	○	×	
371	1112	穿孔碗	W-6	3層 焼灰層 (灰・焼土塗)	底部完形	—	—	5.8	×	○	○	
372	1027	小皿	V-3	室内焼成室置土 焼黄釉	全体9/12	8.0	2.1	4.3	×	○	×	焼成不足
373	1034	小皿	V-3	室内焼成室置土 黄赤釉	完形	8.2	2.0	4.6	×	○	×	
374	1035	小皿	V-3	室内焼成室置土 黄赤釉	完形	8.2	2.2	4.7	×	○	×	
375	1036	小皿	V-3	室内焼成室置土 黄赤釉	全体10/12	8.2	2.0	4.3	×	○	×	焼成不足
376	1042	小皿	V-4	室内焼成室置土 黄赤釉	全体6/12	(8.6)	2.0	4.3	×	○	×	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着
377	1038	小皿	V-3	室内焼成室置土 黄赤釉 床 上	全体10/12	8.0	2.1	4.1	×	○	×	焼成やや不足
378	1039	小皿	V-3	室内焼成室置土 床 上	全体11/12	8.4	2.1	4.3	×	○	×	一部焼成不足
379	1040	小皿	V-3	室内焼成室置土 床 上	全体8/12	8.0	2.1	4.4	×	○	×	焼成やや不足、底部内面に自然釉降灰
380	1041	小皿	V-3	室内焼成室置土 床 上	全体4/12	(8.2)	1.8	4.0	×	○	×	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着
381	1043	小皿	V-4	室内焼成室置土 黄赤釉	全体11/12	8.8	2.0	4.8	○	○	×	底部内面に自然釉降灰
382	1044	小皿	V-4	室内焼成室置土 黄赤釉	全体11/12	7.7	1.7	4.6	×	○	×	
383	1045	小皿	V-4	室内焼成室置土 黄赤釉	全体11/12	8.2	1.7	4.0	×	○	×	
384	1046	小皿	V-4	室内焼成室置土 黄赤釉	全体11/12	8.2	1.9	4.4	×	○	○	
385	1047	小皿	V-4	室内焼成室置土 黄赤釉	全体11/12	8.2	1.6	4.0	×	○	×	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着
386	1048	小皿	V-4	室内焼成室置土 黄赤釉 床 上	全体10/12	8.0	2.0	4.6	×	○	○	
387	1059	小皿	V-4	2層 焼黄灰層 (SK1 上面)	底部6/12	—	—	4.0	×	○	×	
388	1083	小皿	V-6	1層 黄赤土	全体9/12	8.2	2.3	4.6	○	○	×	焼成やや不足、歪み大
389	1084	小皿	V-6	2層 焼黄釉	全体10/12	8.3	1.8	4.3	×	○	×	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着
390	1094	小皿	W-5	2層 黄灰層	全体9/12	8.2	2.2	4.4	×	○	×	
391	1098	小皿	W-6	2層 黄灰層	全体6/12	8.2	2.0	4.3	×	○	×	焼成やや不足
392	1104	小皿	X-5	2層 黄灰層	全体6/12	8.4	2.0	4.0	×	○	×	焼成やや不足
393	1099	小皿	W-6	2層下半 黄釉	全体4/12	8.3	2.1	4.1	×	○	○	
394	1091	小皿	V-6	3層 焼黄赤釉	全体7/12	8.2	2.0	4.2	×	○	×	
395	1088	小皿	V-6	3層 焼釉	全体11/12	8.4	2.0	4.2	×	○	×	底部内面に自然釉降灰
396	1089	小皿	V-6	3層 焼釉	全体8/12	8.8	2.1	4.8	×	○	×	焼成やや不足
397	1090	小皿	V-6	3層 焼釉	全体7/12	8.4	1.8	4.4	×	○	×	
398	1093	小皿	V-7	3層 焼釉	全体9/12	8.2	2.1	4.0	×	○	○	
399	1092	小皿	V-6	3層下半 焼黄灰層砂	全体6/12	8.2	1.9	4.2	×	○	×	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着、歪み大
400	1085	小皿	V-6	3層 黄赤釉	完形	8.5	1.9	4.6	不明	○	×	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着
401	1086	小皿	V-6	3層 黄赤釉	全体10/12	8.4	2.1	4.5	×	○	○	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着
402	1087	小皿	V-6	3層 黄赤釉	全体7/12	8.8	2.3	4.3	×	○	×	
403	1095	小皿	W-5	3層 黄釉 (黄灰・焼土塗)	全体6/12	8.4	1.9	4.8	×	○	×	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着
404	1096	小皿	W-5	3層 焼灰層 (灰塗)	全体10/12	8.2	1.9	4.4	×	○	○	底部内面に自然釉降灰及びボロ付着
405	1097	小皿	W-5	3層 焼灰層 (灰塗)	全体6/12	8.1	2.0	4.2	×	○	○	
406	1100	小皿	W-6	3層 焼灰層 (灰塗)	全体11/12	8.4	2.1	4.6	×	○	○	底部内面に自然釉降灰
407	1101	小皿	W-6	3層 焼灰層 (灰塗)	全体7/12	8.6	2.1	4.6	×	○	○	
408	1102	小皿	W-6	3層 焼灰層 (灰・焼土塗)	全体10/12	8.2	2.0	4.5	×	○	○	一部焼成過多
409	1103	小皿	W-6	3層 焼灰層 (灰・焼土塗)	全体6/12	8.2	1.8	4.1	×	○	×	
410	1118	平高台皿	V-3	室内焼成室置土 焼黄赤釉	全体6/12	9.0	3.4	4.3	×	○	○	
411	1119	平高台皿	V-4	室内焼成室置土 黄赤釉	完形	9.0	2.7	4.2	×	○	○	
412	1120	平高台皿	V-7	3層 焼釉	全体5/12	(8.6)	3.3	4.6	×	○	×	一部焼成過多
413	1115	大皿	V-3	室内焼成室置土 焼黄赤釉	全体1/12	(12.4)	—	—	不明	不明	不明	底部外面に自然釉降灰及び小片・ボロ付着
414	1116	大皿	V-3	室内焼成室置土 床 上	全体1/12	(12.0)	—	—	不明	不明	不明	底部外面に自然釉降灰
415	1117	大皿	W-5	1層 黄赤土	全体1/12	(15.6)	—	—	不明	不明	不明	底部内面に自然釉降灰

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
416	1123	鉢	V-3	室内焼成室置土 床上	全体 6/12	15.9	8.0	5.5	×	○	×	高台基部に毛磁痕なし。底部外面に自然胎降灰
417	1124	無高台鉢	V-6	3層 赭黄赤褐	底部 1/12	—	—	6.0	不明	○	×	体内部面に自然胎降灰
418	1125	片口鉢	V-3	室内焼成室置土 赭黄赤褐	全体 11/12	15.7	6.7	5.8	×	○	×	高台基部に毛磁痕なし
419	1126	片口鉢	W-6	2層 黄灰褐	全体 1/12	(16.3)	—	—	不明	不明	不明	
420	1121	仏供	V-6	3層 赭褐	底部 11/12	—	—	4.6	×	○	○	
421	1122	小杯	V-4	室内焼成室置土 黄赤褐	全体 2/12	(7.0)	—	—	不明	不明	不明	口縁部周辺に自然胎降灰及びボロ付着
422	1127	小壺	V-3	室内焼成室置土 黄赤褐	全体 11/12	5.6	5.4	5.7	×	○	×	
423	1049	家道具蓋 A	V-3	室内焼成室置土 赭黄赤褐	全体 10/12	14.8	5.5	天弁径 6.6	×	○	×	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
424	1050	家道具蓋 A	V-3	室内焼成室置土 黄赤褐 床上	全体 6/12	15.0	5.4	天弁径 6.6	×	不明	不明	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
425	1051	家道具蓋 A	V-3	室内焼成室置土 床上	全体 5/12	(15.1)	5.4	天弁径 6.2	×	○	×	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
426	1052	家道具蓋 A	V-4	室内焼成室置土 黄赤褐	全体 6/12	14.2	5.6	天弁径 (8.0)	×	不明	不明	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
427	1025	家道具蓋 A	V-6	室内焼成室置土 黄赤褐	天井部完形	—	—	天弁径 5.7	○	×	○	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
428	1107	家道具蓋 A	V-4	3層 赭褐	全体 6/12	15.7	5.2	天弁径 (6.4)	×	不明	×	底部外面に自然胎降灰、歪み大
429	1105	家道具蓋 A	V-6	3層 黄赤褐	全体 4/12	(16.0)	8.0	天弁径 6.2	×	○	×	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
430	1106	家道具蓋 A	V-6	3層 黄赤褐	全体 2/12	(14.8)	5.3	天弁径 5.8	×	不明	×	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
431	1053	家道具蓋 B	V-3	室内焼成室置土 赭黄赤褐	全体 6/12	(14.8)	5.0	天弁径 6.0	×	○	×	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
432	1104	家道具蓋 B	W-5	1層 黄灰褐	天井部 10/12	—	—	天弁径 5.7	×	○	×	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
433	1109	家道具蓋 B	W-5	2層 黄灰褐	全体 2/12	(14.8)	4.5	天弁径 5.8	×	○	×	底部外面に自然胎降灰及びボロ付着
434	1128	楕台	—	室内	全体 11/12	長さ 11.55	幅 12.0	厚さ 7.5	—	—	—	
435	1129	楕台	—	室内	全体 11/12	長さ 13.5	幅 13.5	厚さ 6.8	—	—	—	
436	1130	その他家道具類	V-6	3層 赤黄褐	全体 10/12	長さ 16.45	幅 22.35	厚さ 5.5	—	—	—	板状、障壁か

第8表 大針11号窯 出土遺物観察表

法量値の単位はcm、()内は推定値

遺物番号	器体番号	器種	グリッド	遺構・層序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指子	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
437	7082	碗 1	A-1	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	ほぼ完形	13.2	5.6	4.7	○	○	○	口縁部に自然胎が薄く残る
438	7196	碗 1	A-1	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	ほぼ完形	13.2	5.9	4.4	○	○	×	高台の歪みが大い
439	7195	碗 1	A-2	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	完形	13.6	6.0	4.6	○	○	×	構成不足
440	7198	碗 1	A-2	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	全体 11/12	14.4	5.5	4.6	○	○	×	高台の歪み大
441	7107	碗 1	A-1	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	全体 10/12	13.5	6.0	4.4	○	○	×	口縁部に自然胎が残る
442	7081	碗 1	A-1	SK1 覆土 黄赤褐	完形	13.8	6.1	4.8	○	○	×	歪み大
443	7498	碗 1	A-1	2層 黄褐	全体 4/12	(13.5)	5.6	4.2	○	○	×	
444	7546	碗 1	A-2	全部一括	全体 9/12	(13.6)	5.6	4.5	○	○	×	
445	7548	碗 1	A-2	全部一括	全体 5/12	(14.0)	5.7	4.3	○	○	×	
446	7547	碗 1	A-2	全部一括	全体 5/12	(13.2)	5.9	4.5	○	○	○	
447	7531	碗 1	A-2	2層 黄褐	底部 10/12	—	—	4.3	○	○	×	高台の歪み大
448	7380	碗 2	A-1	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	ほぼ完形	11.4	5.0	4.2	○	○	×	底部糸切痕はナズ消し気味
449	7379	碗 2	A-1	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	ほぼ完形	11.8	4.7	4.0	○	○	○	口縁部に自然胎が残る。底部糸切痕の大 半ナズ消し
450	7382	碗 2	A-1	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	全体 11/12	11.2	4.8	3.7	○	○	○	底部糸切痕はほぼナズ消し
451	7685	碗 2	—	周回表保	全体 5/12	(12.0)	5.1	4.3	○	○	○	
452	7563	碗 2	A-2	2層 黄褐	底部完形	—	—	4.0	○	○	×	
453	7585	碗 2	A-2	2層 黄褐	底部 9/12	—	—	4.0	○	○	○	
454	7397	無高台碗	A-1	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	完形	13.4	5.1	5.3	○	○	×	外面にごく薄く自然胎が残る
455	7406	無高台碗	A-2	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	全体 7/12	(13.0)	5.2	5.4	○	○	×	
456	7402	無高台碗	A-2	SK1 覆土 黄赤褐(遺物集中)	全体 11/12	13.3	5.4	5.2	○	○	×	歪み大
457	7690	無高台碗	—	周回表保	全体 3/12	(13.4)	5.7	5.3	○	○	×	外面の大半に薄く自然胎が付着
458	7587	無高台碗	A-2	2層 黄褐	底部完形	—	—	5.4	○	○	○	

造物 番号	器体 番号	器種	グリッド	造構・階序	残存率	口径	器高	高台径 底径	内面 指ナシ	底部外面		備考
										糸切痕	板目痕	
459	7566	無高台碗	A-2	2層 黄釉	底部6/12	—	—	4.9	○	○	×	外面全体に薄くまばらに自然釉が掛かる
460	7419	穿孔碗	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体7/12	(14.6)	5.0	4.8	○	○	×	底部にφ1.6cm程度の円孔あり
481	7415	刺線碗	A-1	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体4/12	(13.7)	5.8	4.6	○	○	×	内面に斜格子の刺線あり。底部糸切痕はほぼナシ消し
482	7418	刺線碗	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	底部7/12	—	—	4.2	○	○	×	内面に斜格子の刺線あり。底部糸切痕はほぼナシ消し
483	7570	刺線碗	A-2	2層 黄釉	口縁部2/12	(14.2)	—	—	—	—	—	外面に1筋の片割彫り状刺線
484	7434	小皿	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体10/12	7.8	1.8	4.8	○	○	×	
485	7425	小皿	A-1	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体10/12	7.5	1.8	4.6	○	○	○	
486	7429	小皿	A-1	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体9/12	7.8	1.7	5.0	○	○	×	
487	7562	小皿	A-2	2層 黄釉	全体4/12	(7.6)	(3.5)	4.2	○	○	×	歪み大
488	7581	小皿	A-2	2層 黄釉	全体4/12	(7.6)	(3.4)	(4.0)	○	○	×	
489	7579	小皿	A-1	2層 黄釉	全体11/12	7.8	1.1	4.8	○	○	○	
470	7724	小皿	—	周辺表採	全体7/12	(8.2)	1.3	4.5	○	○	○	口縁部を歪取り。歪み大
471	7723	小皿	—	周辺表採	全体9/12	(7.5)	1.8	4.4	○	○	○	口縁部部に自然釉が掛かる
472	7438	鉢	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	口縁部破片	—	—	—	—	—	—	
473	7454	冴道具蓋 A	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体9/12	14.0	5.5	天井径 4.2	○	不明	不明	外面全体に自然釉が掛かる
474	7444	冴道具蓋 A	A-1	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体9/12	13.8	5.7	天井径 5.3	○	不明	不明	外面全体に自然釉と窯口
475	7473	冴道具蓋 A	A-1	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体4/12	(11.4)	5.2	天井径 3.8	○	不明	不明	外面全体に自然釉と窯口
476	7739	冴道具蓋 A	—	周辺表採	天井部完形	—	—	天井径 4.3	○	不明	不明	外面全体に自然釉と窯口
477	7591	冴道具蓋 B	A-1 (南半)	1層 黄赤土(攪乱層)	全体4/12	(14.6)	5.0	天井径 5	×	○	×	外面全体に自然釉が掛かる
478	7477	冴道具蓋 B	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	天井部完形	—	—	天井径 4.8	○	○	不明	外面全体に自然釉が掛かる
479	7747	冴道具蓋 C	—	周辺表採	天井部6/12	—	—	天井径 4.8	×	○	×	外面全体に自然釉が掛かる
480	7465	燒台	A-1	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	ほぼ完形	長さ 11.5	幅 12.4	高さ 6.3	—	—	—	
481	7496	燒台	A-1	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	ほぼ完形	長さ (11.7)	幅 11.7	高さ 6.6	—	—	—	
482	7693	碗	—	周辺表採	全体6/12	(15.2)	8.0	4.8	×	○	×	混入品。高台歪みあり
483	7423	碗	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	底部完形	—	—	6.4	×	○	×	混入品。内面に自然釉が掛かる
484	7424	碗	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	底部完形	—	—	6.4	×	○	×	混入品。内面に薄く自然釉が掛かる
485	7577	碗	A-2	2層 黄釉	底部7/12	—	—	7.2	○	○	×	混入品。内面の指ナシ調整はごく軽いの
486	7572	碗	A-1 (南半)	1層 黄赤土(攪乱層)	底部完形	—	—	6.3	×	○	×	混入品
487	7697	碗	—	周辺表採	底部完形	—	—	6.0	×	○	×	混入品。高台歪みあり
488	7437	小皿	A-2	SK1 覆土 黄赤釉(遺物集中)	全体5/12	7.8	2.0	3.8	×	○	×	混入品
489	7730	小皿	—	周辺表採	全体5/12	(7.6)	2.1	4.2	×	○	○	混入品
490	7729	小皿	—	周辺表採	全体7/12	(7.8)	2.3	3.5	×	○	×	混入品
491	7584	小皿	A-2	2層 黄釉	全体8/12	(7.8)	2.9	3.8	○	○	×	混入品
492	7585	小皿	A-2	2層 黄釉	底部完形	—	—	4.0	○	×	×	混入品
493	7749	冴道具蓋	—	周辺表採	全体6/12	(16.7)	6.4	天井径 6.4	×	不明	不明	混入品。外面全体に自然釉と窯口付着
494	7586	冴道具蓋	A-2	2層 黄釉	全体7/12	(14.3)	5.3	天井径 5.3	×	不明	不明	混入品。外面全体に自然釉と窯口付着

写真図版 1 大針6号窯調査区全景



1. 6号窯調査区調査前全景 2. 6号窯調査区調査後全景

写真図版 2 大針8・9号窯調査区全景



1



2

1. 8・9号窯調査区調査前全景 2. 8・9号窯調査区調査後全景

写真図版 3 大針6号窯発掘調査(1)



1



2



4



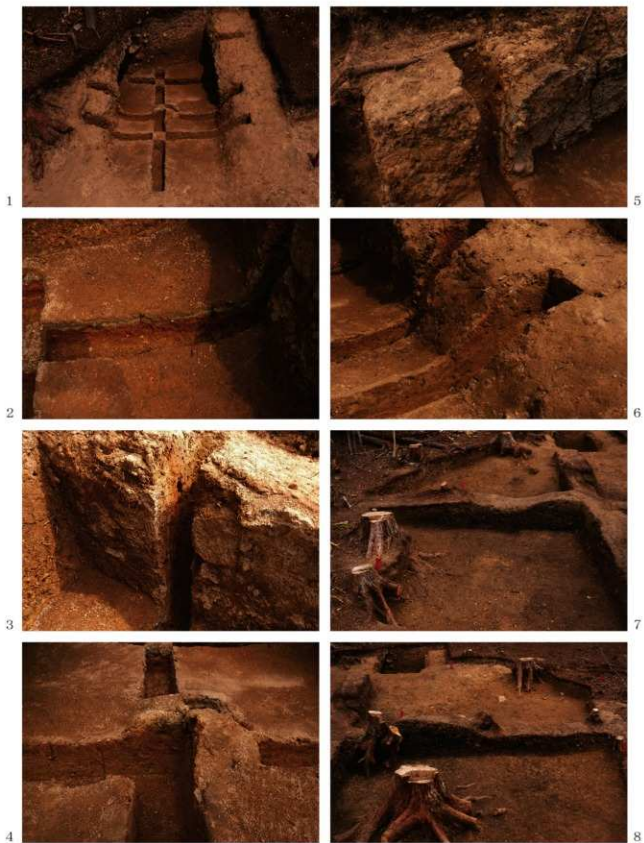
3



5

1. 6号窯体検出状況 2. 6号窯体覆土断面 3. 6号窯体分楹柱 4. 6号窯体右壁面
5. 6号窯体左壁面

写真図版 4 大針6号窯発掘調査(2)



1. 6号窯体断ち割り完了状況 2. 6号窯体焼成室断ち割り (C-C')
 3. 6号窯体焼成室断ち割り (C-C' 右壁) 4. 6号窯体分揃柱断ち割り (D-D')
 5. 6号窯体分揃柱断ち割り (D-D' 左壁) 6. 6号窯体燃焼室断ち割り (E-E' 右壁)
 7. 6号窯物原B-3区東壁土層断面 8. 6号窯物原C-3区東壁土層断面

写真図版 5 大針6号窯発掘調査(3)、大針8号窯発掘調査(1)



1



5



2



6



3



7



4

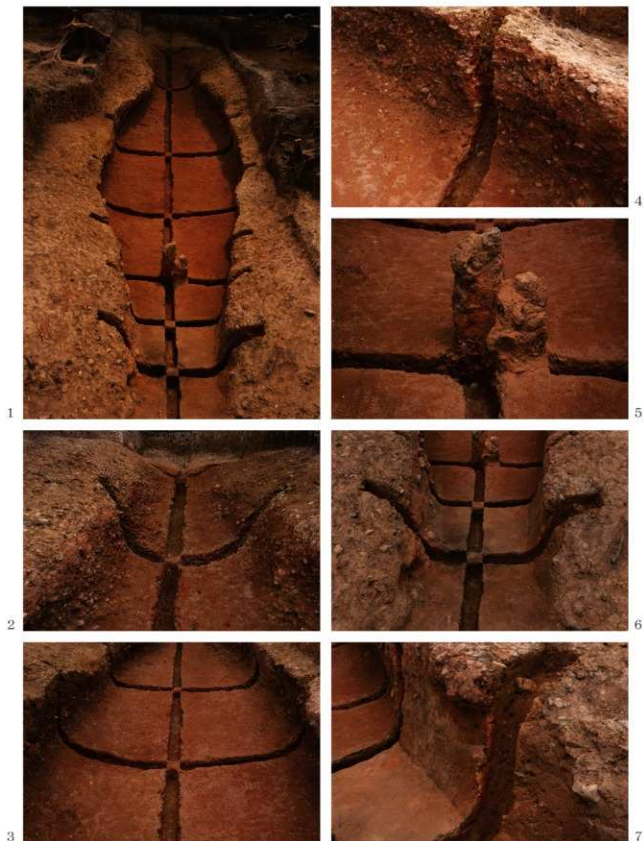
1. 6号窯物原B-2・3区南壁土層断面 2. 6号窯物原B-3・4区南壁土層断面
 3. 6号窯掘り抜き排土断面 4. 6号窯サブトレンチ完掘状況 5. 8号窯体完掘状況
 6. 8号窯体覆土断面 7. 8号窯体分楹柱

写真図版 6 大針8号窯発掘調査(2)



1. 8号窯体焚口～燃燒室左壁面 2. 8号窯体焚口～燃燒室右壁面 3. 8号窯体燒成室右壁面
 4. 8号窯体煙道部右壁面 5. 8号窯体煙道部先端 6. 8号窯内煙道部遺物檢出狀況
 7. 8号窯内燒成室燒台殘存狀況 8. 8号窯内燒台堆積狀況

写真図版 7 大針8号窯発掘調査 (3)



1. 8号窯体断ち割り完了状況 2. 8号窯体煙道部断ち割り (D-D')
 3. 8号窯体焼成室断ち割り (F-F') 4. 8号窯体焼成室断ち割り (F-F' 右壁)
 5. 8号窯体分埴柱断ち割り (G-G') 6. 8号窯体燃焼室断ち割り (H-H')
 7. 8号窯体燃焼室断ち割り (H-H' 右壁)

写真図版 8 大針8号窯発掘調査(4)



1. 8号窯SK2覆土断面 2. 8号窯SK2完掘状況 3. 8号窯SD1覆土断面
4. 8号窯SD1完掘状況 5. 8号窯平坦面完掘状況 6. 8号窯焚口前炭化樹被検出
7. 8号窯前庭部および掘り抜き排土 8. 8号窯掘り抜き排土断面



1



5



2



6



3



7



4



8

1. 8号窯物原R-6区東壁土層断面

3. 8号窯物原R-7区東壁土層断面

5. 8号窯物原R-6区北壁土層断面

7. 8号窯物原S-6区北壁土層断面

2. 8号窯物原S-6区東壁土層断面

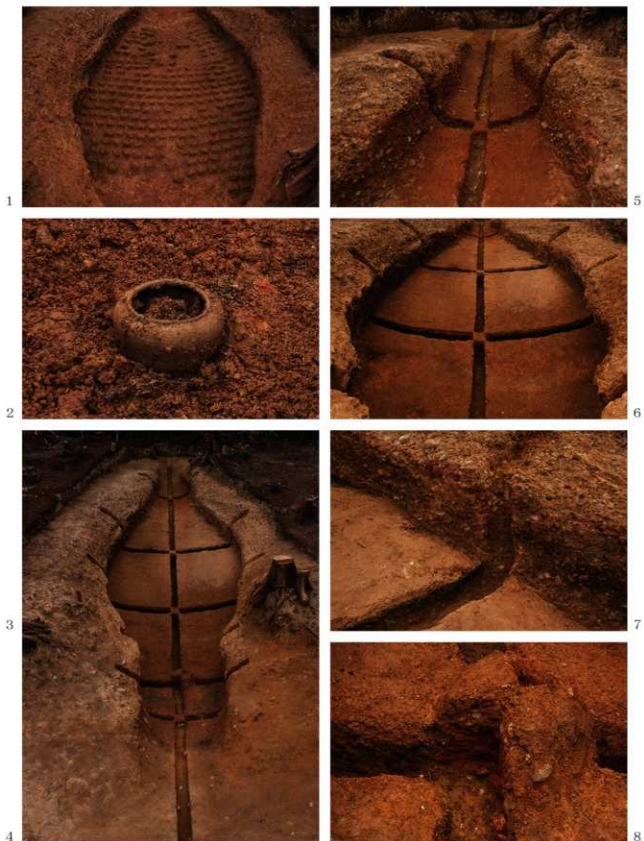
4. 8号窯物原S-7区東壁土層断面

6. 8号窯物原R-7区北壁土層断面

8. 8号窯物原S-7区北壁土層断面



1. 9号窯体完掘状況 2. 9号窯体覆土断面 3. 9号窯体分焰柱
4. 9号窯体焚口～燃焼室右壁面 5. 9号窯体焼成室右壁面 6. 9号窯体焼成室～煙道部右壁面
7. 9号窯体煙道部右壁面



1. 9号窯体焼成室焼台残置状況 2. 9号窯内小壺出土状況 3. 9号窯体断ち割り完了状況
 4. 9号窯体煙道部断ち割り (C-C') 5. 9号窯体焼成室断ち割り (E-E')
 6. 9号窯体焼成室断ち割り (E-E' 右壁) 7. 9号窯体分楹柱断ち割り (F-F')



1



5



2



6



3



7



4



8

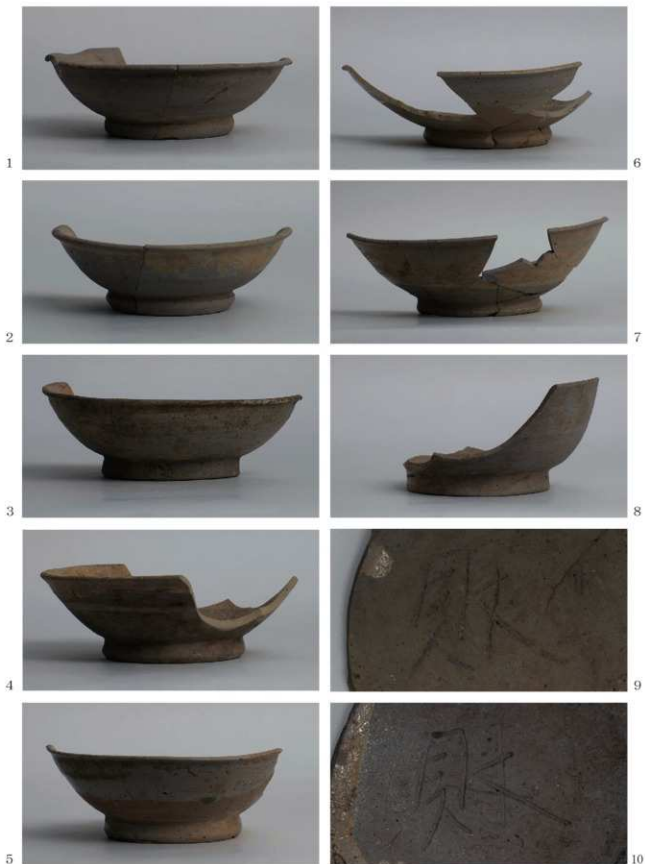
1. 9号窯体燃烧室断ち割り (G-G') 2. 9号窯SK1完掘状況
3. 9号窯物原V-6区東壁土層断面 4. 9号窯物原W-6区東壁土層断面
5. 9号窯物原V-6区北壁土層断面 6. 9号窯物原W-6区北壁土層断面
7. 9号窯物原W-7区東壁土層断面 8. 9号窯掘り抜き排土断面

写真図版 13 大針 11 号窯発掘調査



1. 11号窯調査区遠景 2. 11号窯調査区調査前全景 3. 11号窯調査区の調査後全景
 4. 11号窯SK1完掘 5. 11号窯土層断面(a-a') 6. 11号窯土層断面(b-b' 西半部)
 7. 11号窯土層断面(b-b' 東半部) 8. 11号窯作業風景

写真図版 14 大針6号窯出土遺物(1)



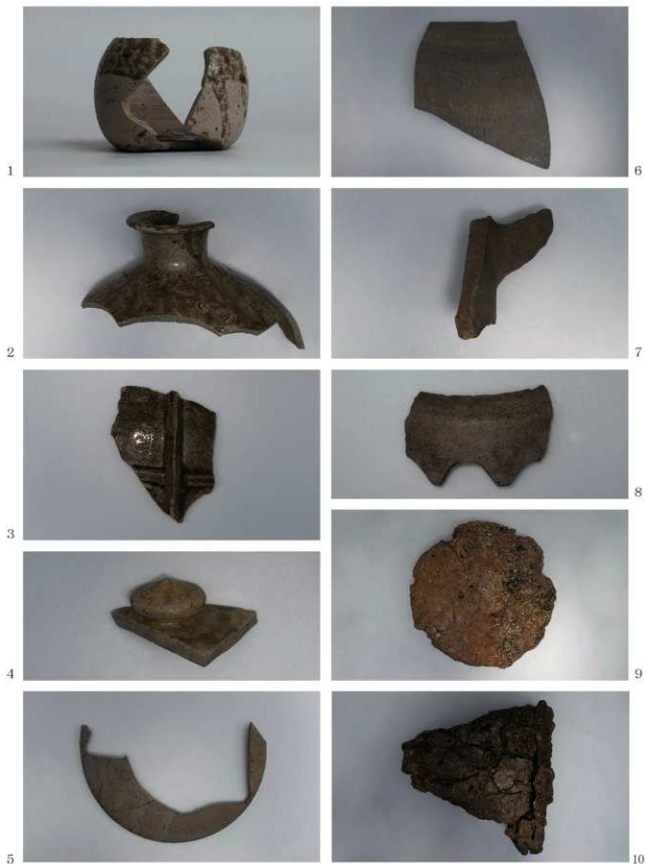
1. 碗A 1 (第10図6) 2. 碗A 1 (第10図7) 3. 碗A 2 (第10図14)
 4. 碗A 2 (第10図15) 5. 碗A 2 (第10図21) 6. 碗A 3 (第11図36)
 7. 碗A 3 (第11図38) 8. 碗B (第11図41) 9. 底部内面に刻書のある碗A 1 (第11図46)
 10. 底部底部に刻書のある碗A 2 (第11図47)

写真図版 15 大針6号窯出土遺物(2)



1. 皿1 (第12図55) 2. 皿2 (第12図58) 3. 皿2 (第12図67)
 4. 皿3 (第12図76) 5. 皿3 (第12図78) 6. 底部内面に刻書のある皿2 (第13図99)
 7. 耳皿 (第13図105) 8. 長頸瓶 (第14図115) 9. 長頸瓶 (第14図120)
 10. 広口瓶 (第15図122) 11. 画花文のある広口瓶 (第15図128)

写真図版 16 大針6号窯出土遺物(3)



1. 小瓶 (第15図132) 2. 小瓶 (第15図135) 3. 四足壺 (第16図142)
 4. 蓋(摘み部、第16図149) 5. 蓋 (第16図150) 6. 須恵器 甕 (第17図158)
 7. 須恵器 甗 (第17図159) 8. 王冠状卜子 (第17図165) 9. 焼台 (第18図170)
 10. 障炎壁 (第18図172)

写真図版 17 大針8号窯出土遺物(1)



1. 碗 (第29図177) 2. 碗 (第29図181) 3. 碗 (第30図203) 4. 碗 (第30図206)
 5. 碗 (第30図210) 6. 碗 (第31図223) 7. 碗 (第31図224)
 8. 無高台碗 (第31図228) 9. 無高台碗 (第31図229) 10. 無高台碗 (第31図231)

写真図版 18 大針8号窯出土遺物(2)



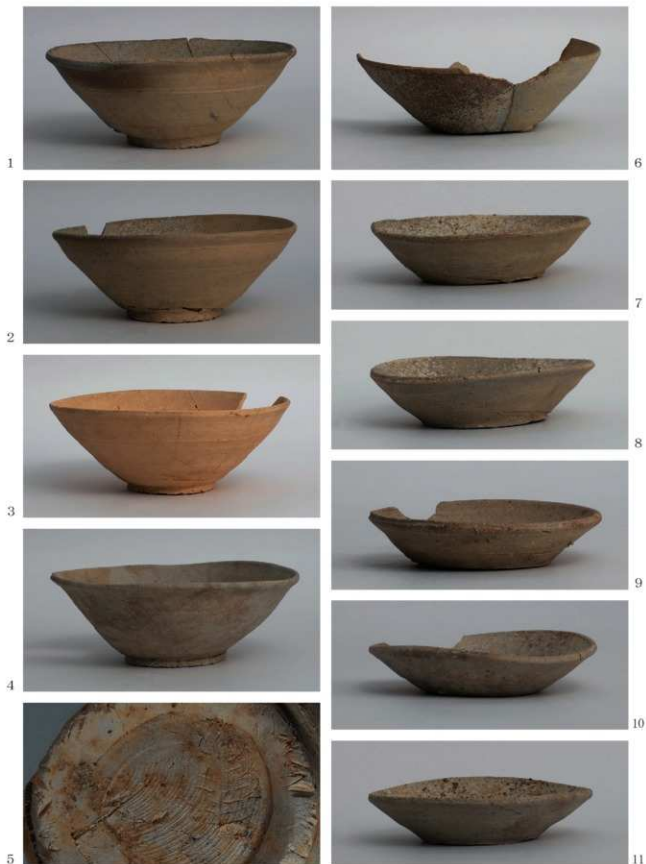
1. 無高台碗 (第31図234) 2. 小皿 (第32図248) 3. 小皿 (第32図250)
 4. 小皿 (第32図262) 5. 小皿 (第32図263) 6. 小皿 (第32図268)
 7. 小皿 (第32図269) 8. 平高台皿 (第32図285) 9. 平高台皿 (第32図286)
 10. 鉢 (第33図289)

写真図版 19 大針8号窯出土遺物(3)

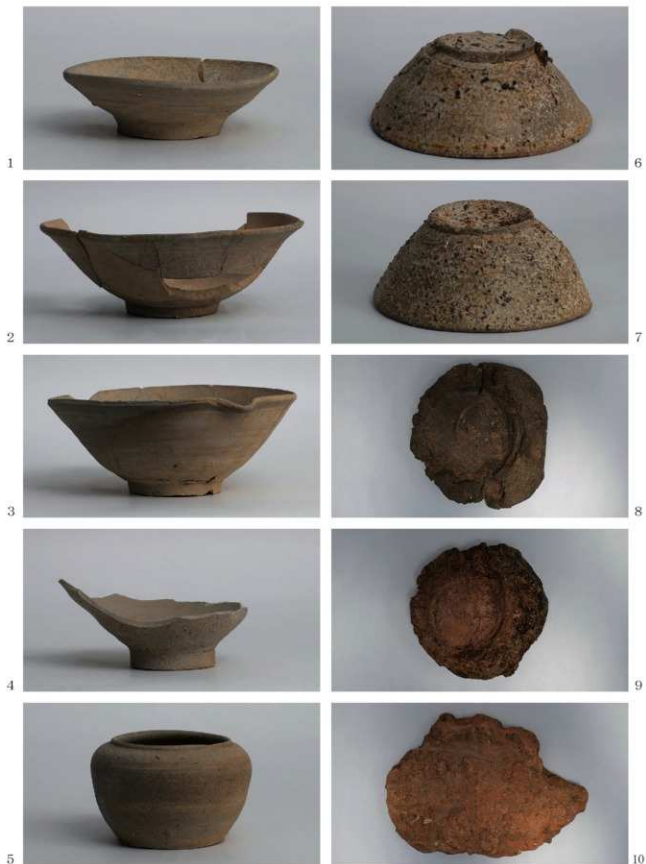


1. 無高台鉢(第33図290) 2. 片口鉢(第33図291) 3. 仏供(第33図294)
 4. 六器(第33図296) 5. 窯道具蓋A(第34図304) 6. 窯道具蓋A(第34図308)
 7. 窯道具蓋C(第34図309) 8. 窯道具蓋C(第34図310) 9. 窯道具蓋C(第34図311)
 10. 焼台(第34図314)

写真図版 20 大針9号窯出土遺物(1)



1. 碗 (第42図321) 2. 碗 (第42図322) 3. 碗 (第42図325) 4. 碗 (第42図353)
 5. 碗底部外面の刻線 (第43図358) 6. 無高台碗 (第44図362) 7. 小皿 (第44図373)
 8. 小皿 (第44図374) 9. 小皿 (第44図382) 10. 小皿 (第44図389)
 11. 小皿 (第44図400)



1. 平高台皿 (第45図411) 2. 鉢 (第45図416) 3. 片口鉢 (第45図418)
 4. 仏供 (第45図420) 5. 小壺 (第45図422) 6. 窯道具蓋A (第45図423)
 7. 窯道具蓋A (第45図424) 8. 焼台 (第46図434) 9. 焼台 (第46図435)
 10. 障炎壁 (第46図436)



1. 碗 1 (第 51 図 439) 2. 碗 1 (第 51 図 440) 3. 碗 2 (第 51 図 448)
 4. 無高台碗 (第 51 図 454) 5. 刻線碗 (第 51 図 461) 6. 刻線碗 (第 51 図 462)
 7. 小皿 (第 51 図 464) 8. 小皿 (第 51 図 466) 9. 窯道具蓋 A (第 52 図 473)
 10. 焼台 (第 52 図 481)

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおはり6・8・9・11 とうようはくつちようさほうこくしょ
書 名	大針6・8・9・11 号窯発掘調査報告書
副 書 名	
シリーズ名	多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第100号
編 著 者 名	各務嘉洋
編 集 機 関	公益財団法人多治見市文化振興事業団 埋蔵文化財発掘調査室
所 在 地	〒507-0071 多治見市旭ヶ丘10丁目6番地26 多治見市文化財保護センター内 TEL.090-6088-6672 FAX.0572-74-3709
発行年月日	令和6年2月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	道庁番号					
おおはり6とうようせき 大針6号古窯跡		21204	07683	35° 22' 3"	137° 4' 12"	2019.1.9 ～ 2019.6.14	約590㎡	中央新幹線 建設に伴う 非常口建設
おおはり8とうようせき 大針8号古窯跡	おおはりちようあざやつくり 大針町字屋作309-1、 309-7、353-1	21204	07685	35° 22' 2"	137° 4' 12"			
おおはり9とうようせき 大針9号古窯跡		21204	07686	35° 22' 2"	137° 4' 12"			
おおはり11とうようせき 大針11号古窯跡	おおはりちようあざやつくり 大針町字屋作286-4	21204	07688	36° 22' 12"	137° 4' 1"	2021.12.1 ～ 2021.12.23	約24㎡	変電所建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大針6号古窯跡	生産遺跡	平安時代 10世紀前半	窯体	灰釉陶器、須恵器、窯道具	
大針8号古窯跡	生産遺跡	鎌倉時代 13世紀前葉	窯体、土坑、溝状遺構	山茶碗、窯道具	
大針9号古窯跡	生産遺跡	鎌倉時代 13世紀前葉	窯体、土坑	山茶碗、窯道具	
大針11号古窯跡	生産遺跡	鎌倉時代 13世紀後半 ～14世紀初頭	土坑	山茶碗、窯道具	物原の一部のみ

要 約	<p>大針6号窯は平安時代の灰釉陶器窯である。碗と皿類を主体に少量の瓶・壺類等が出土している。碗・皿類の中には刻書資料もある。実年代は10世紀前半だが、初頭から生産を開始した可能性が高い。窯体の一部は地中に残存する。大針8号窯と9号窯は鎌倉時代の山茶碗窯である。碗と小皿を主体に僅かに六器や小壺等も出土している。実年代はいずれも13世紀前葉で、9号窯→8号窯とほぼ時間差なく稼働したものと考えられる。9号窯は焼成室床面の最大幅が3.2mと、市内の山茶碗窯では最大幅となっている。大針11号窯も鎌倉時代の山茶碗窯である。発掘調査区内に窯体は存在せず、物原の一部と土坑1基を検出している。実年代は13世紀後半～14世紀初頭である。大きく窯式が異なる遺物が出土したが、付近に所在していた大針5号窯（滅失、12世紀後葉）の遺物が混入したものと考えられる。</p>
-----	---

大針6・8・9・11号窯発掘調査報告書

—多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100号—

令和6年2月15日発行

- 編 集 公益財団法人多治見市文化振興事業団
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 室
岐阜県多治見市旭ヶ丘10丁目6番地26
〒507-0071 TEL090-6088-6672 FAX0572-74-3709
- 発 行 多 治 見 市 教 育 委 員 会
岐阜県多治見市音羽町1丁目223番地
〒507-8787 TEL0572-22-1111 FAX0572-23-5862
- 公益財団法人多治見市文化振興事業団
岐阜県多治見市豊岡町1丁目55番地
〒507-0034 TEL0572-24-6352 FAX0572-24-1631
- 印 刷 河 村 印 刷
岐阜県多治見市高田町4丁目90番地
〒507-0018 TEL0572-22-7862 FAX0572-22-7934
-